

立命館京都学
優秀卒業論文集
2021

立命館大学 文学部 人文学科
地域研究学域 京都学専攻

「立命館京都学 優秀卒業論文集 2021」

【はしがき】

本論文集は、2021年度に提出された卒業論文のなかで、特に優秀と認められた論文を収録したものです。2021年度の優秀論文は2点であり、「中世における八幡信仰—『八幡大菩薩口訣』を中心に—」と題した論考は、先行研究の動向に目を配りながら、史料を丹念に読み解き、中世の八幡信仰について議論したものでした。一方、「長江家住宅の文化継承における産学連携の役割—SNSに着目して—」では、SNSの投稿内容を参考にして、長江家住宅という京町家住宅の保全を問うたものです。一方は古文書を資料とし、他方は現代社会ならではの資料に着目したものであり、こうした用いる資料や解釈において多様な展開がみられることが、京都学の特徴といえるかもしれません。

立命館大学京都学は、2020年度より「京都学クロスメジャー」という文学部全学域・専攻から履修生を募ることで、各学問分野における手法の融合や超域を通じ、独自の歴史的価値を有する「京都」にアプローチすることとなりました。

立命館京都学が目指す、人文学の各学問分野の視点や論点、研究手法を理解した上での、京都に対する深い認識は容易なことではありません。しかし、学生諸君が、さまざまな講義で得た知識や視点を自らのものとし、多様な対象と新たな発想での探究を積み重ねることが、立命館京都学の進展につながるでしょう。そして、クロスメジャーとしての新たな試みは、大学内での学びだけで達成されるものではありません。地域に学び、地域の皆様との協同により発展していくものと確信します。

2022年7月1日

立命館大学文学部地域研究学域

京都学専攻 教員一同



清心門の東角より北西方向を写す

(2022年6月 松尾撮影)



清心館4階南西角の窓より写す

(2022年6月 松尾撮影)

【目次】

長江家住宅の文化継承における産学連携の役割

－SNSに着目して－

村尾 麻里 pp.1～35

中世における八幡信仰

－『八幡大菩薩口決』を中心に－

松崎 恵哲 pp.84～36

長江家住宅の文化継承における産学連携の役割

—SNSに着目して—

村尾 麻里

はじめに

2020年7月、観光客であふれかえる京都が例年になく静かだった。新型コロナウイルス感染拡大の影響で祇園祭の山鉦巡行が中止され、例年賑わうはずの四条烏丸界限が驚くほど閑散としていた。それは京都市下京区新町通綾小路下る船鉦町 394¹に位置する長江家住宅でも同じだった。本来であれば祇園祭の期間中には屏風祭を開催し、1000 人ものも来場者で賑わっているはずの長江家住宅(図 1,図 2)。2020 年は祇園祭の中止に伴い屏風祭の開催を断念した。屏風祭とは、江戸時代中期から続く歴史ある行事で、京町家の伝統の 1 つである。長江家住宅の屏風祭は近年、株式会社フージャースホールディングスと立命館大学文学部「京都学フィールドワークⅢ」の受講生が協力し、産学連携で開催していた。私もその受講生の一人で 2020 年の屏風祭に参加する予定であった。しかし屏風祭が開催されず産学連携で京町家の文化を守り伝える活動ができなくなった。これは長江家住宅にとって、京町家の伝統文化や魅力を発信する 1 年に一度の機会を失ったことになる。このままコロナウイルスが収束するまでイベントを行えないとすると、これまで引き継がれてきた京町家の文化が廃れていくのではないかと考えた。そこで、これまでのイベントに代わる京町家の新たな情報発信を試みようとして、2020 年 7 月に長江家住宅の公式 Instagram アカウントを開設した。「京都学フィールドワークⅢ」の授業内にて Instagram のアカウント開設を提案し、授業終了後は長期インターンシップ生としてアカウントの運営に携わってきた。2021 年 8 月からは Twitter アカウントの運営も開始し、現在も 2 つの SNS 運営に携わっている。(2021 年 12 月現在)本論では SNS 運営活動で経験したことを元に、産学連携での活動が長江家住宅の文化継承にどのような影響を及ぼしたのか、そして産学連携での活動は必要なのか考えていきたいと思う。

第1章 長江家住宅と産学連携

第1節 研究方法

研究方法はまず、長江家住宅の公式 Instagram 開設から現在までの運用状況を、フォロワーや投稿内容から分析していく。その後、Instagram 開設以前より利用されていた長江家住宅の Facebook と比較し、産学連携で活動している Instagram がどのような効果を発揮しているのか分析する。次に長江家住宅の関係者への聞き取り調査を行い、産学連携での SNS 活動に対する考え方を調査する。そして長江家住宅の文化継承において産学連携活動が必要であるか考える。

第2節 長江家住宅の造りと歴史

長江家住宅は全体の間口が 13m、奥行 54m、面積 700 平米で、中二階型の大型京町家である²。主屋が南棟と北棟の二棟に別れている。南棟一階はミセ・ゲンカン・ダイドコ・オーク・化粧部屋・ハナレからなり、奥庭を囲むような形である。北棟一階はミセ・ダイドコ・オークからなり、南棟のハナレとの間に庭がある(図3)。長江家住宅の公式パンフレット(株式会社フージャースホールディングス発行)によると、「南棟の走り庭には火袋と呼ばれる吹き抜け空間があり、煙だしや通気などの役割を担っている³。屋根は京町家の特徴である伝統軸組工法が使用され、何本もの通し柱と梁と棟木が大屋根を支えている⁴。おくどさんには、荒神棚を設け、三宝荒神を祀り、商家の伝統を引き継いでいる。」とのことだ(図4)。

長江家が現在の土地で生活を始めたのは 1822 年で、長江家 3 代目当主大阪屋伊助が始まりである⁵。1868 年に現主屋の北棟を建設、1875 年に北棟背面の裏地に大蔵を建設し、1906 年に 6 代目当主長江伊三郎が南側の隣地を買収した⁶。1907 年に表屋づくりの主屋南棟と離れ座敷を新築、南棟にも新しい蔵を移建し、1915 年に化粧部屋と浴室を新築し、商売と生活は主に南棟で行うようになった⁷。そして 2005 年に北棟、南棟、離れ座敷、化粧部屋、土蔵二棟の合計 6 棟が京都市指定有形文化財に指定された⁸。

第3節 産学連携のはじまりと文化継承方法

長江家住宅の学芸員である高木良枝氏によると、長江家住宅と立命館大学の出会いについては「8 代目当主である長江治男氏のご高齢になり、後継者が不在であったため長江家のみで建物を継承していくことが難しくなった。そのため 2009 年頃より、長江家住宅の維持管

理方法について、立命館大学と協力して考えるようになった。当時、立命館大学は祇園祭の研究をしたいと考えていたために、船鉾町に所在する長江家住宅との関係構築に前向きだった」とのことだった。2011年からは立命館大学アート・リサーチセンターが所蔵品のアーカイブを開始し909点のデータベースを作成した⁹。

フージャースホールディングスとの出会いについては「2013年頃から長江家住宅では、長江家住宅講座の開催やFacebookの開設など、積極的に見学してもらうことや、多くの人に情報発信を行うことに注力していた。その中で、偶然長江家住宅講座に参加し長江家住宅に興味を持ったフージャースホールディングスの社員がきっかけとなり、長江家住宅とフージャースホールディングスの間で建物譲渡の話が始まった。」とのことだ。

2015年5月27日、長江家8代目当主である長江治男氏から「末永く大事にしてほしい」という思いで株式会社フージャースホールディングスへ、敷地と建物が継承された¹⁰。それと共に、長江家住宅に残る所蔵品は立命館大学へ継承され、産学連携の覚書が締結された。長江家住宅に設置されている案内によると、覚書には京都固有の暮らしの文化、空間の文化、まちづくりの文化の継承と発展のために長江家住宅を維持・保全・活用していくという内容が記されている。その後産学連携に加え京都市等の支援のもとで、日々の維持管理、年中行事の運営、所蔵品の研究、研修、宿泊等の活用など、幅広い活動を行っている。現在フージャースホールディングスは長江家住宅の建物内部をオフィスとして利用しており、立命館大学は所蔵品のデジタルアーカイブを作成するなど、研究を続けている(2021年12月現在)。

第2章 Instagram アカウントの開設

第1節 アカウントの概要

「京都学フィールドワークⅢ」の授業では毎年、産学連携で長江家住宅の屏風祭の展示企画や、当日の接客を行っていた。しかし2020年は新型コロナウイルスの影響により、屏風祭を開催することが叶わなかった。対面式でイベントを開催することはできないが、オンライン上であればイベントに代わる情報発信ができるのではないかと思い、公式Instagramアカウントの開設を提案した。既にFacebookアカウントはあったが、更新頻度が少ない点や日本国内でのアクティブユーザー数が減少していることを踏まえ、新たにInstagramアカウント

を作成することを選択した¹¹。フージャースホールディングス CSR 課の竹田氏と、高木氏から開設の許可を得た上で投稿を開始した。

そもそも Instagram とは 2010 年にスタートした海外発祥の写真共有 SNS サイトである¹²。日本でも 2014 年にリリースされ若者を中心に利用者数が拡大し、現在日本国内のユーザー数は 3300 万アカウントを超える¹³。男女比は 4:6 で女性が多く利用しているが、性別世代に関係なく現在まで利用者数が拡大している¹⁴。Instagram の特徴としては、スマートフォンに開発されたためパソコン用のアプリが無い点と、文章ではなく写真やビデオの共有に特化していることなどが挙げられる。

2020 年 7 月 14 日にアカウントを設立し、2021 年 12 月現在まで投稿を継続している。発信は私と高木氏、フージャースホールディングス社員の小川由紀恵氏の 3 人を中心に行っている。2021 年 8 月以降は、立命館大学から新たに 2 人の学生が参加し、立命館大学の学生 3 人・高木氏・小川氏の 5 人が中心となり活動を行っている。2020 年 7 月から投稿し、7 月に 5 件、8 月に 2 件投稿し、9 月は 1 件のみ投稿した。2020 年 10 月から本格的に投稿を開始し、毎週水曜日と土曜日に投稿している。投稿内容は、長江家住宅の内部紹介から空間の活用方法、近所の情報まで、幅広く投稿している。これまでの合計投稿数は、集計を行った 2021 年 10 月 1 日時点で 119 件であり、フォロワー数が 1120 アカウント、フォロワー数が 1288 アカウントとなっている。

第 2 節 投稿内容の内訳

投稿内容は長江家住宅の内部を紹介している投稿が 33 件、大掃除や大寒などの季節・行事に関わる投稿が 28 件、長江家住宅周辺の飲食店や建物を紹介している近所散歩シリーズが 9 件、ヨガや味噌造りなどを行い長江家住宅の新しい利用方法を発信する空間活用例の投稿が 6 件、2020 年 3 月に行った特別公開や他の町家のイベントなどの告知を行った投稿が 10 件、長江家住宅の職員が食べたおやつが 8 件、立命館大学によるデジタルアーカイブに関わる投稿が 5 件、所蔵品の投稿が 8 件、その他京町家減少を表わした動画や暮らしの知恵など分類できない投稿が 11 件だった(図 5)(表 1)。投稿してから 24 時間限定で閲覧できるストーリー機能では日常の出来事を一週間に 1 回程度不定期で投稿している。

投稿内容は長江家住宅の紹介や歴史・文化などの学びある投稿から、おやつや飲食店の投稿など、長江家住宅に関わりつつも親しみやすく楽しめる投稿が幅広くある。特に空間活用例の投稿は、長江家住宅の空間を活かしつつヨガや味噌造りや音楽演奏会場として利用し

たことで、これまでになかった町家空間の新たな活用方法を発信しており、町家の保存にも繋がる投稿であると考えられる。このような投稿を増やすことで京町家の保存に興味を持つ人が増えることが理想である。

フォロワーからの評価が高い投稿についてだが、「いいね！」の数では投稿時のフォロワーの数で明らかな差が出ており比較できないため、投稿が保存されている回数で投稿の評価を決める。保存されている数が多い投稿を評価が高い投稿だとすると、上位投稿のうち 3 つの投稿が近所散歩シリーズ、3 つの投稿がリールでの投稿、3 つの投稿が庭の写真であると分かった(図 6)。このことから、庭を撮影した投稿が魅力的に思われていること、長江家住宅の近所(特に飲食店)に興味を持っている人が多いこと、リールの投稿が人気であることが考えられる。今後はこのデータをもとに、動きのあるリール動画の作成など、フォロワーの好みに寄り添った投稿をしていこうと考える。

第 3 節 フォロワー数の推移と特徴

アカウントを設立した 7 月から 8 月までの 1 ヶ月間で獲得したフォロワーは 63 アカウントだった。その内、フォロワー側から長江家住宅のアカウントをフォローしてくれた数は 20 アカウントほどだった。7 月から 8 月は積極的にフォローせず、フォローされることを待っている状態だったため、9 月はこちら側から長江家住宅のアカウントに興味を持ちそうなアカウントをフォローしていくようにした。これにより 9 月にはフォロワーが 151 アカウントにまで増加した。10 月になり本格的に投稿を開始し、2020 年中にフォロワー数 1000 アカウントという目標を掲げた。フォロワー獲得のためにこちら側から積極的にフォローをし、フォローバックされることによるフォロワーの増加を狙った。毎日 30 以上のアカウントをフォローし、フォローバックされるのは 10 前後のアカウントのみだった。目標に向け着実にフォロワー数を伸ばし、10 月 10 日に 387 アカウントだったフォロワーは 11 月 15 日には 778 アカウントにまで増加した。そして 12 月 5 日に目標だったフォロワー 1000 アカウントを達成した。目標達成後は、こちらからのフォロー活動は控え、フォロワー側からフォローされることを待つようにした。その結果、フォロワー数は毎月わずかに増加し続け、2021 年 12 月現在で 1322 アカウントとなっている。

積極的にフォロー活動をしている際は、京都関連のアカウントや古い町並みが好きなアカウント、建築関連のアカウント、庭関連のアカウントなど、長江家住宅と関連のある分野でフォローバックされそうなアカウントをターゲットに設定し、フォローしていった。その

ためフォローバックされた後、フォローを解除されることは非常に少なく、2020年12月以降も安定したフォロワー数を保っている。こちらからフォローせずともフォロワーを伸ばす工夫が必要であると考え、2021年4月24日の投稿からは、ハッシュタグをリーチしやすいタグに変更する、英語訳をつけてみるなどの工夫を行った。これによりリーチ数が伸び、フォロワーの増加スピードがわずかに上がった(図7)。

フォロワーの国籍は日本人が88.5%であり外国人のフォロワーが少なく、海外への情報発信は十分にできていない(図8)。国内の地域別割合を見ると、京都市が24.8%で、他地域と比べると圧倒的に多くなっている(図9)。フォロワーの投稿内容を見ると、京都の文化や観光地など京都に関わることを投稿しているアカウントが多いため、京都居住者がフォロワーに多い。男女比は男性が65.3%、女性が34.7%と男性が女性の2倍近くになっている(図10)。

年齢層を見ると、45歳～54歳が全体の4分の1を占め、一番割合が大きくなっている。次に55歳～64歳、35歳～44歳が同率で21%となっている。全体のデータをみると、45歳以上のフォロワーが56%を占めていることがわかった(図11)。

Instagramの特徴として、若年層のユーザーが非常に多いことと海外への発信ができることがある。しかしこのアカウントでは日本国内に居住している年配の人のフォロワーが多い。京町家の伝統や魅力が浸透していない若年層や外国人に向けて発信することで、認知度をあげることや京町家を残すことに繋がるのではないかと考える。外国人向けの発信として、4月24日の投稿より、本文に英語訳をつけることやハッシュタグに英語を使うなどの工夫を開始した。その効果もあり国外居住のフォロワーは増えたが、国内居住のフォロワーも増加しているため、割合としては増えていない。若者のフォロワー獲得のため、若者向けの投稿内容やハッシュタグについても今後検討したい。

第4節 他のSNSとの比較

長江家住宅のFacebookは、2013年6月から投稿が開始された。月に1～2件の不定期投稿で、町家イベントの宣伝、所蔵品の紹介、データベースの紹介などが投稿されている。フォロワーは510アカウント(2021年12月現在)。高木氏が主に発信しているため、高木氏の知人や長江家住宅の維持・保存に関わる人が多くフォローしている。写真だけの投稿は少なく、説明書きが1000文字以上の投稿もある。投稿内容は長江家住宅の歴史や文化など、学術的な内容が多く投稿されている。

Instagram と Facebook のフォロワーを比較してみると、数では Instagram が Facebook の 2 倍以上である。Facebook のフォロワーは長江家住宅の維持・保存に関わりのある人々が多いことに対し、Instagram は長江家住宅と関わりのない人が多くフォローしている。そのため、投稿内容にも違いが出ている。Instagram は長江家住宅に関する知識がない人に向け、長江家住宅の内部の説明や誰でも楽しめるおやつの投稿を行っているのに対し、Facebook では古文書の解説やデジタルデータの紹介、所蔵品の詳細な説明などが書かれており、玄人向けの文章となっている。文章量も Instagram が 100～300 文字程度であるのに対し、Facebook は 1000 文字前後書かれている投稿も多くあり、簡単には理解できないような内容となっている(図 12)。また Instagram では英文での投稿を開始し海外に向けた発信に挑戦しているが、Facebook は英語訳を載せる予定がないようだ。さらに投稿に寄せられるコメントを比較すると、Facebook は長江家住宅や京町家について詳しい人からのコメントが多いことに対し、Instagram には長江家住宅について知らない人から「きれいですね」「今度訪れてみたいです」などとコメントが寄せられる。Instagram はストーリー投稿のような日常生活の投稿の効果もあり、Facebook のように堅苦しくない誰でもフォローしやすいアカウントになっている。つまり Instagram は不特定多数の人への発信で、Facebook は特定の関係者への情報発信というように、使い分けができていていると考える。

2020 年 6 月に Twitter のアカウントを作成したものの、Instagram に注力していたためツイートしていなかった。しかし Twitter はリツイート機能がある点で Instagram より拡散性が高いため、集客の際の情報発信ツールとして使用したいと思い、2021 年 8 月からツイートを開始した。イベントがある時期は集客のための宣伝をし、その時期以外高木氏が長江家住宅で過ごす日常を週 2～3 回発信している。現在のフォロワー数は 263 と Instagram には劣るが、毎月 50 人のペースでフォロワーを伸ばしている(2021 年 12 月現在)。猫に関する投稿をした際にリツイートが伸び、「いいね！」数が通常の 10 倍近くまで伸びた。やはり流行りや人気の事柄にあわせたツイートを行うと、一気にツイートを拡散できることが分かった。特別公開などのイベントを宣伝する際も、人気の事柄と絡めてツイートすると、長江家住宅のことを知らない人にも知ってもらえると思う。

Twitter の拡散力を利用し、集客の際の情報発信ツールに使う。Instagram で誰でも親しみやすいビジュアルに力を入れた投稿を作成し、長江家住宅のファンを作る。Facebook では堅苦しく玄人向けの学術的な投稿をし、町家について深く知りたい人を楽しんでもらう。以上

のように、それぞれの SNS で役割分担しつつ連携をとりながら運営していくことで、町家の認知度向上や顧客の獲得に繋がるのではないかと考える。

第5節 特別公開での効果

2021年3月20・21日に長江家住宅で特別公開を行った。通常、長江家住宅は予約制で拝観できるが、新型コロナウイルスの影響を受け拝観受付を停止していた。この公開では「着物の虫干し展」を行い、長江家住宅の蔵に残っていた昭和初期頃の着物や図案帳を展示した。また、立命館大学が調査研究やデジタルアーカイブを進めている長江家旧蔵品に関する古写真、映像、文書などの資料も展示した。感染予防をした中で公開を行ったため、定員を設け事前予約制で公開した。特別公開の宣伝は Instagram での告知、Facebook での告知、近辺のホテルにパンフレットを置くことを中心に行った。2日間の合計で40人が来場し、遠方では愛知県、東京都、兵庫県からの来客があった。

高木氏に、Instagram の宣伝は顧客の獲得に効果があったか聞いたところ「データとして正確な数字は残っていないが効果はあった。拝観のきっかけを尋ねた際 Instagram からチェックしたという声があった。特に「おにわさん」というアカウントが共同で宣伝してくれたことが大きい。SNS でイベントをチェックしている人がいると少なからず実感した。」という回答だった。「おにわさん」とは、日本庭園の写真を投稿している Instagram アカウントの名前であり、3.5万のフォロワーがいる(2021年12月現在)。長江家住宅の Instagram と共同で特別公開の情報を宣伝してくれたために、「おにわさん」のフォロワーで長江家住宅を知らなかった人が、「おにわさん」の宣伝から長江家住宅のアカウントの存在を知り、特別公開にくるといった繋がりが生まれた。また「おにわさん」の Twitter のアカウントでも宣伝してくれたため、Twitter で特別公開について知ったという顧客もいた。Facebook での宣伝では顧客を獲得することができなかった。

Instagram のアカウントを開設したことで、フォロワーが拝観しに来るといった直接的な効果はそれほど多くなかったが、他のアカウントと連動したことによる効果はあったと分かった。ただアカウントのフォロワーを増加させることに注力するのではなく、他の影響力があるアカウントとの繋がりを作ることで、SNS の発信力が上がると分かった。

第6節 他の京町家との比較

長江家住宅の Instagram アカウントの特性を知るために、他の京町家の SNS について調査する。杉本家住宅は、1870 年に建築された大規模京町家であり、国の重要文化財に指定されている¹⁵。杉本家住宅の Instagram は 2016 年 11 月の投稿が最初で、不定期に投稿されていた。2020 年 8 月頃から投稿数が増え、一ヶ月に 7~8 件投稿されている。2021 年 5 月のフォロワー数が 171 アカウント、フォロワー数は 133 アカウントだったが、現在はフォロワー数 333 アカウント、フォロワー数 404 アカウントと、フォロワー活動も行なっているようだ(2021 年 12 月現在)。投稿内容は庭の植物、特別公開やクラウドファンディングの宣伝、食に関わること、障子や建具に関わることなどが投稿されている。

秦家住宅は 1869 年に建築された京町家であり、京都市指定文化財である¹⁶。Instagram は 2018 年 12 月に投稿を開始し、一ヶ月に 10 件以上投稿する月もあれば投稿しない月もあるため不定期の投稿である。投稿内容は食にまつわることが多いが、家の内部紹介や植物、行事の画像なども投稿されている。2021 年 5 月のフォロワー数は 181 アカウント、フォロワー数が 63 アカウントで、現在のフォロワー数が 270 アカウント、フォロワー数が 81 アカウントと、フォロワー活動を行わずにフォロワーを増やそうとしているのではないかと考える。(2021 年 12 月現在)

フォロワー数で言うと、長江家住宅が圧倒的に多くなっている。その分毎回の投稿で得る「いいね！」の数やコメントの数は多くなっており、影響力が大きいように思える。秦家住宅と杉本家住宅の「いいね！」の数を比較すると、フォロワーが多いためか杉本家住宅の方が多い。投稿内容を比較すると杉本家住宅は杉本家住宅でとれる野菜や植物と、建物の内部紹介が投稿されているのに対し、秦家住宅は献立紹介が中心で食に注力した投稿が多い。杉本家住宅は瓦の葺き替えクラウドファンディングを宣伝していたこともあり、京町家を保存していくことの大変さを投稿していることが多々ある。秦家住宅は行事と絡めた献立、季節の献立を投稿しており、京町家で撮影されているが京町家に関わる投稿は少ない。杉本家住宅は日常で発見したことをその都度不定期に投稿しており、写真の風景も日常のありのまままで手を加えることなく撮影している。秦家住宅は撮影の角度やライトなどビジュアルにもこだわっていた。

この 2 つの京町家アカウントと比較すると、長江家住宅はフォロワー数が多く投稿ジャンルが非常に広いということが分かった。この点については、産学連携の影響が大きいと考え

る。若者の意見から年長者の意見まで集まるため、トレンドも古くからの慣習も押さえることができるのだと考える。

第3章 聞き取り調査から SNS 活用の効果を考える

第1節 SNS 活動は文化継承に役立つか

ここまで私が産学連携で行ってきたことをまとめてきた。それを踏まえ、産学連携の SNS 活動が文化継承に役立ったのか考えていく。考えるにあたり高木氏と小川氏に聞き取り調査を行った。調査日は 2021 年 10 月 14 日 13:00~16:00 で、質問項目は「SNS 活動は文化継承に役立つか、文化を壊すことに繋がるか」「SNS の活動はコロナ禍において役立ったと感じるか」「産学連携のバランスと利点についてどう考えるか」「今後の長江家住宅における産学連携活動に期待することは何か」「今後も SNS の活動を続けるか」である。

「SNS 活動は文化継承に役立つか、文化を壊すことに繋がるか」に対する二人の意見としては、「結論はまだ出ていない」という。ただ「壊すことに繋がると感じれば早々に手を切るつもり」とのことだ。現時点で続けているということは、なんらかのメリットがあると考えているのだろう。「現代のグローバルで多様な時代では SNS で情報を得たいと思っている人が一定数おり、SNS は切り離せない 1 つのコミュニティになっている。だが建物を活用する人は比較的年配者が多いため、使用する SNS の選択や始めるタイミングが分からない。その点では、立命館大学の学生という若い力が SNS の礎を作ったことが、新たなコミュニティづくりの良ききっかけになった」と考えているようだ。

「SNS の活動はコロナ禍において役立ったと感じるか」という問いに対しては、「役立った」と感じるようだ。「コロナウイルスの影響でイベントなどの活動ができない時期に SNS で発信し続けたおかげで、世間から忘れられてないと感じた。SNS をやることで世間からの見られ方への意識が高まるため、来客がなくとも年中行事や掃除などの細かい気遣いの意識が高まった。伝統は少しずつそがれていくため、SNS を利用して伝統文化を守る意識を高めることはできる」と考えているようだ。

これらの意見を踏まえて、SNS での活動は長江家住宅の文化継承に役立ったと考える。文化を残すことに直接的に効果があったというより、毎週発信し続けたことで「残すことへの意識向上」や「コミュニティづくりのきっかけ」をつくれた点で有効だったと考える。大学生

が毎年参加し新しい活動を提案することで、今後も時代に即したコミュニティづくりが行えると考える。ただし、文化財としての価値を下げるような投稿をすれば即座に活動は打ち切られるだろうと実感した。SNS の活動は必ずやらなければいけないわけではなく、流行りに乗ることが目的でもないため、美しい写真を撮ることやトレンドを押しやることのみには注力してはいけない。長江家住宅を残すための SNS という意識を常に持たなければならぬと再認識した。

第2節 産学連携のバランスと利点

「産学連携のバランスと利点についてどう考えるか」という問いに対しては、「現在のバランスが最善」とのことだった。長江家住宅を所有することでフージャースホールディングス側が得るメリットとしては、CSR¹⁷活動を行うことで会社の社格があがる、海外へのアピールになる、ディベロッパーでも文化的なことを認めているアピールになる、などが挙げられる。立命館側の利点としては、船鉾の研究ができる、長江家住宅の文化財をアーカイブ化して研究することができる、理工学部建築都市デザイン学科や文学部京都学専攻の授業で生徒の学びの場になる、などが挙げられる。そして長江家住宅側は、民間企業から資金援助を受け、文化財保護の面では立命館が補助してくれるため、今後建物も内部の所蔵品も残すことができる。このような関係でバランスがとれているのだ。

しかしこの関係が長く続くとは限らない。「会社側が長江家住宅の土地を売る可能性、研究者がいなくなり立命館側が研究から手を引く可能性もある。現在の会社役員・研究者の考え方であるからこそ成り立っているものであり、関係者が変化することで長江家住宅が取り壊される可能性もある」と高木氏は言う。それぞれのメリットを持つ今の関係が長江家住宅にとってベストであり、それを維持し続ける必要があるということだろう。

第3節 今後の産学連携活動に期待すること

「今後の産学連携活動に期待すること」に対しては、「今のバランスを維持すること」ということだった。今が最善のバランスだと考えているためだろう。「今後も SNS の活動を続けるか」という問いに対しては、「大きな難点がないため、今のところは続ける」とのことだった。しかし「今やっている SNS のコミュニティにしがみつきたいというわけではなく、時代ごとに則したコミュニティに属していきたい」とのことだ。つまり現在は Instagram が主流になっているが、他のツールが流行れば乗り換えるつもりでいるのだろう。「長江家住宅は残

すべきモノだ」という認識を社会に広げないと長江家住宅は残らないと考えるため、発信して評価をもらうという SNS の循環には重要な役割がある」と小川氏は言う。さらに「最近では3つの SNS それぞれに役割があるという実感もある。よって、現時点での考えとしては3つの SNS を使い分けて発信し続ける」と高木氏は述べていた。

第4節 聞き取り調査後の考察

SNS の産学連携活動については、コロナ禍において長江家住宅と客をつなぐ唯一の架け橋になっていたとわかった。対面で客と会うことができない環境の中で SNS を通じて繋がりやすくなったことで、常に外からの目があるため、伝統文化を継承しようという意識を高めることに繋がった。文化を忘れることは簡単である。伝統文化を残していくためには、この SNS の監視の役割が重要だと考える。SNS が持つ監視の役割は現在のコロナウイルス流行下のみならず、収束後も効果があると考えられる。そしてコロナウイルス収束後の SNS の役割は、長江家住宅と客が出会うきっかけをつくることだと考える。コロナウイルス収束後も活動を続け、長江家住宅に訪れたいと思わせる投稿を作成し、集客に繋がりたいと考える。一人でも多くの人に守るべき価値のある建物であると認識してもらうことで、フージャースホールディングス、立命館大学の両方から必要とされ続けることに貢献する。3つの SNS を使い分け客との接点を作ること、客に訪れてもらうこと、価値のある建物だと認識してもらうことを目指すと共に、これからも時代に合わせたツールを活用していくべきだと考える。

SNS は現在の手段であり、今後時代が移り変わるとともに新たなツールに乗り換える必要がある。そこでまた産学連携が生きてくるのだと考える。流行に敏感な若者が共に活動することで、新たなツールに手を出しやすくなる。そして建物保存に関わる人とは違う視点からのアイデアが生まれると考える。

第4章 学生から見た産学連携

第1節 学生が長江家住宅に求めること

ここまで長江家住宅側、フージャースホールディングス側の視点から見た産学連携活動をまとめてきたが、私の感想としては学生が関わる機会が限られていると感じた。研究者にとっては長江家住宅の文化財を研究できるメリットがあるが、学生が建物に訪れる頻度が

少ない。これまでの「京都学フィールドワークⅢ」の授業では長江家住宅を訪れ学生は積極的に社員の方とコミュニケーションをとっていたようだが、2020年度の受講生はコロナウイルスの影響があり長江家住宅を一度も訪れることができなかった。このような状況になり、長江家住宅に関わることで学生が得るメリットが少なく残念に思う。ここからは学生の視点から産学連携について考えていく。

2020年度の受講生に授業への参加動機を聞いた。調査日は2021年11月、アンケートは受講生6人のうち5人から回答を得ることができた。結果は「企業と協力して活動できるところに魅力を感じたため」という意見が一番多く、次に「町家自体に興味があった」という意見が続いた(図14)。この結果を見ると、長江家住宅について研究するために授業に参加した人はおらず、企業との関わりのために参加した人が多かったのだとわかった。よって、学生側が求める授業の実現のために、活動の中にインターンシップとしての要素を増やすことを期待する。授業のシラバスではインターンシップとして企業の社員と関わりこの活動を行うと記載されている。しかしコロナウイルスの影響により現場での活動ができなかったためか、長江家住宅の文化を学ぶ要素が強く企業の人と関わる機会が少なかった。インターンシップとして自ら案を提案し比較検討すること、決まった案に対して目標を設定し試行錯誤すること、などのように、企業の方と協力することでこの活動以外でも活かせるスキルを学べる機会になると、学生にとってより充実した時間になると考える。コロナウイルスの影響はあるが、オンラインで社員やゲストスピーカーから話を聞くなどの授業は必要であると考えます。

また、長江家住宅が学生にひらけた空間となると「学」にとってのメリットが強くなると考える。現在は理工学部建築都市デザイン学科や文学部京都学専攻の授業に関わる一部の人のみ長江家住宅を使用しているが、映像学部が撮影のロケに使うなど、他学部の生徒からも学びの空間として使用してもらいたいと考える。多様な分野の学生が長江家住宅と関わることで、長江家住宅側は広い空間を生かすことができる、認知度が上がる、新たな視点を得るというメリットがある。全ての人に開放的にするのは長江家住宅の価値を損なう可能性があるが、学生の学びという分野にひらけることは長江家住宅の価値を上げることに繋がると考える。産学連携の学との繋がりを深めるために、学生に対してよりオープンな空間となることを望む。

表2は自分を含めた学生の希望を組み入れた授業シラバスである。長江家住宅と関わりのある仕事について知ることができる内容を考えた。不動産業界や企業のCSR活動について

は、産学連携で関わりの強いフージャースホールディングスから学ぶ。デジタルアーカイブについては、長江家住宅で進められている作業に参加して、体感する。これに合わせて VR や AR を用いたバーチャルツアーの作成なども学生が主体的に行うことで、文化財を観光資源や教材として活かす仕事を体験することができる。長江家住宅の建物の保存に関する行政との関わりについては、建築基準法や文化財保護の内容、課題を京都市の担当者から話を聞く。

以上に加えて SNS についても、後輩の学生たちに引き継いで行ってもらいたい。現在使用している SNS でなくても、その時代にあったツールで情報発信を試みる。その際 SNS のマーケティング方法についても触れる。さらに、受講する学生によって長江家住宅に対する興味関心が違うため、講義内容の希望を募り、学生の興味にあった授業を 1 回分行う。これらの授業で受けたインスピレーションをもとに、長江家住宅での展示企画を考える。実習中もフージャースホールディングスの社員と関わる機会を多く取り、目標設定を行う。可能であれば展示準備中に表具師と関わる機会を設け、屏風などの文化財の修繕について学ぶ。その上で長江家住宅に残る伝統文化を学ぶと、より長江家住宅が残っていることに重みを感じるだろう。このようにさまざまな業界の人と関わり仕事を知ること、自分の将来を考えるヒントを得る機会になり、インターンシップとしての授業が充実した内容になると考える。

第 2 節 SNS が目指す未来

ここまで述べたことを踏まえ、SNS が長江家住宅にどのような影響を与えるか考える。SNS の活動が拡大し長江家住宅のフォロワーが増えることで、長江家住宅に愛着を持つ「ファン」のような外部の存在が現れる。現在のフージャースホールディングスと立命館大学の産学連携関係に加えて、フォロワーという外部からの意見が入って来ることで、長江家住宅が「みんなのモノ」という存在になる可能性がある。ここでいう「みんな」とは、税金を納める京都市民や見学者、フォロワーなど、全ての人を指す。それが発展すると、「長江家住宅を今後どうしていくか」というところまで、SNS を通じて「みんな」が意見できるようになる可能性がある。

この場合の関係は、同じ京町家である杉本家住宅と共通する点がある。杉本家住宅は平成 4 年 2 月に財団法人奈良屋記念杉本家保存会を設立し、平成 23 年に公益財団法人へ移行した¹⁸。公益財団法人化するということは、営利目的の活動はしないことにあたり¹⁹、活動そのも

のから収益を上げた場合、その収益は全て事業に使わなくてはならない²⁰。そして社会に利益を還元しなくてはならない。その代わりに、社会に資金援助を求めることができる。

公益財団法人化された杉本家住宅では、3月1日から瓦の葺き替えを目的としたクラウドファンディングを行った²¹。このクラウドファンディングでは7,829,000円の寄付が集まり、杉本家住宅を応援する一般人から京町家の保存活動費を得ることができた。このように杉本家住宅では京町家を「みんなのモノ」とすることで、一般の人から資金などを集め、町家を維持しているのだ。

それに対して長江家住宅は、大学のサポートを受けながら、企業が所有する京町家であり、行政からの補助金を除くと、一般の人に資金援助を求めづらい。SNSでフォロワーを多く獲得することで、長江家住宅の今後に口出しできる人を増やすことに繋がり、現在の企業と大学という2軸のバランスを崩す恐れもある。

しかし私はそれが長江家住宅にとってプラスになると考える。なぜなら、フォロワーという一般の人の存在が「いざという時」の抑止力になると考えるためである。「いざという時」とは、企業が長江家住宅を売る時、壊すとき、大学が研究から手を引く時のことである。聞き取り調査にもあった通り、長江家住宅は現段階では最善のバランスで守られているが、会社の業績次第では売られてしまう可能性がある。また社長や株主の意向が変われば切り離されてしまう可能性があるのだ。大学側も今の研究者が手を引き、後を継ぐ人がいなければ、長江家住宅の所蔵品・文化という中身の部分が引き継がれなくなる。会社と大学がそのような状況に面した時、フォロワーという外部から長江家住宅を支えてくれる存在がいることで、長江家住宅の必要性を再認識することに繋がると考える。フォロワーの数は長江家住宅を大切にしたいと考える人の数と捉えることができる。その数が増加すればするほど長江家住宅を残さないといけないという意識に繋がり、手を引かれる際に一種の抵抗力となる。フォロワーの数だけ長江家住宅のサポーターがいると捉えることで、これだけ大切に思われている長江家住宅を手放すことは勿体無いと思わせることができれば、SNSを始めたことが正解だったと言える。と考える。

立命館大学はあくまで建物内部の所蔵品のみ所有しているのであり、建物自体を所有しているのはフージャースホールディングスである。そして建物維持の費用を負担しているのもフージャースホールディングスである。つまり企業の方針に長江家住宅の存続の命運が託されている。建物を取り壊して所蔵品のみ残っている状況では、長江家住宅が保存されているとは言えない。今のような長江家住宅の命運が一極に集中している状態から抜け出

すためには、一般の意見も大事になってくると考える。「いざという時」の抑止力を作る力が SNS にはあり、その時が来ないことを願いつつも、備えておくことが SNS を運営し続ける本来の意義なのではないかと考える。

おわりに

京町家は「みんなモノ」である側面と「所有者個人のモノ」である側面の両方を持ち合わせている。建物の維持費用をフージャースホールディングスが負担している以上、そこに関わる最終判断はフージャースホールディングスに委ねられている。つまり一般の人が口出しできない領域であり、フージャースホールディングスのモノであることには変わらない。

しかし建物の歴史や文化などの情報は、個人の物ではなくみんなに共有されるべきであると考え。京都市から文化財と指定され資金援助を受けた以上、公共財として京都市、そして一般の人への還元は必要である。SNS での情報発信は一般の人への還元方法の一つであり、一般の人からの意見発信の場でもある。「みんなのモノ」と「所有者個人のモノ」の間をつなぐ力が SNS にはあると考える。

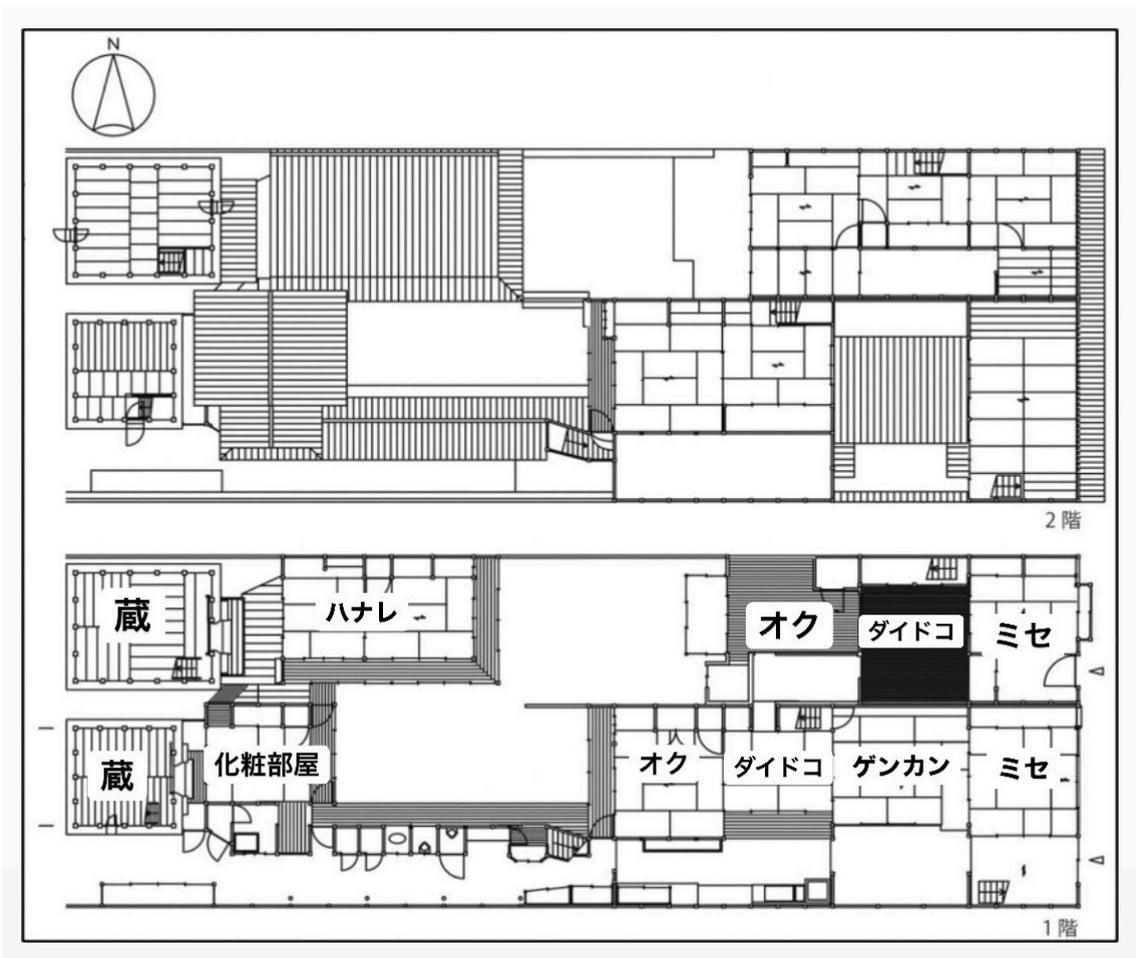
京都が文化観光都市といわれ、近代化しつつも町にその雰囲気を残しているのは、京町家が古都の資源として必死に残り続けているからだと考え。京町家は観光客に京都らしさを感じてもらうため、そして日本の文化観光都市として我々日本人が誇りを持つことができるためにも残さなければならない。これは人のために文化財を保護するということである。文化財を保護することには多額の費用を要する。京町家も放置すれば簡単に建て替えられ消失するものである。京都市は財政が厳しく文化財ばかりにお金を費やすことはできない。そんな中、長江家住宅では企業が建物の維持費用を賄い、文化財の文化という本質的な部分を大学が保存するという、素晴らしくも特殊な関係を持っている。社会におけるさまざまなサービスが官から民へと移り変わっているが²²、そこに学が関わることで、サービスの中身が充実したものになる。この協力関係は京町家を残す、そして「文化観光都市としての京都」が今後維持されるための手本になると考える。それぞれが力を出し合い助け合う産学連携が、京都の文化財を残す鍵になると考える。



第1図 長江家住宅外観写真 (2020年11月筆者撮影)



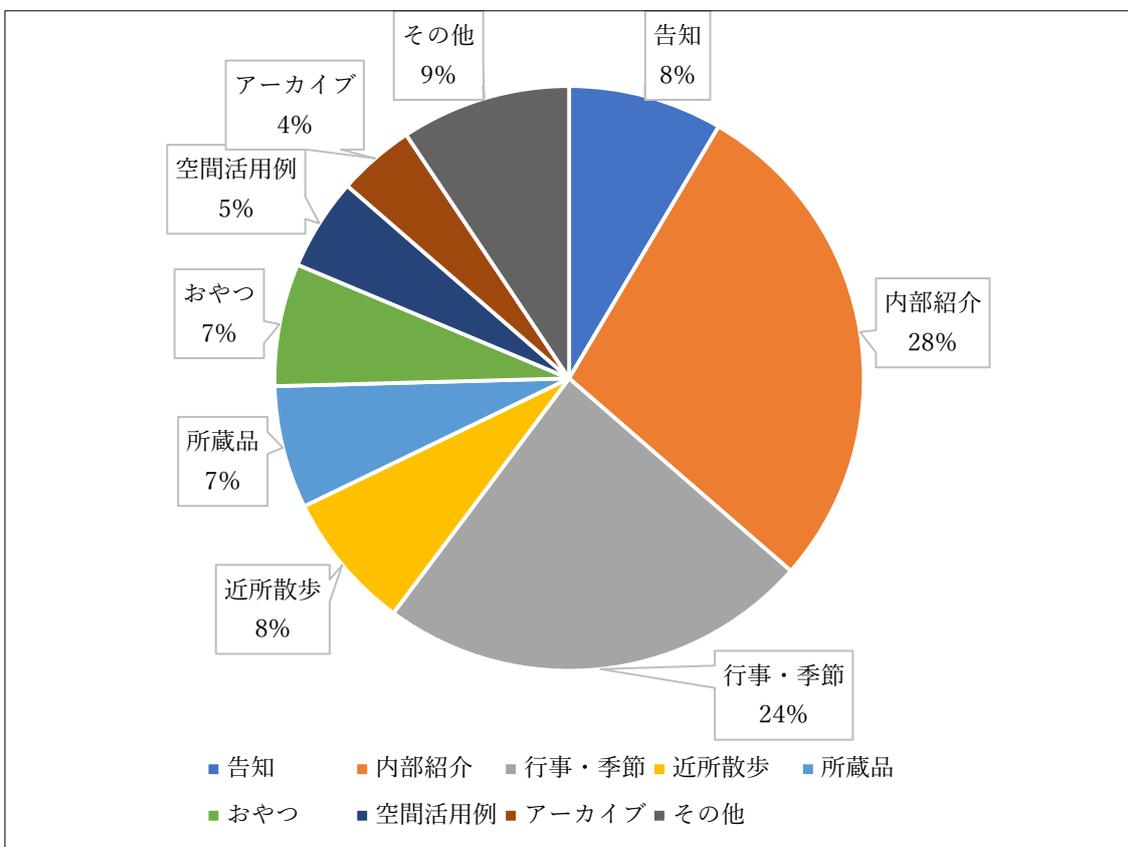
第2図 長江家住宅の周辺地図（長江家住宅ホームページより引用²³⁾



第3図 長江家住宅の間取図（京都市文化保護課作成図より加筆修正）



第4図 おくどさん (2020年8月筆者撮影)

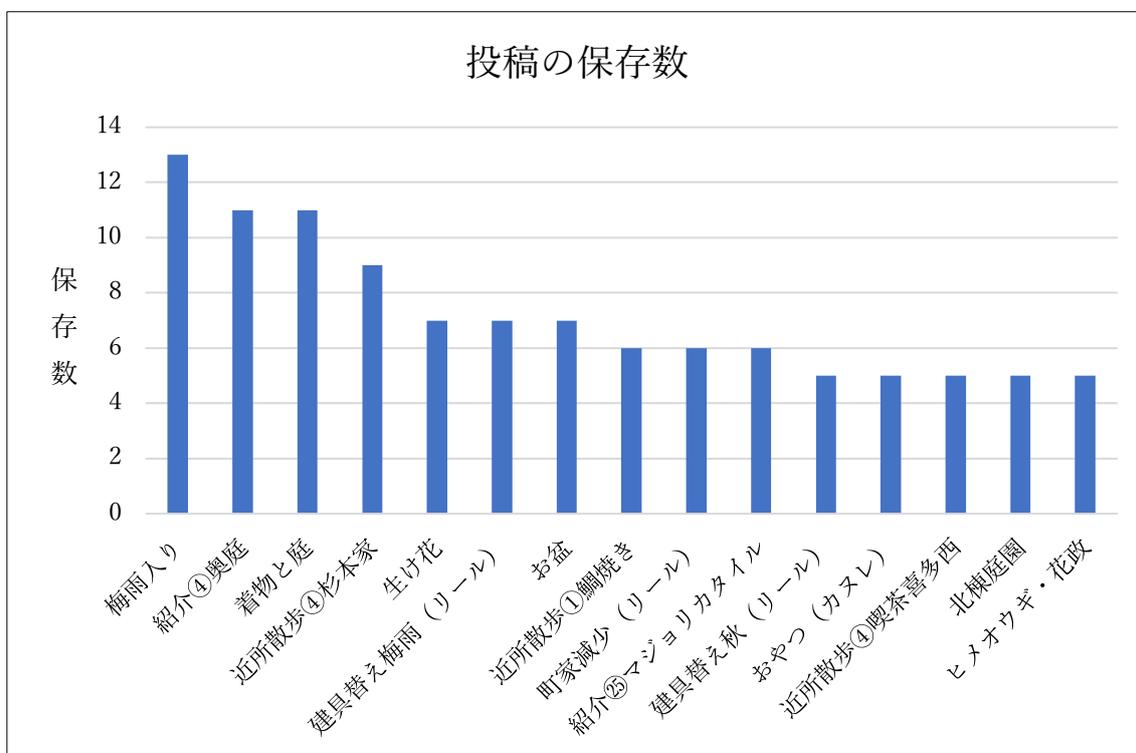


第5図 投稿内訳 (Instagram データより筆者作成)

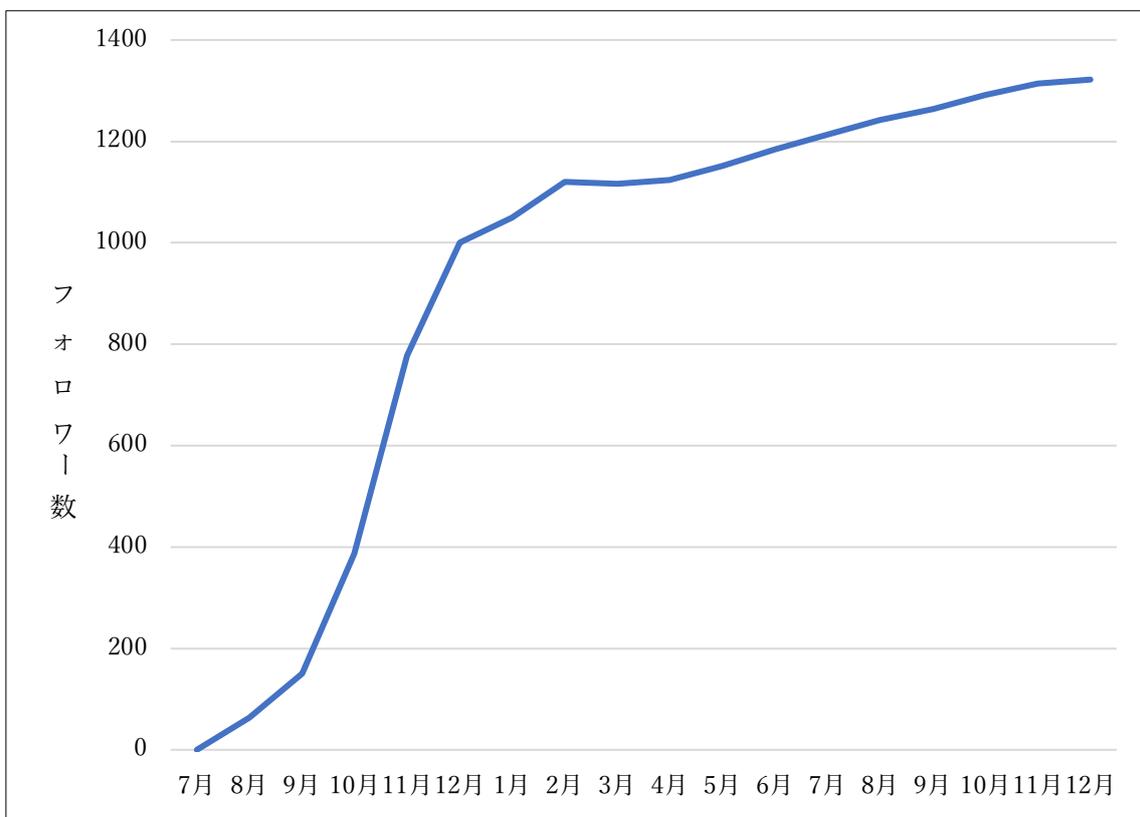
第1表 投稿内容 (Instagram データより筆者作成)

日付	投稿内容	いいね	コメント	リーチ	保存	分類
7月14日	開設のお知らせ	177	1	×		2 告知
7月15日	屏風祭りの宣伝	137	1	×		1 告知
7月17日	立命館ARC宣伝	156	1	×		1 告知
7月20日	紹介①通り庭	191	2	×		2 内部紹介
7月26日	紹介②浴室	217	6	×		4 内部紹介
8月4日	紹介③ゲンカン	207	5	×		4 内部紹介
9月18日	建具替えリール	186	8		642	5 行事・季節季節
11月4日	紹介④中庭	302	5	×		11 内部紹介
10月10日	紹介⑤庭の植物	230	2		826	1 内部紹介
10月15日	すすき	262	3		792	0 行事・季節
10月17日	紹介⑥キンモクセイ	223	3		1249	0 内部紹介
10月25日	着物と庭	380	10		1961	11 その他
10月28日	おやつ (シュークリー	271	6		1295	1 おやつ
10月31日	十三夜	284	4		743	1 行事・季節
11月4日	おやつ (カヌレ)	340	10		1311	5 おやつ
11月7日	紹介⑦走り庭	248	6		707	3 内部紹介
11月11日	紹介⑧おくどさん	334	10		1229	3 内部紹介
11月14日	ツワブキ	261	7		754	0 内部紹介
11月18日	紹介⑨ダイドコ	283	3		883	1 内部紹介
11月21日	屏風紹介	319	3		1090	1 所蔵品
11月25日	紹介⑩床の間	312	2		1586	4 内部紹介
11月28日	研修	254	2		1442	2 空間活用例
12月2日	生花	271	7		709	4 その他
12月5日	紹介⑪掃除道具	239	2		1837	3 内部紹介
12月9日	おやつ (コーヒ-	222	0		696	1 おやつ
12月12日	暮らしの知恵	207	2		1418	2 その他
12月17日	和菓子アマビエ	238	10		653	1 おやつ
12月19日	暮らしの知恵	222	1		699	3 その他
12月26日	大掃除リール	251	2		1310	3 行事・季節
12月23日	クリスマス	228	0		484	0 行事・季節
12月30日	紹介⑫神棚	199	0		733	2 内部紹介
1月1日	謹賀新年①	107	1		310	0 行事・季節
1月1日	謹賀新年②	128	0		312	0 行事・季節
1月1日	謹賀新年③	130	0		323	0 行事・季節
1月1日	謹賀新年④	143	0		347	0 行事・季節
1月1日	謹賀新年⑤	117	0		330	0 行事・季節
1月1日	謹賀新年⑥	143	4		360	0 行事・季節
1月2日	歴史①	222	0		687	4 アーカイブ
1月6日	火鉢	244	1		587	1 行事・季節
1月9日	紹介⑬アンティーク	228	0		657	2 内部紹介
1月13日	歴史②	174	0		1006	0 アーカイブ
1月16日	八坂神社 (氏神)	225	1		565	2 行事・季節
1月21日	大寒	214	0		995	0 行事・季節
1月24日	弦楽アンサンブル	156	4		428	3 空間活用例
1月25日	弦楽アンサンブル②	186	3		486	0 空間活用例
1月27日	ロウバイ	211	3		576	1 行事・季節
1月30日	HP宣伝	159	0		757	0 告知
2月2日	節分	196	0		543	1 行事・季節
2月6日	歴史③	140	0		469	1 アーカイブ
2月10日	近所散歩①鯛焼き	235	1		1061	6 近所散歩
2月13日	特別公開	239	0		1196	1 告知
2月17日	近所散歩②菅大臣の梅	233	2		644	2 近所散歩
2月20日	紹介⑭ライトアップ	246	4		760	11 内部紹介
2月24日	味噌造りリール	161	0		738	1 空間活用例
2月27日	歴史④看板	186	2		485	2 アーカイブ
2月28日	特別公開	188	0		595	4 告知
3月3日	ひな祭り	230	4		658	4 行事・季節
3月6日	町家減少リール	181	9		947	6 その他
3月8日	近所散歩③杉本家	229	4		1161	9 近所散歩
3月10日	近所散歩④喫茶喜多西	227	4		658	5 近所散歩

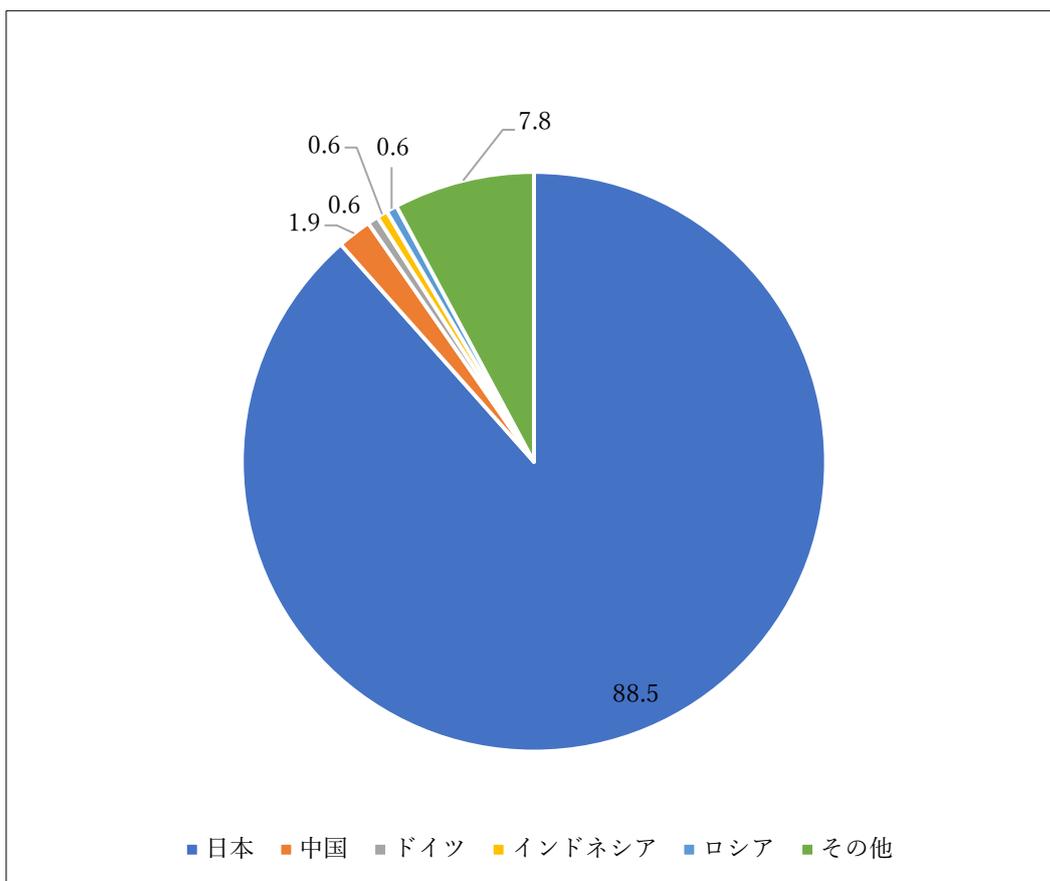
3月14日	煙突	200	0	517	1	アーカイブ
3月18日	特別公開	182	2	463	0	告知
3月21日	雨音	186	0	613	1	行事・季節
3月24日	特別公開リール	179	2	596	1	告知
3月27日	杉本家クラウド	157	2	709	1	告知
3月31日	紹介⑤表札	138	0	583	0	内部紹介
4月3日	ヨガ	190	2	661	0	空間活用例
4月7日	紹介⑥大裏	183	0	553	0	内部紹介
4月10日	紹介⑦内暖簾	193	0	579	0	内部紹介
4月14日	近所散歩⑤花屋	179	2	499	0	近所散歩
4月17日	おやつ(茶)	195	2	451	1	おやつ
4月21日	紹介⑧光	190	2	490	1	内部紹介
4月24日	近所散歩⑥成徳小学校	210	2	720	4	近所散歩
4月28日	紹介⑨雨上がり	182	0	423	1	内部紹介
5月1日	紹介⑩人名録	204	2	573	2	内部紹介
5月5日	こどもの日	238	4	529	3	行事・季節
5月8日	紹介⑪脱衣所	197	0	489	2	内部紹介
5月12日	近所散歩⑦ケーキ屋	187	0	571	1	近所散歩
5月15日	紹介⑫タンス	256	0	1830	2	内部紹介
5月19日	カルピス瓶	184	0	483	2	内部紹介
5月22日	梅雨入り	317	3	1700	13	行事・季節
5月26日	北棟庭園	225	0	531	5	内部紹介
5月30日	生花(あじさい)	609	6	2772	7	その他
6月2日	マッチ	203	0	539	3	所蔵品
6月5日	猫間障子	256	0	782	3	内部紹介
6月9日	虹	266	3	1260	2	その他
6月16日	建具替えリール	249	2	4578	7	行事・季節
6月12日	紹介⑬小窓	195	0	511	0	内部紹介
6月19日	船鉾の浴衣	257	0	1489	4	所蔵品
6月23日	特別公開のお知らせ	191	0	553	2	告知
6月26日	山田耕雲	190	0	632	0	所蔵品
6月30日	水無月	197	0	592	3	おやつ
7月3日	吉符入式	238	2	746	3	行事・季節
7月7日	七夕	226	6	914	1	行事・季節
7月10日	ヒメオウギ・花政	231	1	661	5	その他
7月14日	ヒオウギ	333	1	1775	4	内部紹介
7月17日	ちまき	222	2	3309	4	行事・季節
7月17日	山鉾巡行	267	3	1023	3	行事・季節
7月21日	琥珀糖	209	0	875	4	おやつ
7月24日	特別公開リール(海外)	150	0	3259	0	その他
7月28日	紹介⑭襖	202	0	1294	3	内部紹介
8月2日	紹介⑮マジョリカタイ	272	0	1784	6	内部紹介
8月4日	ご近所散歩⑧	174	0	1305	3	近所散歩
8月7日	暑中見舞い	264	4	1376	3	行事・季節
8月11日	紹介⑯大正ガラス	359	0	2127	2	内部紹介
8月14日	お盆	346	4	1396	7	行事・季節
8月18日	夏建具のオフィス風景	266	7	699	2	内部紹介
8月21日	屏風補修	217	0	556	1	所蔵品
8月25日	夏の床飾り	199	2	620	0	所蔵品
8月28日	お猪口	226	4	609	0	所蔵品
9月1日	キャンディス	279	0	1601	2	おやつ
9月4日	紹介⑰欄間	181	0	603	1	内部紹介
9月8日	重陽の節句	205	0	696	2	行事・季節
9月11日	晴の陽	292	4	879	1	その他
9月15日	散歩⑱芸術センター	252	0	704	3	近所散歩
9月18日	味噌開き	207	2	730	1	空間活用例
9月21日	十五夜	284	4	1016	4	行事・季節
9月25日	床の間ヒオウギ	228	1	728	1	その他
9月29日	ゲンカンの着物	168	0	573	0	所蔵品



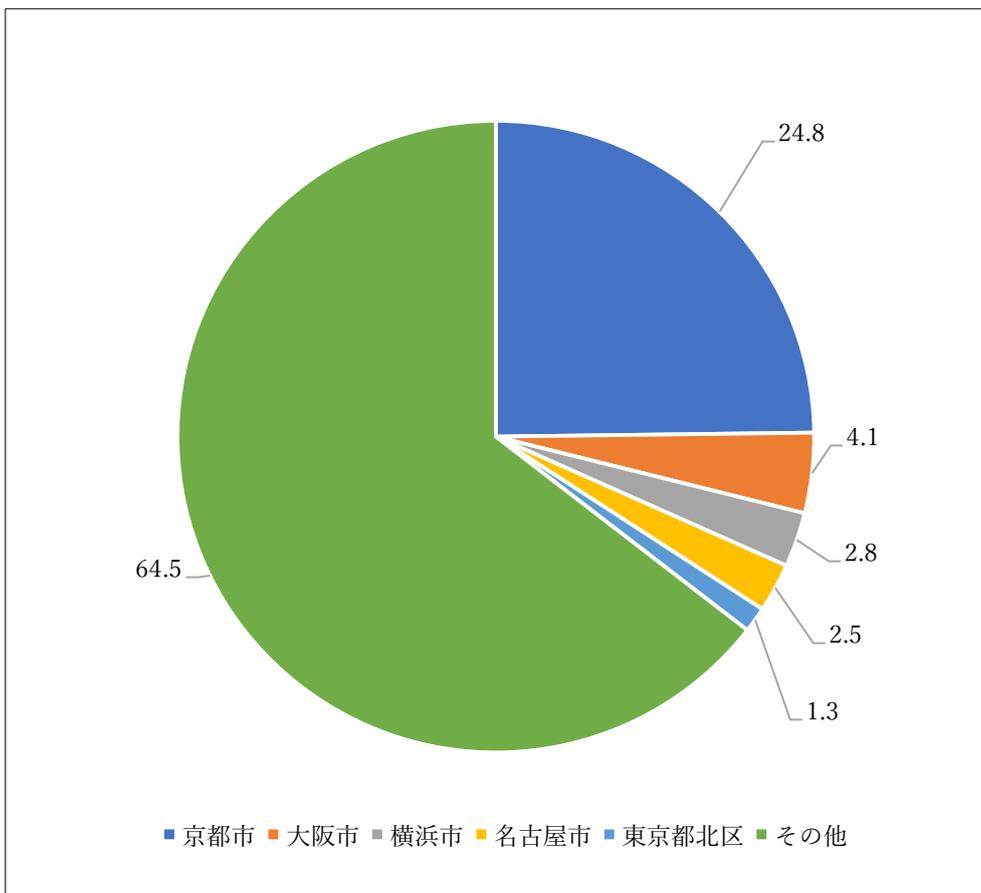
第 6 図 保存回数が多い投稿 (Instagram データより筆者作成)



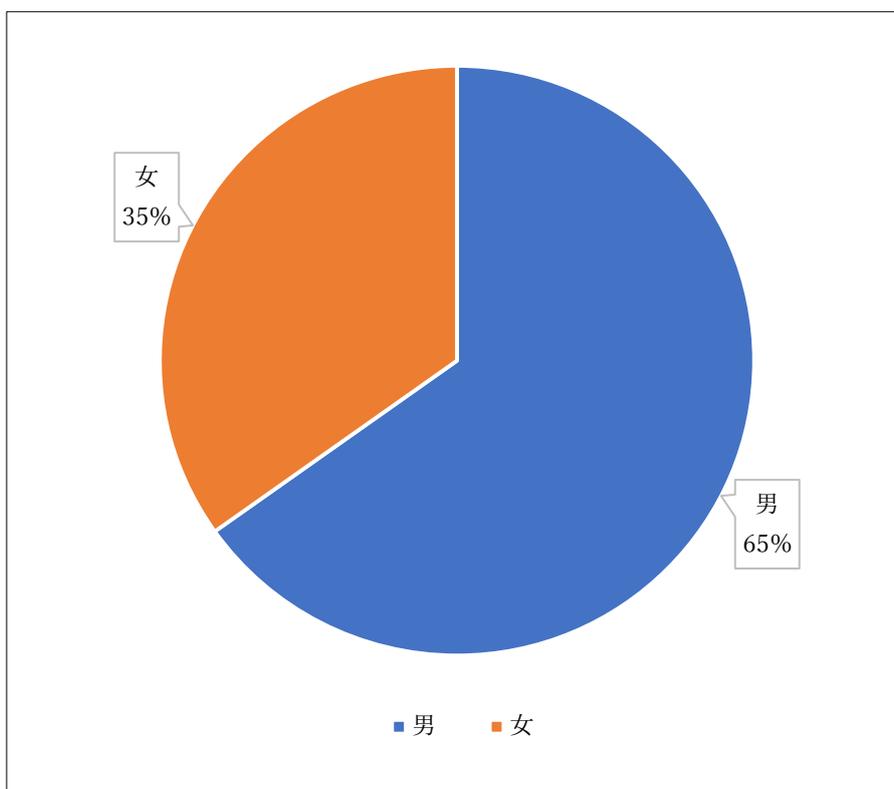
第7図 フォロワー数の推移 (Instagram データより筆者作成)



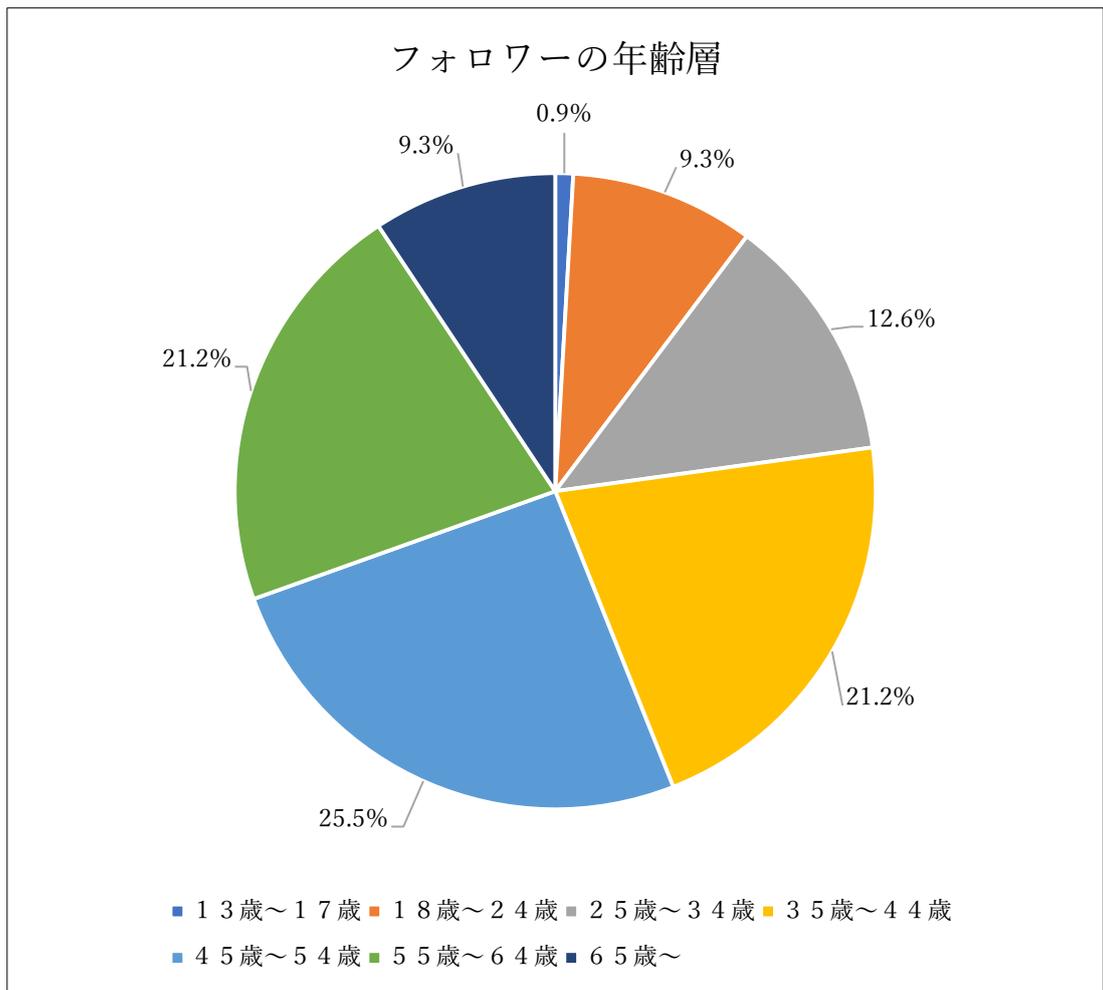
第8図 フォロワーの国籍 (Instagram データより筆者作成)



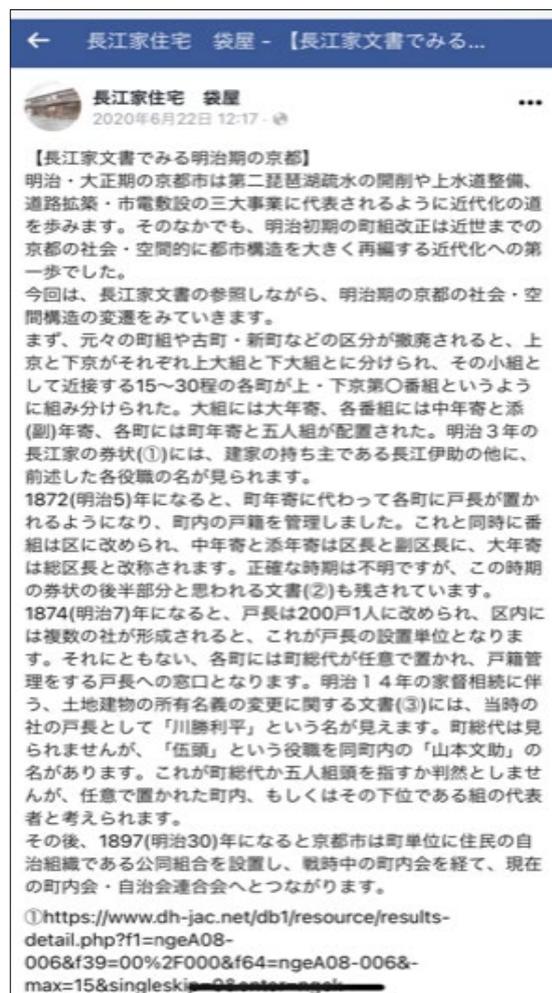
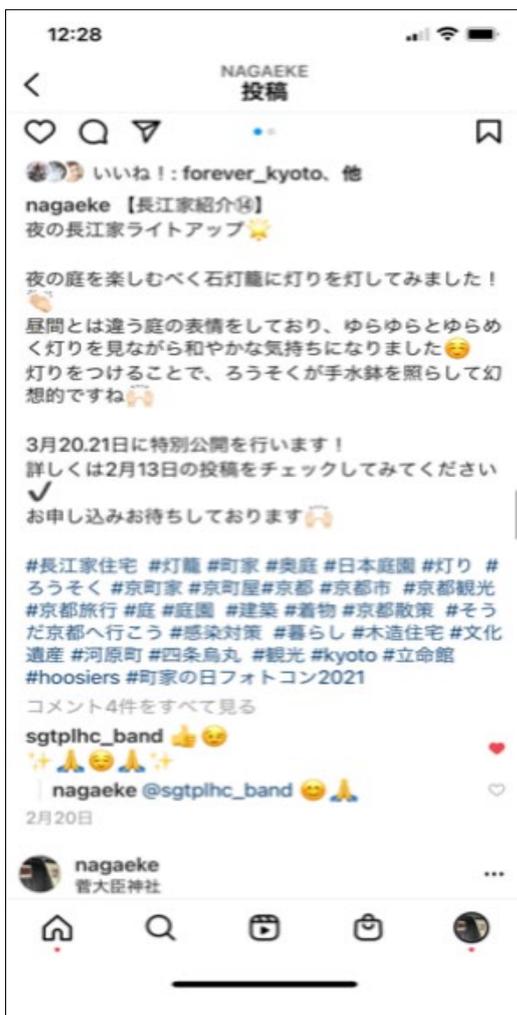
第9図 フォロワーの居住地 (Instagram データより筆者作成)



第 10 図 男女比 (Instagram データより筆者作成)



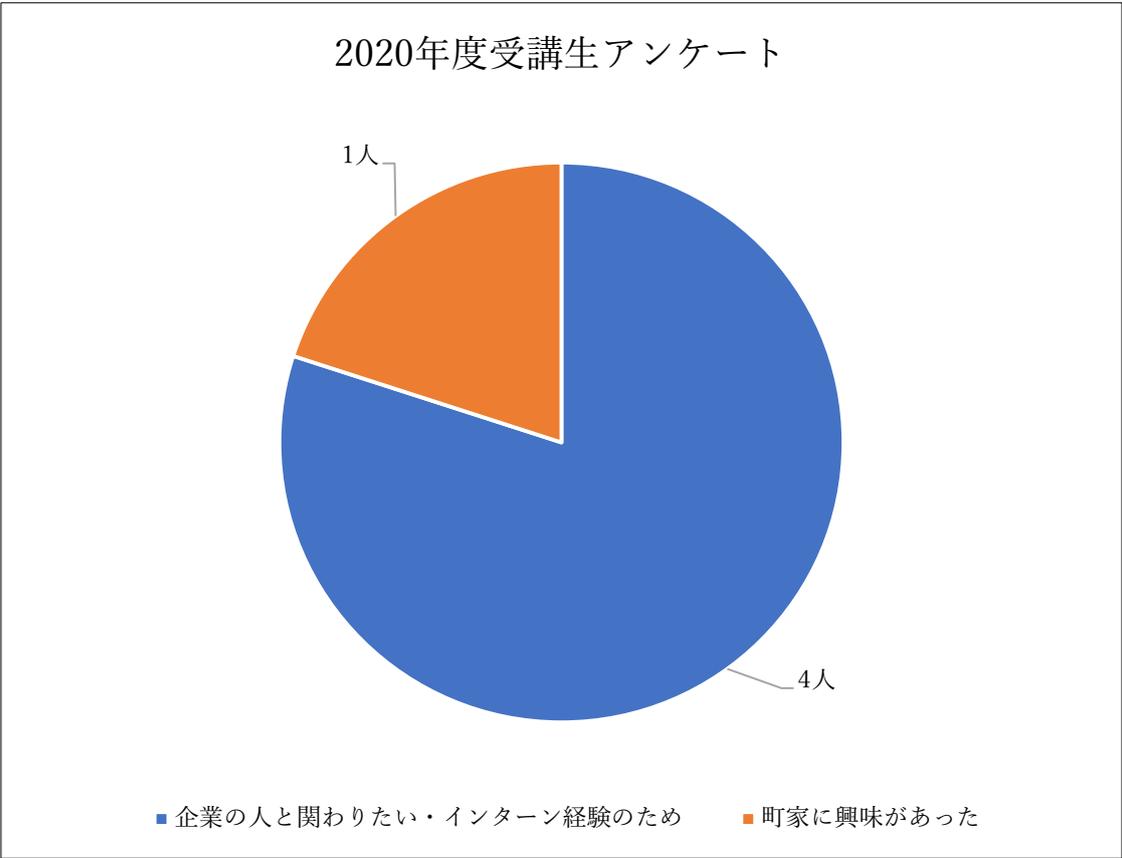
第 11 図 フォロワーの年齢層 (Instagram データより筆者作成)



第 12 図 Instagram と Facebook の投稿比較



第 13 図 特別公開の展示風景 (2021 年 3 月筆者撮影)



第 14 図 受講生アンケート (アンケート調査より筆者作成)

第2表 理想のシラバス (アンケートをもとに筆者作成)

授業回数	テーマ・内容
1	オリエンテーション(授業内容の確認・長江家住宅について説明、行政との関わりについて学ぶ)
2	フージャースホールディングスとの関わりを学ぶ (フージャースホールディングス社員がゲストスピーカー、これまでの経緯と CSR についてなど)
3	実習(長江家住宅の見学) アート・リサーチセンターの人からデジタルアーカイブについて学ぶ
4	実習(社員の人との意見交流・テーマ目標設定)
5	バーチャルツアーの制作
6	SNS などの情報発信方法を考える (マーケティング目標も設定し、授業終了まで交代で発信)
7	社員とのミーティング (学生の疑問を解消する、意見交流)
8	社員とのミーティング(企画設定・役割分担・SNS コンテンツの作成)
9	実習(コンテンツの作成)
10	実習(コンテンツの作成。社員からのアドバイス)
11	実習(屏風のしつらい、表具師から屏風修復や文化財保護の仕事を知る)
12	実習(屏風のしつらい・社員からのアドバイス)
13	実習(屏風祭りの案内・解説)
14	実習(屏風祭りの案内・解説)
15	フィードバック

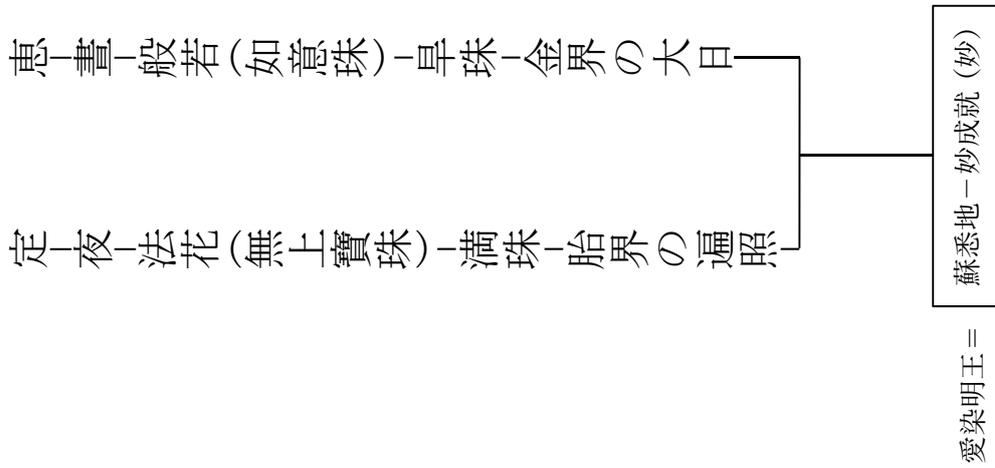
注

- ¹ 佐藤弘隆・高木良枝 (2016) 「大規模京町家の継承 -京都市指定有形文化財長江家住宅の事例より-」都市住宅学 95 号、p.128.
- ² 前掲 1, p.129
- ³ 長江家住宅パンフレット「2020」フージャースホールディングス発行、表面一番左ページに記載
- ⁴ 前掲 3、表面一番左ページに記載
- ⁵ 前掲 3、表面一番右ページに記載
- ⁶ 前掲 3、表面一番右ページに記載
- ⁷ 前掲 3、表面一番右ページに記載
- ⁸ 前掲 1, p.129
- ⁹ 前掲 1, p.130
- ¹⁰ 瓜生朋美「祇園祭の山鉾町の京町家「長江家住宅」。東京の民間事業者が受け継ぎ、次世代につなぐ取組みとは | 住まいの本当と今を伝える情報サイト【LIFULL HOME'S PRESS】(homes.co.jp)」(2021年12月17日最終閲覧)
https://www.homes.co.jp/cont/press/reform/reform_01084/
- ¹¹ 林雅之、本門功一郎「デジタル時代の基礎知識「SNS マーケティング」「つながり」と「共感」で利益を生み出す新しいルール」翔詠社、2020、pp.46-59
- ¹² some media 編集部「歴史を振り返ると見えてくる、Instagram の人気の理由とインフルエンサーが重要なワケ | SOME MEDIA (somewrite.com)」
https://media.somewrite.com/instagram_history/ (2021年12月17日最終閲覧)
- ¹³ ソーシャルメディアラボ編集部「12のソーシャルメディア最新動向データまとめ」
<https://gaiax-socialmedialab.jp/post-30833/> (2021年12月17日最終閲覧)
- ¹⁴ growth seed 編集部「SNS の利用者数とユーザー属性や特徴まとめ」
<https://growthseed.jp/experts/sns/number-of-users/> (2021年12月17日最終閲覧)
- ¹⁵ 「公益財団法人奈良屋記念杉本家住宅保存会-杉本家住宅について」/
<https://www.sugimotoke.or.jp/about/> (2021年12月17日最終閲覧)
- ¹⁶ 「京都秦家」<http://www.hata-ke.jp/about/> (2021年12月17日最終閲覧)
- ¹⁷ カオナビ人事用語集編集部「CSR とは？活動の種類、取り組み方、人事部の役割」
<https://www.kaonavi.jp/dictionary/csr/> (2021年12月17日最終閲覧)
- ¹⁸ 「公益財団法人奈良屋記念杉本家住宅保存会-財団概要」
<https://www.sugimotoke.or.jp/about/outline/> (2021年12月17日最終閲覧)
- ¹⁹ マイナビ転職「一般財団法人とは？公益財団法人や一般企業との違い、略称など」
<https://tenshoku.mynavi.jp/knowhow/caripedia/97> (2021年12月17日最終閲覧)
- ²⁰ 株式会社リアルコンテンツジャパン「公益財団が収益事業をおこなって良いのか」
<https://www.realcontents.jp/column/theme01/column108/> (2021年12月17日最終閲覧)
- ²¹ THE KYOTO「次の150年へ、重要文化財「杉本家住宅」の大屋根瓦15000枚を葺き替えたい」
<https://the-kyoto.en-jine.com/projects/sugimotoke> (2021年12月17日最終閲覧)
- ²² ウーゴ・ミズコ (2013) 「公共財としての遺産-歴史的建造物の公共性について-」パブリックな存在としての遺跡・遺産、平成24年度遺跡等マネジメント研究集会(第2回)報告書、pp.10-15
- ²³ 「京都市指定有形文化財長江家住宅一周辺地図」
<http://www.nagaek.jp/map/index.html> (2021年12月17日最終閲覧)

参考文献

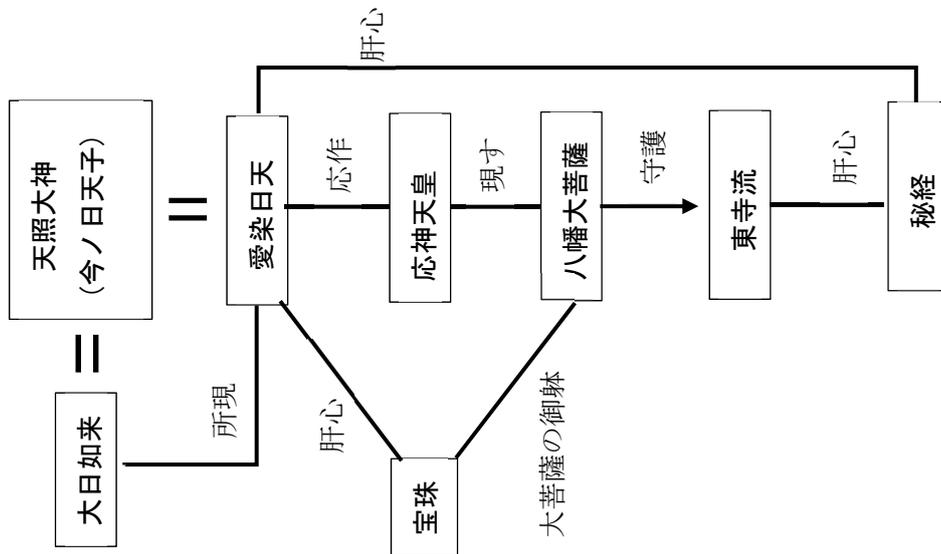
- ・佐藤弘隆・高木良枝（2016）「大規模京町家の継承 -京都市指定有形文化財長江家住宅の事例より-」都市住宅学 95 号、127-131.
- ・佐藤弘隆・高木良枝（2017）「京町家の所蔵品データベースと行事の継承：京都市有形文化財長江家住宅を事例に」民俗建築 151、9-17.
- ・高木良枝・高橋彰、佐藤弘隆（2017）「大規模京町家の現状と民間継承後の運営に関する研究：京都市有形文化財長江家住宅を事例に」都市住宅学 99、123-127.
- ・矢野桂司、中川等、高木良枝、佐藤弘隆、高橋彰、石川祐一、松本文子（2016）「大規模京町家のアーカイブ：京都市指定文化財長江家住宅を事例に」住総研研究論文集 42、121-132.
- ・佐藤隆弘、高木良枝（2017）「「すまい」としての京町家と祭礼：長江家住宅と祇園祭船鉦との関係を中心に」民族建築 152、35-41.
- ・高橋康夫「京町家・千年の歩み 京都にいきづく住まいの原型」株式会社学術出版社、2001、237-247.
- ・水野克比古「京町家拝見」光村推古書院、2011、17-27.
- ・中京大学社会科学研究所「大学と地域社会の連携」中京大学社会科学研究所、2016、6-44.
- ・大場修「「京町家カルテ」が解く 京都人が知らない京町家の世界」淡交社、2019、12-26、116-117.
- ・関西ネットワークシステム「現場発！産学官連携の地域力」学芸出版社、2011、16-31、93-94.
- ・杉本秀太郎「京の町家 杉本家」淡交社、2018、4-94、165-170.
- ・林雅之、本門功一郎「デジタル時代の基礎知識「SNS マーケティング」「つながり」と「共感」で利益を生み出す新しいルール」翔詠社、2020、10-205.
- ・ウーゴ・ミズコ（2013）「公共財としての遺産-歴史的建造物の公共性について-」パブリックな存在としての遺跡・遺産、平成 24 年度遺跡等マネジメント研究集会（第 2 回）報告書、10-15.
- ・村山祥栄「京都が観光で減びる日ー日本を襲うオーバーツーリズムの脅威ー」ワニブックス、2019、16-277.
- ・斉藤由紀「京都の町家を再生する」関西学院大学出版会、2015、22-83.

【第3図】『八幡大菩薩口決(乙本)』における両部の不二



出典：神奈川県立金沢文庫「八幡大菩薩口決(乙本)」『金沢文庫の中世神道資料』神奈川県立金沢文庫 一九九六年 四三―四四頁を元に筆者作成。

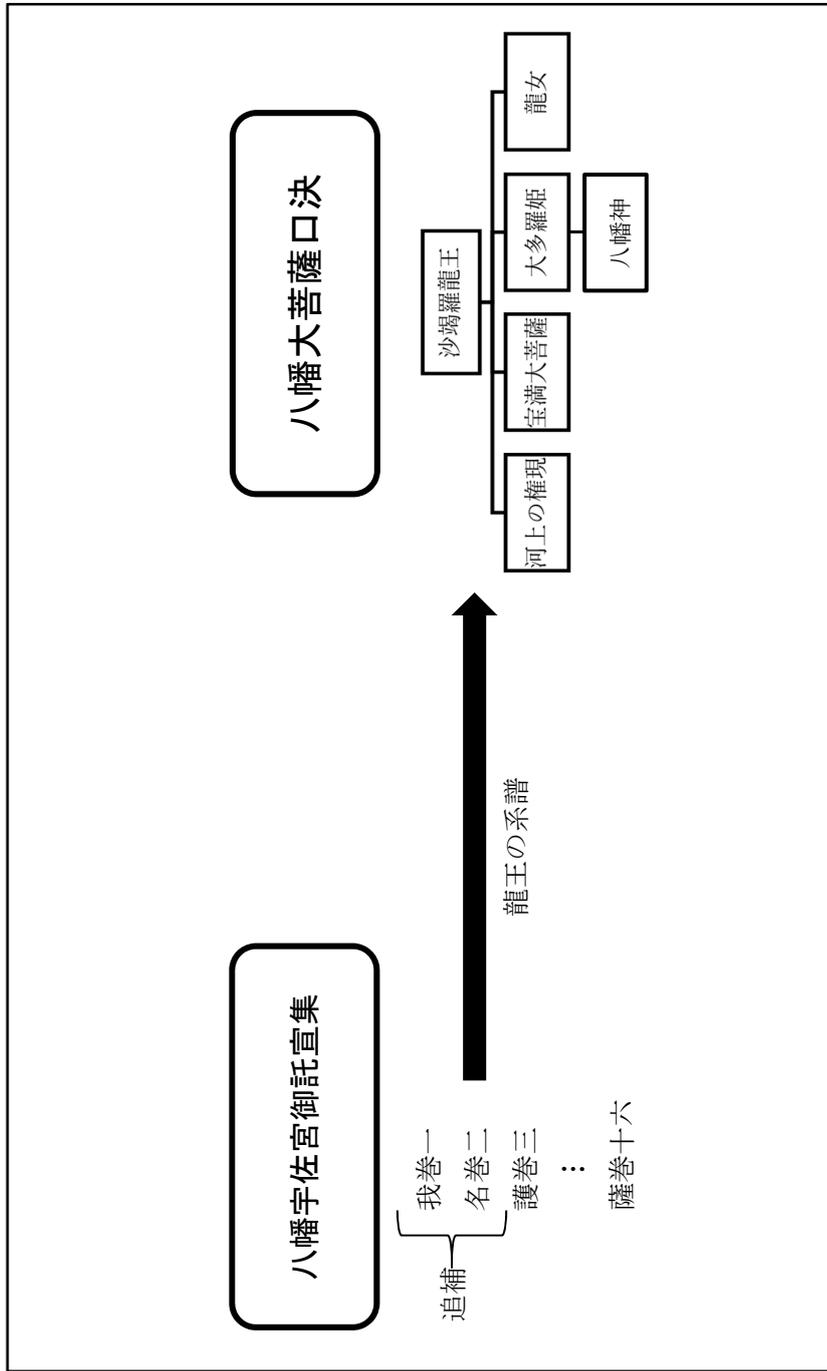
【第4図】史料2―⑦における諸尊・諸物の関係



出典：神奈川県立金沢文庫「八幡大菩薩口決(乙本)」『金沢文庫の中世神道資料』神奈川県立金沢文庫 一九九六年 四四頁を元に筆者作成。

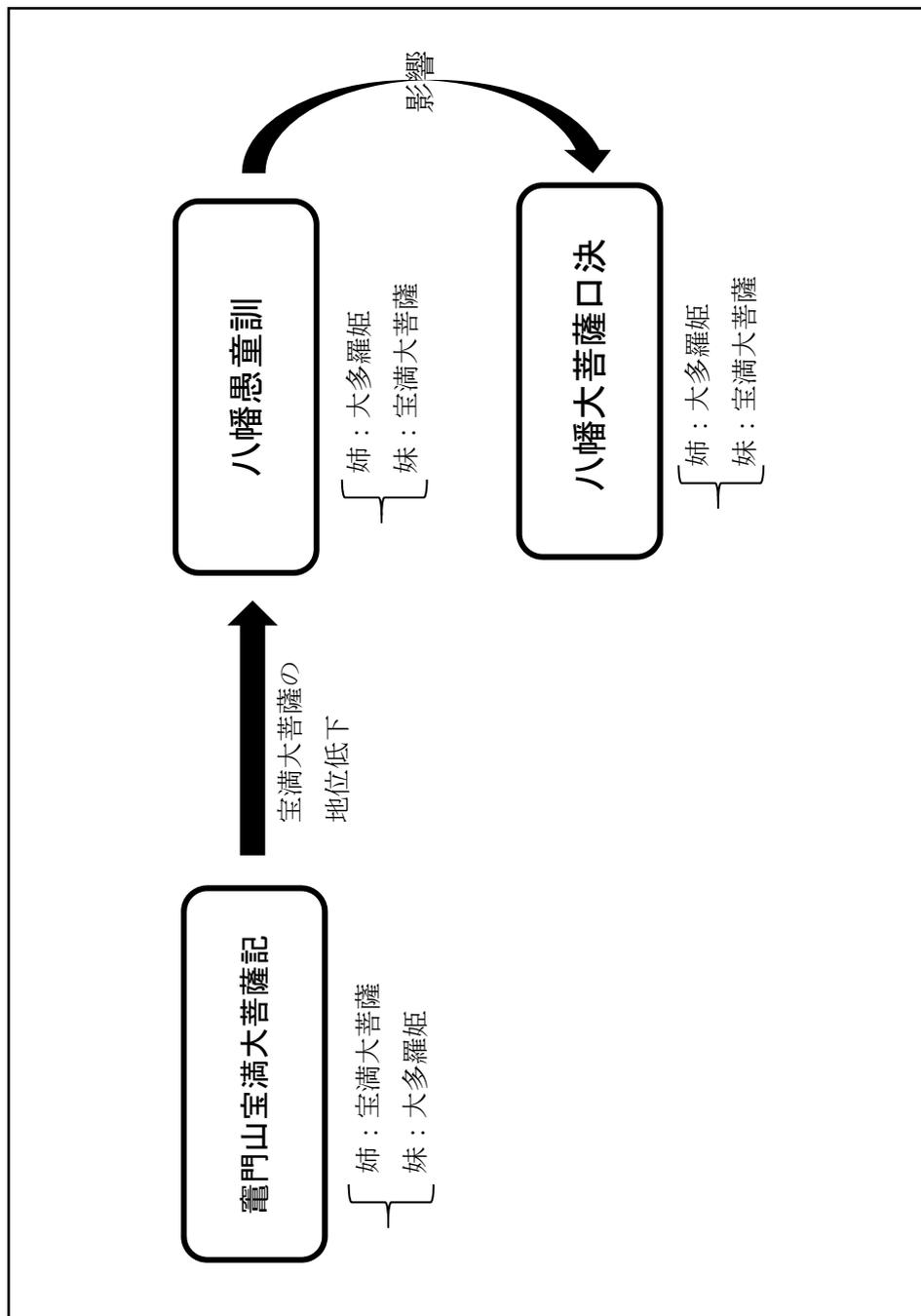
直接的な関係は ———— を用い、影響を与える方向には ————— を用いた。

【第2図】 龍王の系譜の関係



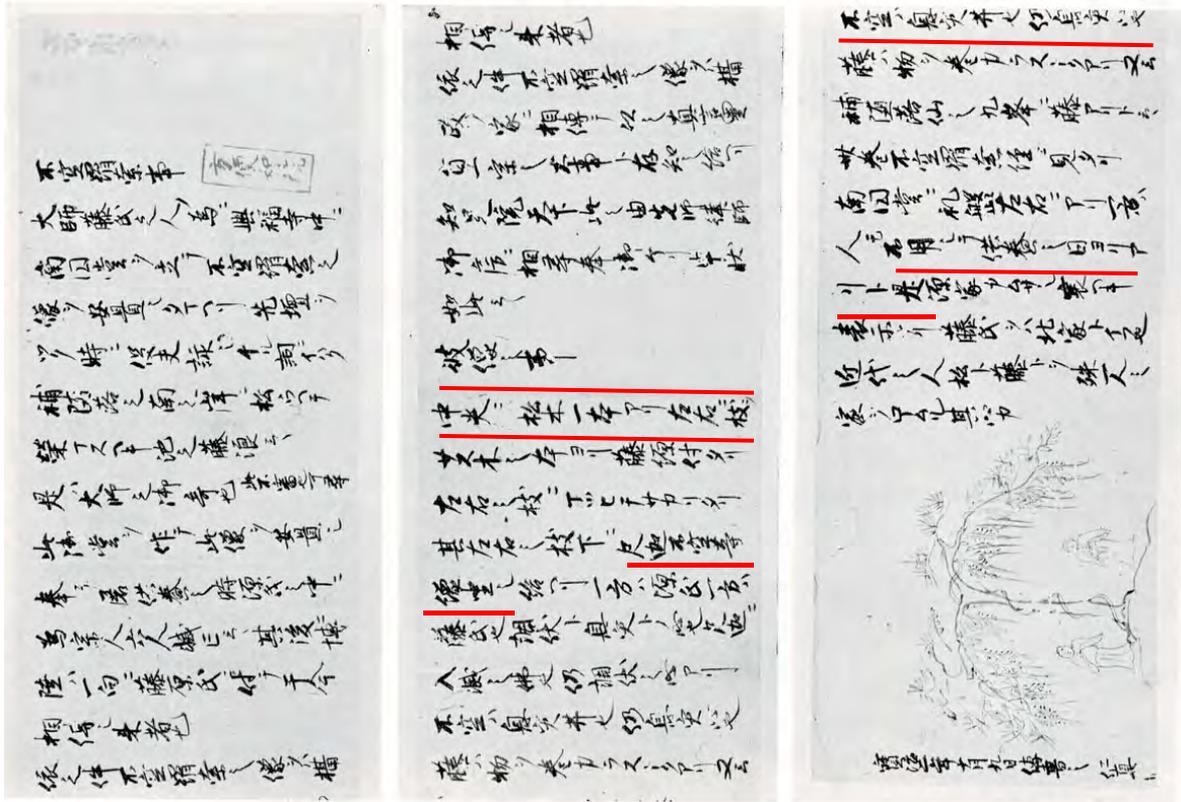
出典：神奈川県立金沢文庫「八幡大菩薩口決（甲本）」『金沢文庫の中世神道資料』神奈川県立金沢文庫 一九九六年 四三頁を元に筆者作成。

【第1図】宝満大菩薩の地位低下と姉妹関係への影響



出典：神奈川県立金沢文庫「八幡大菩薩口決（甲本）」、「竈門山宝満大菩薩記」『金沢文庫の中世神道資料』神奈川県立金沢文庫 一九九六年 四三、四七頁、萩原龍夫他校注「八幡愚童訓」『寺社縁起』（日本思想大系 二〇）一九七五年 岩波書店 一七二頁、森弘子『宝満山の環境歴史学的研究』 岩田書院 二〇〇九年 六五頁を元に筆者作成。

史料 10 『不空羅素事』



出典：田中稔「七大寺巡礼私記と十五大寺日記」『研究論集1』（奈良国立文化財研究所学報第二十一冊）奈良国立文化財研究所、一九七二年、図版四『不空羅素事（高山寺藏）』

なお、囲みや傍線は筆者によるものである

号奉怨

天照大神請九州鎮守之位云々

三韓征伐記云

┌ 2折

鎮護本朝國 度脱苦衆生云々

鳥羽院御宇天永二年宣旨狀云

八幡大菩薩伯母本朝鎮守大明神云々

近衛院御宇久安二年宣旨狀云

九州擁護之鎮守一府帰依之尊神云々

公家轉法輪御修法諸神勸請

御札銘云

┌ 3折

鎮西鎮守寶満大菩薩云々

竈門宮三所

一御殿 寶満大菩薩

二御殿 聖母大菩薩

三御殿 八幡大菩薩

宮崎宮三所

一御殿 八幡大菩薩

┌ 4折

二御殿 聖母大菩薩

三御殿 寶満大菩薩

宇佐宮三所

一御殿 八幡大菩薩

二御殿 妣姪大神寶満大菩薩

三御殿 大多良智女聖母大菩薩

一交了┌ 5折

出典：神奈川県立金沢文庫『金沢文庫の中世神道資料』神奈川県立金沢文庫 一九九六年

四七頁

なお、囲みや傍線などは筆者によるものである。

垂迹於竈門峯云々

聖武天皇御宇神龜元年神龜竈

門宮上下宮同十所王子香椎社

等草創之矣

十所王子

┌ 4折

第一 松尾大行事本地不動尊

第二 金凝王子本地普賢菩薩

第三 竈門王子本地釈迦如來

第四 竈尾王子本地大勢至菩薩

第五 ^中津尾王子本地文殊師利菩薩

第六 聖御子本地久藏菩薩

第七 兩土御子本地弥勒菩薩

┌ 5折

第八 鈿阿御子本地阿弥陀

第九 照御子本地月光菩薩

第十 日照御子本地日光菩薩

根本地主太田大明神本地大日如來

阿多鉢本地文殊師利菩薩

高良社

八幡大菩薩御託宣云 延喜廿一年六月廿一日略之上分獻上宮會在之

┌ (紙背)

一條院御宇長保元年長保為近江國役

被修覆當宮并四王寺五壇法道

場且依御託宣有智山三十講

為每年不國之大會 講山第一之佛事也已下大小佛神事

等勤行之

九州鎮守事

神功皇后三韓征伐之時

┌ 1折

妣姪寶滿顯現二身一身者守護本

朝為本朝鎮守一身者征伐異國云々

八幡大菩薩於大分宮被定諸國鎮守之時

寶滿大菩薩者雖被授本朝鎮守之

永元

竈門山十所王子御本地事
 寶滿現二身御事
 四王寺五旦諸佛法傳來以前事
 八幡降誕之時文殊弥勒授戒事

竈門山寶滿大菩薩記九國二嶋
 惣鎮守

鎮西九州二嶋鎮守竈門宮

寶滿大菩薩

往古者

姿竭羅龍王五所姫宮

今生者

息長宿禰四所御女

第一 法華八歳龍女 今生除之 └ 1折

第二 寶 滿大菩薩 筑前國

第三 聖 母大菩薩 筑前國

第四 河 上大明神 肥前國

第五 高知尾大明神 日向國

神功皇后御宇三韓征伐之時

妣姪大寶滿命自着金鐙捧

鐵杖降火雨相共亡異國土 └ 2折

月歸朝之後十一月十七日

皇后誕生於 應神天皇 妣姪

大寶滿命登高山龍圖峯許

名佛頭山又立竈門以茲改佛頭山名更号
皇御笠山竈門山始自此時矣

與天龍水下生水浴弥勒文殊從空

來坐授戒定惠而去妣姪歡喜曰

我此山常住 開闢一乘法 └ 3折

鎮護本朝國 度脱苦衆生

發願已畢 同御宇壬二月日 壬

史料 8 「金剛吉祥大成就本第九」 『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經 卷下』

*能生一切福。*能滅一切罪。*能令一切有情見者歡喜。能解一切衆生語言。速成諸部頂輪。最勝無比奇特難勝。超過十地。攝一切諸佛菩薩金剛諸大天王。能成辦一切難解之事。速疾無過。五部深密皆悉能成。一時齊證時。金剛薩埵對一切如來前。忽然現作一切佛母身。住大白蓮。身作白月暉。兩目微笑。二。羽住。騰。如入奢摩他。從一切支分。出生。十。機識沙俱抵佛。一一佛皆作禮。敬本所出生。於剎那間。一時化作一字頂輪王。執輪印。頂放光明。偈徹目視現大神通。還來禮敬本所出生一切佛母。真言我所說一切頂輪真言。唯願尊者與一切衆生作大成就。我今唯願尊者作大吉祥。令其成就。爾時本所出生一切佛母金剛吉祥願觀一切方所。說根本明王曰

出典：高楠順次郎他編「金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經 卷下」 『大正新修大藏經』(二八卷) 二

六〇頁 一九六一年

なお、囲みや傍線は筆者によるものである。

史料6 「提婆品 下八箇大事」『御義口伝』

第五我於海中唯常宣說事
 御義口傳云。我トハ文殊也。海トハ生死海也。唯トハ唯一乘法也。常トハ常住此說法也。妙法蓮華經トハ法界ノ言語音聲也。今日蓮等之類南無妙法蓮華經ト奉唱是也。生死ノ海即真如ノ大海也。我トハ法界ノ智慧也文殊也云云

出典：高楠順次郎他編「御義口傳」『大正新脩大藏經(八四)』(再刊発行) 大正新脩大藏經刊行会 一九六三年 三一九頁

史料7 「愛染王本第五」『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經 卷上』

オーン 大貪染者よ 金剛仏頂よ 金剛薩埵よ ジャハ フーン
 ヴァン ホーホ

出典：(原文) 高楠順次郎他編「金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經 卷上」『大正新脩大藏經』(二八卷) 二五六頁

(和訳) 渡会瑞顕編『十三仏の世界』ノンブル社 二〇一五年 頁
 なお、囲みや傍線は筆者によるものである。

文殊師利言。我於海中。唯常宣
說。妙法華經。智積菩薩。問文
殊師利言。此經甚深微妙。諸經
中寶。世所希有。頗有衆生。勤
加精進。修行此經。速得佛不。

文殊師利言。有。娑竭羅龍王女。
年始八歲。智慧利根。善知衆生。
諸根行業。得陀羅尼。諸佛所說。
甚深祕藏。悉能受持。深入禪定。
了達諸法。於刹那頃。發菩提心。
得不退轉。辯才無礙。慈念衆生。
猶如赤子。功德具足。心念口演。
微妙廣大。慈悲仁讓。志意和雅。
能至菩提。智積菩薩言。

出典：坂本幸男、岩本裕 校注『法華經（中）』岩波書店 一九七六年 二一八頁
なお、囲みや傍線などは筆者によるものである。

史料3 『尊卑分脈』

父頼義朝臣參詣八幡宗廟於社壇賜三寸灵劔之由蒙感夢之告且晨於其枕床
得一柄小劔仰神德拭感淚即安置此靈寶為一家珍璧焉自蒙彼灵夢之月妻室
懷抱即令出生男子畢今義家朝臣是也仍七歳春於祖神社壇依加首服号八幡
太郎云、

出典：黒板勝美編『尊卑分脈 (三)』吉川弘文館 一九八〇年 二三四頁

史料4 「真言秘奥抄」『溪風拾葉集 卷一〇八』

一。何故法滅時經卷如納龍宮耶。一龍
宮者盡癡室也。盡癡源無明也。故佛法法
性滅歸無明本源也。一大海者水大也。
此水大す字也。す字即金剛界智體也。故
龍宮即一心本源也。此正報約時。我等水
輪中本初龍神有。此龍神者。我等遍知分
別全體也。此一念三千經卷納也。何一
代教法行者心地現云此事也。故自然
理佛法龍宮納也。又水大す字也。す字
萬法種子教法源也。す字言說不可得義

出典：高楠順次郎他編「溪風拾葉集」『大正新脩大藏經(七六)』(再刊発行) 大正新脩大藏經
刊行会 一九六八年 八六三頁。なお、線は筆者によるものである。

蓮花ハ心性八葉ノカリタ心明鏡ハ質多心凡色心根本ヲ表スル也箱ハ此ノカリタ質多
ノ二心ノ々性ノ宝篋ヲト表スル歟三衣ハ本覺ノ三身又怙數合スレハ三十七是住心城ノ
三十七尊也鈿ノ諸尊面々ノ本有金剛ノ智也
凡ノテリタ質多重累ハ境智冥合ノ理智不二ノ奥旨トシ此不二ノ一心ハ即チ寶珠万福ノ
軀ナレハ以三衣福田衣ヲ表之ヲ只歸命本覺心法身常住妙法心蓮臺本來具足三
十七尊住心城イヘル文ノ意ヲ造作セル御軀也歸命本覺心法身ハ今ノ円鏡ノ所顯ナリサ
テ八葉蓮華ハ心蓮臺三衣ハ三身條數ハ三十七尊也已上口決ノ義ニハアラス只蒙神
軀示授ヲ秘所推也恐々非一穴賢々々

出典：神奈川県立金沢文庫『金沢文庫の中世神道資料』神奈川県立金沢文庫 一九九六年
四三―四五頁

なお、囲みや傍線、番号などは筆者によるものである。

⑦ 凡日本者、大日、本国也其、大日、者、天照大神今、日天子也日天子者、即、愛染明王也是、大日所現、愛染也即、天照所現、日天子、ナルガ故也今此、愛染日天應作、應神天皇、トシテ頭、ハレ大菩薩、ト現、給高祖、勸入唐、終、守護、東寺、流、々々々、以、秘經、為、肝心、此、經、肝心又愛染明王也明王、肝心即、寶珠也、大菩薩、御、ト軀、ト全、ト軀、又、寶珠也所、ニ繪、スル秘經、肝心即、大菩薩也可秘之、々々々々

・八幡大菩薩御形像事

口ニ云ク比丘形ニシテ着納衣ヲ右手ニ持錫杖左手ニ執ル念珠ヲ御首ノ上ニ頂戴ス日輪ヲ老僧ノ御質也御加沙ニライテハ又赤色ノ説モ有之錫杖、六〇者、愛染、六臂念珠者、又大悲深重ノ表示頂上日輪者、即、御本地愛染明王三尸耶身如意寶珠也大師ノ御尺云囉怛曩寶波祇伽、珠也日〇寶珠ト云事大日經ノ説也

・又此、御軀示現ノ本意、大師御入唐ノ時、真言教ノ日出、事ヲ顯、キ為、此、御質ニシテ大師ニ御對面アリ此、御軀、即愛染王ト示現、給サレハ大師ニハ真言教ノ日出事ニ候也相構テ愛染法ヲ能ク習傳テ歸朝アレト大菩提子コロニ大師ヲ奉教給、サレハ東寺ノ真言ノ所入眼者、只愛染王ト習、ト留、ムル也、其ノ時、大菩薩大師相互ニ御影ヲウツシ奉、リ給、フニ鋪、ニ俱、ニ在、ス高雄ノ神護寺ニ不思議御事也、リ爾ノ時、大師ノ御影、不同世上流布ノ御影、ハ如、シ東寺ノ不動ノ習傳也深秘々々サレハ大菩薩大師ハ二明王ニ御坐也

・又頂戴ノ日〇者、灌頂ノ深秘、只此ノ日精、ト居、ト表示、シ給也サレハ秘密灌頂ノ最秘ノ中ノ深秘、ハ只是也秘密灌頂即、寶珠々々即、秘密灌頂也可秘々々

又大菩薩ノ平等王ト云習有之、ト是、ハ付、テ王、ニ有、ス平等王ノ習故也、リ錫杖、ハ即、チ地藏ノ三尸耶身炎ノ大王ノ人頭幢也、ト今謂ク此習、ハ刺、サヘ、ノ才覺也、リ只次、キ上、ノ習、ニサテト充事也、リ

・頂上ノ日〇者、即、チ大祖山影向ノ一標手半ノ日輪、ト取入、テ其上、ニ上来、ノ深義ヲ可云也、リ穴賢々々

・男山神軀御建立事

或人秘ニ示、シ云大菩薩ノ御事、只在知之、テ秘中深秘敢、キ不可令漏脱者也、リ

・石八葉蓮華ノ上ニ奉安置八葉形ノ明鏡、ト但明鏡ハ円鏡歟、ト明鏡ノ上ニ置ク金銅方形三衣箱々々内納三衣々々々ノ重累、スルト底ハ大衣、ニ上、ノ中、ハ也箱ノ蓋ノ上ニ釘ヲヨコタヘテラケルヤ、ト上、ノ上人言

八幡大菩薩口決

・早珠滿珠般若法花、是種子三尸耶、兩万タラ也謂早珠般若、金界、大日滿珠法花、是台界遍照、内證也。般若、亦名如意珠、說法花、無上寶珠、申、俱寶珠、云事經文明鏡也。此、兩部、種子三尸耶、超過大日、明王、^①内證、三尸地也。深秘々々、仍八幡、御本地、有淺略深秘、一淺略、西方、ミタ深秘、南方、^②内證也。故、知、海中所進、珠与、經八幡大菩薩、種子三尸耶、深秘也。海、法性、大海籠、本有金剛、智住吉、金輪聖母、佛眼、也可秘之、々々々

③ 大祖山者、阿祖山、事也。大日經所說、山也。八幡大菩薩本有恒居、淨土常在、鷲山密巖花藏也七尺、神者、七者七寶、義神者塔婆、代也。大菩薩、所乘即、大日所居、塔婆也。鈴、驚覺召請、義一尺二寸、日天子者、即中等身、愛染明王大菩薩、御本地也。号、四王寺、四王、四佛、教令仍、日〇、大日四王、四佛サレハ五佛堂也。五壇、修法即、此意、歛中壇、下、金色、水、愛染大悲、至極一切衆生能生、一水又雙円性海也。般若、音、惠水故、晝、唱之、法花、聲、定水故、夜、轉之、每朝所現、妙、字者、巨晝夜、頭、一經、不思議也。早且、夜終、晝、始、晝夜、相兼、一時、以、一字、讀、二經、々々、兩部、一字、不二、妙成就也。深秘々々、一尺二寸、又中等身、表示也。拳中、納、初後、三種、等身、又三部、大日也。初等、金界後等、台界。

④ 次、宇美、宮、斎、緒、成藤、者、膳者、日天子也。緒、愛深、種子、^ス字也。藤者、^ス字、々、幹、^ス字、形、也。謂、蛇形、深秘也。槐、者、槐門擁護之、表示故、執柄、藤氏、由来併、依此、加持力、也。

⑤ 次、箱崎、一尺二寸、金箱者、隨、箱、光也。故、曰、一尺二寸、光明、自左右、踵向、上、也。是大菩薩内證、肝、箱也。一尺二寸、表示又同、上、金色者、金剛不壞、義也。上、金水金字又同、之、左右、光明、兩部、充也。箱者、有函蓋々々、天地理智冥合、第九識、^{ナリ}七佛世尊、内證ナレハ七佛世尊之定惠、^云九識、箱、納、^ル八識八相法門也。又八重幡、深義者、八正道八葉八分、心都也。

⑥ 凡志賀嶋、明神者、今、春日、大明神也。サレハ槐、藤、又今、八識、法門、皆、興福寺、人法神明加護、由也。サレハ八幡、法相守護、御願有之能々、思之、又逆松者、松、々、柏千年表、^ル仙道延命之由、^{ナリ}是、日本衆生、^{ラシテ}法身常住、^テ惠命、^ヲ欲、^{スル}令、^テ顯、^ル得、^ル御願也。逆、下、化衆生、義也。凡海浪、底、箱、今、箱崎、松、下、有之、金界、^ス字、大海、^ス字、不生、大地也。又、^ス俱、^ニ常住也。故、以、松柏千年、頂上、凡彼、松、我等衆生、當来、決定成佛、印治決定、シルシ也。八重幡者、八葉八相ナレハ、顯密、測底也。幡者、勝軍、義、摧破、^{スル}煩惱、^ノ軍衆、義也。依之、箱崎、浪、松、俱、不思議深奥、法門、^{ナリ}故、或、人、哥、云、箱崎、^キヤ、松、^クカセトナミノヲトフカクタノメハ、四德、ハラ、密、^ト々々

風ノ走ルコト地似騾驢ニ其力用不異雷震ニ如是競勝負之間高麗泊遠日本津又遥廻埋途中ニ踟躕スル両様之間已臨疲此詮ニ大多羅姫ヲ納テ早珠ヲ出満珠ヲ帶拜如前自満珠而経中如前放テ佐光ノ入敵陣還成巨海ト弓箭兵杖浮海上ニ甲冑鉾楯沈底下ニ令敵伏波間悉ク風ト共ニ失テ此軍ノ日八月十五日也八幡放生會發ル自リ此以心經提婆品ヲ為ス會日講經ト

⑤ 然間博多ノ津着ス國中ニ有靈岳ハクホノタケト名々大多羅姫此ノタケニ登テ七尺ノ榊ノ枝ニ付テ鈴ヲ向テ天ニ振テ付テ鈴ノ音ニ守護天童影向給趣岨請ニ一標手半ノ日天影向生身ノ軀也為ニ奉安置此御身ヲ建立一字ノ伽藍建立以後号四王寺ト大祖大仙ヲ為師ト始テ五壇ノ修法大仙ハ中壇阿闍梨法花般若兩部ノ法也七日ノ法成就自壇ノ下金色ノ靈水涌畫唱遠離一切軛倒夢想ト夜ノ韻我於海中雖常宣説即号妙法般若ノ瀧也仍毎日早朝ニ一尺二寸ノ金色ノ妙ノ字現スル事于今不絶嚴重ノ不思議也故ニ人又号妙池ト

⑥ 大多羅姫産期来下リテ件ノ山ノ坎ノ里ニ儲産所誕生ス王子ヲ切テ王子ノ臍ノ緒ヲ發願ヲ為テ日本國ノ主可ク遂成佛ヲ構テ此ノ山ノ齊ノ緒成テ藤ト生ニ榮ヘテ發願シテ懸テ槐ノ木ノ枝ニ應テ願ニ為テ藤ト現ニ在リ是レ日本ニ規模也御誕生ノ産所宇美宮是也

⑦ 王子ノ負テ背ニ為ニ清ル産ノ觸穢ヲ出箱崎濱錦衣纏テ王子ヲ淹塩海ニ其間ニ聞テ王子ノ啼聲ヲ驚テ上濱ニ王子ノ踵下ニ一尺二寸ノ金色ノ光立テ左右ニ尋テ光ヲ見ニ底ニ有リ一尺二寸ノ金箱々ノ中ニ納テ八重ノ幡見テ之ヲ大多羅姫問王子ニ々々告聖母ニ云フ箱々七佛世尊ノ定惠幡ハ相八識ノ法門也弘テ此法ヲ給テ時先ク日本國ノ衆生ヲ最前ニ利益ヲ給テ此ノ事必定ラハ此ノ松ノ枝逆ニ生テ付テ發テ願ヲ折テ松ノ枝ヲ逆ニ指殖ニ其ノ松ノ根指テ葉榮テ現ニ在リ箱崎ノ松是也殖玉ヘリ上件ノ箱々上ニ故ニ云箱崎ノ松ト其松ノ形逆ニ指テ枝ヲ世人云逆松ト

其後自被崇日本ノ帝王以來為テ本朝ノ鎮守鎮護ノ立德芳名不廢田園万民覆顧弥綸六合ニ案ノ聖化ノ始終尋ルニ本迹ノ由来偏ニ由テ法華般若ノ功力ニ八幡ノ記文云我ノ松若ク枯レハ知レ我ノ歸ト本土ノ寂光ニ我ノ松不枯知亦在ト日本國ニ此ハ皇帝御覽ノ秘文也仍下品ノ類ニ拜見恐冥加テ何況テ披露ヲキ乎穴賢々々

一交了

出典：神奈川県立金沢文庫『金沢文庫の中世神道資料』神奈川県立金沢文庫 一九九六年 四三頁

なお、囲みや傍線、番号などは筆者によるものである。

八幡大菩薩口決

① 沙竭羅龍王有四人女子一女子生年八歲龍女依文殊通經語靈鷲山無垢世界唱成道二女子香椎聖母大菩薩大多羅姬三女子竈門寶滿大菩薩四女子河上權現俱鎮西三神也聖母大菩薩住吉大明神為衆生齊度現本朝王后即仲哀天皇后是也皇后一人王子懷妊依先王命為降伏新羅高麗東夷鷄舟敵國懷妊王子為大將渡異國大將軍即先王御本體住吉大明神副將軍志自岐大明神田嶋大明神安曇磯等志賀嶋大明神護持僧大祖山大祖大仙是又俱鎮西神也以志賀嶋安曇磯等為梶取依件胎中童子口狀海中早珠滿珠一顆玉般若法華兩部經記御書進龍宮城御使件磯等也即詣龍宮城々々々東南西北四門如次黃金緝瑠璃水精頗胝迦寶也然押開南門入其日宿直官兵加制止受理出門外自門外陳其詞南閻浮提大日本國香椎里御坐沙竭羅龍王之第二妣宮聖女大菩薩大多羅妃欲進指頓急御書々々御使志賀嶋安曇磯等申海人參候陳々狀音高響宮中王為始宮中皆聞之宣旨云日本御書并御使急參隨宣急參無取次手次召上御書御覽依子細之御狀欲進法華般若兩部經之處諸龍僉議云二顆珠世間珍寶左右何為但兩部經出世規模仍不可出海水佛法王法左右角佛法出外土王法豈存海中乎即堅怪大王受道理不及力其中有著宿臣申云法華中提婆品為最般若中心經為宗仍兩部中撰二卷經申進依此義二顆珠并二卷經進日本大多羅妃得經五種修行スルコト七日七夜也依祈禱四ヶ國中先東夷次鷄舟次新羅高麗征伐其後須麗茶礫一臣從唐土依勅勒被流高麗國者也日本諸神欲令歸朝尅住吉大明神石札見銘高麗日本大發我執大國歸小國猶遺恨也剩何云夫哉仍鬪戰之心發數千萬艘官兵追日本船即取日本船須茶二將放大御聲言大國隨小國有恨事也稱大道理如何不宣理者罷留于大多羅姬出自屋形内左御掌持提婆品般若心經二卷取副早珠玉向敵國申腕於是自奉掌中如明星光出乱散敵陣内若干蒼海陣為始諸方乾于其時敵官兵等捨船步陸二人大將左右各仕六鉦一人十二鉦故二人二十四鉦也飛上天如鳳

岡県』、角川書店他、一九八八年、一〇七一頁、「角川日本地名辞典」編纂委員会編、同「箱松〈東区〉」一〇七三頁、前掲註27 重松 八二―八三頁、「生の松原」(『日本歴史地名大系』四一巻 福岡県の地名)、平凡社、二〇〇四年、有馬学氏他執筆。(ジャパナレッジより)。

¹²⁸ 前掲註14 萩原 一七四頁。

¹²⁹ 「安曇磯良」(『日本国語大辞典』(第二版 第一巻)、小学館、二〇〇〇年、日本国語大辞典 第二版編集委員会編。ジャパナレッジより)。

¹³⁰ 阿部泰郎「海人と王権」『中世日本の王権神話』名古屋大学出版会 二〇二〇年 一八九―二五三頁。

¹³¹ この『志度縁起』では鎌足女(不比等の妹)は大唐の高宗皇帝に嫁ぐことになり、鎌足の追善供養のため興福寺に不向背珠を含む三つの珍宝を捧げた。使節が宝を船に載せて送ったが、暴風波瀾によって讚州房前浦(志度の浦)で海中に珠が入ってしまった。不比等は悲嘆して房前浦に赴き、その後、三年を経て海人との間に一子をもうけた。それから、海人は自身の菩提とこの行く末を不比等に託し、珠の所在を見るべく入海し、龍宮に珠があることがわかり、その後、龍宮から珠を奪い取ったが、龍王によって海人は害されてしまった。しかし、珠は無事であった。珠を得た場所を真珠嶋と名付け、海人を葬り、天武天皇一〇年には精舎を建てて死度道場と名付け、不比等は珠と子を併いて都へ上り、珠を興福寺の金堂釈迦仏の眉間に嵌め、これが如意宝珠であるとする。珠を慕って龍王が興福寺の守護神となって猿沢池に住んだ。不比等に自らの出生について聞いた房前は、行基とともに房前浦へ向かい、地底より亡母の声を聞き、墓に参って法華八講、千塔造立をしたという(同前 二〇七―二一〇頁)。

¹³² 同前 二二二頁。

¹³³ 史料2―⑦を参照。図4にも示した通り、日本は大日の国であると説かれ、その大日は天照大神であって、両者は日天子に象徴される。日天子は愛染明王であり、この愛染は大日如来が現れた姿であるという。それは天照が現れた姿が日天であるためだ。その愛染日天は応神天皇の姿で衆生の前に現れ、八幡大菩薩という姿をとり、弘法大師に入唐を勧め、東寺流を守護し、東寺流は秘経を重要視し、この經典の肝心は愛染明王でもある。明王の肝心は宝珠である。そして八幡大菩薩の体は宝珠なのだという結論に至っている。特に注目すべきは、弘法大師と宝珠の言説であると考えられる。日本密教の始祖である弘法大師をも導くような密教の道へと誘う教祖のような偉大な存在であると説かれているわけだ。また、八幡神自身が宝珠、すなわち如意宝珠とも重なることは、密教を以って万物を利益する力を備えていることの表れである。単なる護法善神のような存在ではなく、仏法を広めるための存在、仏教の根源者としての役割を担っているという立場から八幡神を捉えているといえるだろう。なお、秘経とは、中世に好まれた、僧俗問わずあらゆる利益をもたらす愛染法のことであろう。

120 日神』『神仏と儀礼の中世』法蔵館 二〇一一年 四六六頁。

121 前掲註6 船田 四六六頁。

121 同前 四六六頁。

122 船田氏は「調伏」とは敬愛・増益を通して最終的に「息災」に至るのであり、調伏とは対極にして不二なのである。こうした例に徴すると〈源氏〉＝調伏と〈藤氏〉＝息災の関係は、釈尊・不空羂索一对の図像の構図からも、こうした調伏・息災不二の儀礼的理念を背後に有していると思われることができよう。」と指摘していることから、単なる呪殺を目的としたわけではなく、息災の意味も現れ、密教の修法が表裏一体であることの現しているといえよう（同前 四六七頁）。

123 八識とは、唯識説で説かれる八識中の第八識のことを示し、宇宙万物の根源であり、万有を蔵することから蔵識とも言われ、万有発生の種子を蔵するものとして種子識とも呼ばれる（『阿頼耶識』）
〔例文 仏教語大辞典』、小学館、一九九七年、石田瑞麿氏執筆。ジャパンナレッジより）。すなわち、世界全体、物質性を指すと考えられる。

124 自ら心のうちに仏の真理を悟ったこと。また、悟った真理（内証）
〔『日本国語大辞典』（第二版 第十卷）』、小学館、二〇〇一年、日本国語大辞典 第二版編集委員会他編。ジャパンナレッジより）。
125 金色は仏身の色や浄土に往生した者を表す（『金色』）（『日本国語大辞典』（第二版 第五卷）』、小学館、二〇〇一年、日本国語大辞典 第二版編集委員会他編。ジャパンナレッジより）ため、仏に近い存在として八幡神を表す表現といえる。

126 禅定と智慧は鳥の両翼や車輪に例えられ、たがいに助け合って仏道を成就させるものとされている（『定慧・定恵』）（『日本国語大辞典』（第二版 第七卷）』、小学館、二〇〇一年、日本国語大辞典 第二版編集委員会他編。ジャパンナレッジより）。

127

箱崎の由来に関する説は大きく分けて二つ挙げられる。一つ目は戒定恵の筥を埋めたことが箱崎の由来になったという説。二つ目は、宇美で応神天皇を生んだ時の胞衣を筥に納めて埋め、そのしるしに松を植え（筥松）、それが由来となったという説である。前者は筥崎宮の縁起である『筥崎宮縁起』のほか、大江匡房が記した『筥崎宮記』に見られ、後者は宇美宮の縁起である『筑前国糟屋郡宇瀨八幡宮縁起』に見られる。そのため、前者は筥崎宮側の説で、後者は宇美宮側の説であった可能性が高いと見られる。両者には逆さ松に関する記述がないが『託宣集』や江戸時代の『太宰管内志』に記載のある『御由来記』には、大帯姫（大多羅姫）と八幡が本朝に渡り、大帯姫は香椎に粉を、八幡神は筥崎に松を逆さに植え、さらに八幡は戒定恵の箱を松の下に埋めたことが箱崎の由来となったという説がある。また、逆松に関する言説は、箱崎の他に生の松原と老岐神社（老岐直真根子社）にもある。神功皇后が朝鮮半島へ出兵した際に、浜に松の枝を逆さに差し、勝利して帰国できるのであれば、この松の枝が生きるであろうと祈ったところ、松が生きたことに由来する。『口決』においては、大多羅姫が逆さに松を植えて祈願をした言説が共通することから、この伝承が『口決』の逆松の言説に入り込んだ可能性が考えられる（広瀬正利 編校「筥崎宮縁起」『筥崎宮記』『筥崎宮史』文献出版 一九九九年 二七六―二七七、二七九、三四九―三五二、石清水八幡宮社務所編「筥崎宮縁起」『筥崎宮記』『石清水八幡宮史料叢書』（一）縁起 託宣 告文）
続群書類従完成会 一九七六年 二二―二四頁、筑紫豊、中野幡能校注「筑前国糟屋郡宇瀨八幡宮縁起」『神道大系（神社編四十四 筑前・筑後・豊後・豊前国）』神道大系編纂会 一九八二年 一〇〇頁。伊藤常足編『太宰管内志（上巻）』文献出版 一九八九年 一六七、一八四頁、「箱崎（東区）」（『角川日本地名大辞典（四〇 福

判断するのが妥当であろう。

111 「妙成就」(『例文 仏教語大辞典』、小学館、一九九七年、石田瑞
磨氏執筆。ジャパンナレッジより)。

112 三部とは、仏部・蓮華部・金剛部の三部と胎藏法・金剛法・蘇悉地
法の三部の二種類があり、三部の直前に蘇悉地の訳である妙成就
とあるので、後者の意味を指していると推定される。胎藏・金剛・
蘇悉地の三部の関係について、胎藏では、後者のように金胎両部に
蘇悉地を加えて三部とし、蘇悉地を両部不二の最深秘法と理解さ
れる。対して、東密では一つ目に両部と蘇悉地を別に立てず、両部
を一つにまとめた極位を妙成就とする場合と、二つ目に同じく両
部と蘇悉地を別に立てず、両部各々がそのまま不二であることを
示すことを妙成就と指す場合の二パターンが存在する(「三部」
『密教大辞典(増訂版第二巻)』、法蔵館、一九九九年、八二〇頁、
密教辞典編纂会編)、『蘇悉地』(『密教大辞典(増訂版三巻)』、法蔵
館、一九九九年、一四一〇頁、密教辞典編纂会編)。金胎両部の他
に、蘇悉地を別に立てて三部とすることから、胎密の理解であると
も考えられるが、一方で史料の後半において、高祖(弘法大師)入
唐や東寺に関する言説が見られることから、ここでは、東密の理解
である可能性も捨てきれない。結論としては、東密、胎密の理解が
組み合わされた理解がなされた、もしくは胎密の三部の考え方が
東密へ影響を与えたとも考えられる。

113 現在の宇美八幡宮のこと。後述する宇美八幡宮の槐の木(子安の
木)は神功皇后が応神天皇を出産した時に槐の木の枝に取りすが
ったという由緒がある(宇美八幡宮「宇美八幡宮について」
<http://www.umii-hachimangu.or.jp/about/> (最終閲覧日 二〇二
一年一月二二日))。

114 𣎵は梵字としては「かん」と読み、ローマナイズされた音として
は「han」である。(渡会瑞顕編『十三仏の世界』ノンブル社 二

〇一五年 四二六頁)。

115 𣎵とは体文(子音)が両者共通することから、同じであると
いう解釈がされたのではないかと考えられる。

116 鎌倉幕府三代将軍源実朝の歌集である、『金槐和歌集』の「槐」の
字の由来は大臣の唐名である「槐門」が由来である(「金槐和歌集」
『日本国語大辞典(第二版 第四巻)』、小学館、二〇〇一年、日
本国語大辞典 第二版編集委員会他編。ジャパンナレッジより)。
117 執柄とは政治の権力を握ること。また、その人。摂政、閑白の異
名(「執柄」『日本国語大辞典(第二版 第六巻)』、小学館、二〇
〇一年、日本国語大辞典 第二版編集委員会他編。ジャパンナレ
ッジより)。

118 天孫降臨の際に天照大神と藤原氏の祖とされる天児屋命の間で約
諾が行われ、天照大神の神裔である天皇を天児屋命の神裔である
藤原摂関家が擁護するという現実世界の説明がなされる神話である。
藤森氏によれば、この「約諾」という言葉を用いて両者の関係
を表したのは慈円であるとしている(藤森馨「二神約諾神話の展開」
『日本における宗教テキストの諸位相と統辞法』「テキスト布置の
解釈学的研究と教育」第四回国際研究集会報告書」名古屋大学
院文学研究科、二〇〇八年、二四〇頁)。

119 先述の船田氏は興福寺南円堂の不空羂索観音像に関する史料の一
つである『不空羂索事』という口決の言説に注目している。この史
料において、藤氏を象徴する藤が、源氏を象徴する松の大樹に絡ま
るといふ言説が構築されている。さらに、藤氏を不空羂索、源氏を
釈迦に象徴させ、史料の最後にはそれらを表す挿絵が載せられて
いる。船田氏は「釈迦」調伏法(入滅)「源氏」不空検索「息災法」
「藤氏」といった図式を取り、それが密教修法のシンボルとして機
能していたことが窺える(船田淳一「摂関家の南円堂観音信仰と春

に神が組み込まれていたことがわかる。『高良神秘書』の成立年代は不明であるが、当史料の編述は中世末期から近世初期とされている(荒木尚他編(一九七二)一九二頁)。しかし、『愚童訓』や『託宣集』、それ以降の時代に編述された『高良玉垂宮神秘書』には、『口決』における「驚覚召請の義」という密教の金剛鈴を想起させるような記述は見られない。

¹⁰⁰ 新羅の侵攻に備えて宝龜五年(七七四)筑前国、貞観九年(八六七)伯耆・出雲・長門国などに建立された寺。筑前国四王寺は現在の福岡県糟屋郡宇美町にあった(「四王寺」(『国史大辞典』、吉川弘文館、一九八五年、国史大辞典編集委員会編。ジャパナレッジより)。

¹⁰¹ 教令とは大日如来の教えに従わない者を教化するために怒りの相を表すことで、大日如来の教令身としては普通、不動明王がその任にあたる(「教令」(『日本国語大辞典』(第二版 第四卷)、『小学館、二〇〇一年、日本国語大辞典 第二版編集委員会編。ジャパナレッジより)。

¹⁰² 史料2-③には、「日天子」は「中等身」の愛染とあるので、大日如来と愛染明王を同体視していると見られる。

¹⁰³ 『竈門山宝満大菩薩記』によれば、長保元年に四王寺の五壇道場が近江国役によって修復されたという記述(史料9『竈門山宝満大菩薩記』)があり、四王寺の五壇道場の修繕という史実を大多羅姫の言説を組み込んだものと考えられる。

¹⁰⁴ 大仙とは偉大な仙人のことで、如来の異名という意味もある(「大仙」(『例文 仏教語大辞典』、小学館、一九九七年、石田瑞麿氏執筆。ジャパナレッジより)。

¹⁰⁵ 般若心経の一部。真実に対するあらゆる偏見や迷いの心からすっかり抜け出すことができることを表す(前掲註27 松長 一七六頁)。

¹⁰⁶ 「法華を夜、般若を書」という言説は、乙本冒頭で法華が無上宝珠、般若が如意宝珠とされた点から考察すれば、先述の『麗気記』「豊受大神鎮座次第」の水珠・月珠は豊受皇大神、火珠・日珠は如意宝珠、天照皇大神とする記述の、日と月(すなわち、昼夜)に見立てる思想からヒントを得たものではないかと推測される。

¹⁰⁷ 「雙円」は円満な上にさらに円満なこと。完全円満なこと。「性海」は真如(仏の悟り)の世界を海に喩えたことを指す(「双円性海」(『例文 仏教語大辞典』、小学館、一九九七年、石田瑞麿氏執筆。ジャパナレッジより)。

¹⁰⁸ 「定慧・定恵」(『日本国語大辞典』(第二版 第七卷)、『小学館、二〇〇一年、日本国語大辞典 第二版編集委員会編。ジャパナレッジより)。

¹⁰⁹ 史料1-⑤では、「妙法般若ノ瀧ト也」という記述が見られるが、そこから両経の功德によって煩惱を消し去る例えとしての意味が瀧には含意されているとも考えられる。

¹¹⁰ これは余談だが、「妙」の一字として他に想定したものととして、平安中期の仏教書である『大日本法華験記』下巻第一〇「肥後の官人某」の「妙の一字」についても検討した。この説話によると、ある聖が西の峰の山の上に卒塔婆を立てて、法華経を埋め、法華経が広野に住して一切衆生の抜苦の願をかけた。年月を経て卒塔婆が壊れ、法華経は風に吹かれて他方世界へと散ってしまったが、妙の一字だけがその残り、衆生を利益しているという。これによれば、妙の一字は衆生を利益する象徴とされている(井上光貞、大曾根章介校注『往生傳、大日本国法華験記(日本思想大系七)』岩波書店一九七四年 一九三頁)。しかし、これは『法華経』の「妙」に関する言説であって、般若心経との繋がりはない。その点から『口決』の文脈としても両部不二の妙成就の「妙」を表している

『法華経』や『無量寿経』などを説いた所として著名。山中に鷲が多いからとも、山形が鷲の頭に似るからともいわれる（『靈鷲山』）
〔例文 仏教語大辞典〕、小学館、一九九七年、石田瑞麿氏執筆。ジャパナレッジより）。

⁹⁰ 密厳とは、密厳国と蓮華蔵世界のことを示し、密厳とは三密の万徳によって莊嚴された大日如来の浄土、蓮華蔵世界とは華嚴経に説く毘盧遮那仏の世界を示している。密教では蓮華蔵世界は密厳国の別名であるとしている（『密厳華蔵』、『密厳浄土』（『日本国語大辞典（第二版 第十二巻）』、小学館、二〇〇一年、日本国語大辞典 第二版編集委員会他編。ジャパナレッジより）、『蓮華蔵世界海』（『日本国語大辞典（第二版 第十三巻）』、小学館、二〇〇二年、日本国語大辞典 第二版編集委員会他編。ジャパナレッジより）。

⁹¹ 直後には、大菩薩の所乗は、すなわち大日如来がいる塔婆であるとすする記述もある。

⁹² 一尺（約三〇センチメートル）の七倍（七尺）（『日本国語大辞典（第二版 第六巻）』、小学館、二〇〇一年、日本国語大辞典 第二版編集委員会他編。ジャパナレッジより）であるため、約二・一センチメートルである。

⁹³ 七寶とは、七種の宝玉のことを指す。七寶の解釈は経典によって異なり、例えば『法華経』では、金・銀・瑠璃・砗磲・瑪瑙・真珠・玫瑰を指すという。また、七寶には道という意味もある（『七宝』（『例文 仏教語大辞典』、小学館、一九九七年、石田瑞麿氏執筆。ジャパナレッジより））。そのため、『口決』では榊が仏道へと誘い、尊格を呼ぶ、依り代のような役割があるのではないか。

⁹⁴ 一揲とは、親指と中指を伸ばした長さである一揲手にその半分を加えた長さのことで、日本では持仏像や胎内仏を造る時の定則である。約一尺二寸（一揲手）、一揲手半（『例文 仏教語大辞典』、小学館、一九九七年、石田瑞麿氏執筆。ジャパナレッジより）。

⁹⁵ 衆生救済のために化現した仏・菩薩のことを指す（「生身」（『例文 仏教語大辞典』、小学館、一九九七年、石田瑞麿氏執筆。ジャパナレッジより））。

⁹⁶ 『託宣集』名巻二において、住吉縁起から大多羅姫が四王寺山に登り異国降伏の祈願を願い、大鈴を付けた榊を振る話が登場する。また、神々の私見には降伏祈願成就の間に寺と像を造ったとする記載（前掲註27 重松 八三頁）があり、この記述が『口決』に影響を与えた可能性がある。ただ、『口決』において榊を振る話は遠征譚言説の後に挿入されており、話の構成は『託宣集』とは異なる。

⁹⁷ 密教修法で、真言の呪をとまえ、三世の諸仏を覚醒して降臨を願うこと。また、仏が行者の心を覚醒させること（『驚覚』（『例文 仏教語大辞典』、小学館、一九九七年、石田瑞麿氏執筆。ジャパナレッジより））。

⁹⁸ 密教修法の時使用する鍔銅製の楽器のことで、諸尊を驚覚し、また歓喜させるための法具である（『金剛鈴』（『国史大辞典』、吉川弘文館、一九八五年、国史大辞典編集委員会編。ジャパナレッジより））。

⁹⁹ 例えば『託宣集』名巻二においては、大帯姫が新羅の征伐の時に、四王寺山に登り、大鈴を付けた榊を高く振り祈願すると、住吉大明神が姿を表したという言説が見られる（前掲註27 重松 八三頁）。また、『愚童訓』には「四王寺山ニ御行シテ、榊ノ枝ニ大鈴ヲ付ケ御手ニ捧テ立給事、六日儘ニ成レ共其験無。」とある（前掲註14 萩原 一七一頁）。さらに、高良大社の『高良玉垂宮神祕書』においては「一、高良ノ御文モツカウ叟、神功皇后 筑前四王寺嶺ニヲイテ、大ス、ヲサカキノエタニカケ、七日ツマタチ、イコクノタイシヤウイノリ玉フ時、…」とある（荒木尚他編『高良玉垂宮神祕書・同紙背』高良大社 一九七二年 一三―一四頁）。すなわち、『愚童訓』や『託宣集』以後の時代においても神功皇后の言説の中

〇〇二年 一七、二二頁。

⁷ 村山氏は、この「早珠は般若の如意宝珠（金剛界）、満珠は法華の無上宝珠（胎藏界）」という説は両部神道の代表的な神道書である『麗氣記』の構想と通ずる点を指摘する。その事例として村山氏は、一つ目に『麗氣記』『天地麗氣記』の「金色の如意宝珠、浄菩提宝珠となり、これ国常立尊心神本有の満字御形文なりとし、国狭槌尊・豊斟淳尊はそれぞれ青黒二色の宝珠にして、青色は衆生果報宝珠、黒色は無明調伏宝珠」という説。二つ目に「豊受皇大神麗氣記」においては、「水珠・月珠は豊受皇大神と名づけ、火珠・日珠は如意宝珠、天照皇大神と名づく」という説を挙げている（前掲註21 村山二二頁、和多秀乗校注「天地麗氣記」、豊受皇大神鎮座次第『神道大系（論説編 真言神道（上））』神道大系編纂会 一九九三年 二八一―二九、四七頁）。

⁷ 渡会瑞頭『十三佛の世界』ノンブル社 二〇一二年 五〇一頁。
⁷ 三昧耶とは一切の衆生を差異なく悟りの世界に入らせると誓い、そのように驚覚し、加被力を持つて利益を与えんとすることである（『三昧耶』（『例文 仏教語大辞典』、小学館、一九九七年、石田瑞麿氏執筆。ジャパンナレッジより）。

⁸ 史料2-②において、龍は本来備わった仏の智、海は真理と解釈されている。第二章では、龍（龍蛇）は煩惱を体現する存在であることとを指摘し、海に関しては『御義口伝』を用いて海は苦海、いわば混沌とした俗世間のような場所と解釈した。すなわち、聖にも俗にもなり得る意味が龍と海に含意され、「煩惱即菩提」のように一見、表裏の関係にあるものでも本来は同じであると読み取るべきである。

⁸ 仏眼（佛眼）とは悟りを開いた者の、一切を見て、一切を知る眼を指す。仏の内証の智も示す（『仏眼』（『例文 仏教語大辞典』、小学館、一九九七年、石田瑞麿氏執筆。ジャパンナレッジより）。

⁸ 高楠順次郎他編「金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇經 卷下」『大正新脩大藏經（二八）』（再刊発行）大正新脩大藏經刊行会 一九六一年 二六〇頁。

⁸ 大日如来が最勝の三昧にはいつて説いた真言である【ポロン】の一字を人格化した五仏頂尊の一つのことである（『一字金輪』（『例文 仏教語大辞典』、小学館、一九九七年、石田瑞麿氏執筆。ジャパンナレッジより）

⁸ スティーブン・トレンソン『祈雨・宝珠・龍 中世真言密教の深層』京都大学学術出版会 二〇一六年 二八七頁。トレンソン氏は、引用した「瑜祇經」のような佛眼と一字金輪が不可分である関係は中世日本の真言密教において知られていたとしている。また、佛眼は胎藏界大日、一字金輪は金剛界大日の化身と理解され、この解釈から修法を用いて両尊の真言を念誦することで、その修法における両部世界が完成されると指摘している。（同 二八七頁）すなわち、真言密教では佛眼と一字金輪は二つで一つと見られ、両部不二の思想を示すとされたのである。

⁸ 駄都とは仏舍利のことを指す（『駄都』（『例文 仏教語大辞典』、小学館、一九九七年、石田瑞麿氏執筆。ジャパンナレッジより）。

⁸ 前掲註84 トレンソン 二八七頁。
⁸ 坂本太郎他校注『日本書紀（二）』岩波文庫 一九九四年 一四六頁、井上光貞監訳 他『日本書紀（上）』中公文庫 二〇二〇年 三七〇頁。

⁸ 広瀬氏は『日本書紀』『神功皇后紀』において、神功皇后の新羅親征に従軍し、新羅を従属させて凱旋した住吉三神は、遠征譚において最大の功労者であるとしている（広瀬正利『筑前一之宮 住吉神社史』住吉神社 一九九六年 一八一―一九頁）。

⁸ 古代インドのマガダ国の首都、王舎城の東北にあった山。釈尊が

⁵ 同前 一四三―一四四頁。

⁶ 一例として、空海がもたらしたという宝珠の伝承では、真言小野流では代々これを伝え同流の範俊が、これを白河院に献上したという話がある(前掲註50 田中 一六八頁)。

⁶ 前掲註50 田中 一六四頁。

⁶ 「規模」には、正しい例、模範、手本、さらには重要な点という意味がある(「規模」『日本国語大辞典(第二版 第四卷)』、小学館、二〇〇一年、日本国語大辞典 第二版編集委員会編。ジャパナレッジより)。

⁶ 「王法」(『日本国語大辞典(第二版 第二卷)』、小学館、二〇〇一年、日本国語大辞典 第二版編集委員会編。ジャパナレッジより)。

⁶ 学識、経験のゆたかな老人を指す「耆宿」(『日本国語大辞典(第二版 第四卷)』、小学館、二〇〇一年、日本国語大辞典 第二版編集委員会編。ジャパナレッジより)。

⁶ 『御義口伝』は日蓮が弟子の六老僧の懇願により口述し、日興が筆記し伝えられたものとされ、法華経に関する日蓮の解釈が記されている(「御義口伝」『日本国語大辞典(第二版 第三卷)』、小学館、二〇〇一年、日本国語大辞典 第二版編集委員会編。ジャパナレッジより)。

⁶ 高楠順次郎他編「御義口伝」『大正新脩大藏経(八四)』(再刊発行)大正新脩大藏経刊行会 一九六三年 三一―九頁。

⁶ 生死の苦海とは、海を輪廻転生の限らない苦しみを海に例えられる語で、生死の海とも(「生死の苦海」『日本国語大辞典(第二版 第七卷)』、小学館、二〇〇一年、日本国語大辞典 第二版編集委員会編。ジャパナレッジより)。

⁶ 松長有慶『訳注 般若心経秘鍵』 春秋社 二〇一八年 二五―二六頁、勝俣俊教編「般若心経秘鍵」『弘法大師著作全集(二)』山喜

房佛書林 一九六八年 一〇八―一一一頁。

⁶ 同前 松長 二九頁。

⁷ 「五種」(『例文 仏教語大辞典』、小学館、一九九七年、石田瑞麿氏執筆。ジャパナレッジより)。

⁷ 今回は触れてはいないが、『口決』乙本の「八幡大菩薩御形象事」においては、「御加沙ニヨイテハ又赤色ノ説モ之有」という八幡大菩薩の袈裟の色と愛染明王の身体の色との共通点を見出す記述が見られる。

⁷ 藤巻一保『密教仏神印明・象徴大全』太玄社 二〇二一年 二二六頁。

⁷ 同前 二二六―二二七頁、伊藤聡『神道の形成と中世神話』吉川弘文館 二〇一六年 九一頁。

⁷ 小川豊生『中世日本の神話・文学・身体』森話社 二〇一四年 三六―三七頁。

⁷ 敬愛法には幾つかの種類があるが、例えば伊藤氏が挙げている菩提敬愛は、「菩薩が菩提心を希求しする定恵の力をもって、無明を断じ、本覚に至り、即身成仏に至らしむるもので、凡夫の淫欲心を菩提心に転せしめんとすることを目的とする」ものである(前掲註73 伊藤 九一頁)。また、この敬愛法には胎生学的な知識が動員され、懐妊や出産という王権の存続に重要な王・妃の身体を修法によって管理することが、護持僧や近親僧の役割であったと考えられる(同前 小川 七六―八七頁)。

⁷ 如意宝珠を用いた修法としては、如法愛染王法の他に如法尊勝法、如意宝珠法が挙げられる。この如法愛染王法は小野流の祖である範俊が承暦四年(一〇八〇)に初めて白河院の命でこれを修し、これ以後流行したとされている(同前 小川 七四頁、上川通夫『中世寺院の姿とくらし―密教・禅僧・湯屋』国立歴史民俗博物館 二

- 4 2 同前 三五五頁。
- 4 3 同前 三五七頁。
- 4 4 同前 三五七頁。
- 4 5 同前 三五七—三五八頁。
- 4 6 干満の二珠と表記がされるケースも見られるが、『口決』に準拠し、早満の二珠という表記に統一する。
- 4 7 天台僧光宗の著。文保二年(一三一八)序。天台の故事や口伝を収集し、自己の思想や先輩の諸説を整理したものである(『溪風拾葉集』)、『日本国語大辞典(第二版 第四卷)』、小学館、二〇〇一年、日本国語大辞典 第二版編集委員会他編。ジャパンナレッジより)
- 4 8 高楠順次郎他編『溪風拾葉集』、『大正新脩大藏經(七六)』(再刊発行) 大正新脩大藏經刊行会 一九六八年 八六三頁。
- 4 9 山本ひろ子『変成譜・中世神仏習合の世界』講談社学術文庫 二〇一八年 二二六—二二七頁。
- 5 0 日本の龍は一つ目に中国の陰陽五行思想・陰陽道から来た風雨を呼び起こす力を持つイメージ、二つ目に仏教の龍王のイメージ、三つ目に蛇のイメージがあるとされ、これらの要素が複雑に絡み合うため、仏教的な龍王の姿が蛇身の姿で現れるということもある(黒田日出男『龍の棲む日本』岩波新書 二〇〇三年 一〇七—一〇九頁)。
- 田中氏によると「竜蛇は時に神聖な守護神として人間に寄り添うが、嫉妬や忿怒の象徴ともなるように、本来両義的な存在である」と指摘しているように、仏教の護法善神の役割と三毒(貪・瞋・痴)など煩惱にまみれた存在としての性格が重なり合う(田中貴子『外法と愛法の中世』平凡社 二〇〇六年 七一頁)。また山本氏によれば、中世の神は権者と実者に分かれ、権者は仏菩薩の垂迹であるのに対して、実者は本地を持たず、垂迹のみで、龍蛇形で表される存在であった。これは衆生を救済するため、本来の威光を和らげ醜い姿で現れると考えられていたからである(和光同塵)。すなわち衆生の劣

- った姿を表しており、三毒を体現した衆生の似姿であると考えられたのである。(前掲註49 山本 一二五頁)。
- 5 1 『娑伽羅竜王』(『例文 仏教語大辞典』、小学館、一九九七年、石田瑞麿氏執筆。ジャパンナレッジより)。
- 5 2 法華經二十八品中の第十二品で、「妙法蓮華經」巻五の最初の品名。提婆達多や龍女の成仏を説き、法華經の中でも功德の勝れた一章として重視される(『提婆達多品』(『日本国語大辞典(第二版 第八卷)』、小学館、二〇〇二年、日本国語大辞典 第二版編集委員会他編。ジャパンナレッジより)。
- 5 3 前掲註50 田中 二五頁。
- 5 4 以後、別冊資料編の『八幡大菩薩口決』を引用する際に、甲本を1、乙本を2と略記する。例えば、この1—①であれば、史料1『八幡大菩薩口決』甲本の①の箇所を示す。
- 5 5 第二章 第二節『口決』における龍宮を参照。
- 5 6 『御遺告』は実際には空海の作ではないという説が定説となっている(『苦米地誠一』日本密教における舍利と宝珠』高野山大学密教文化研究所紀要(三〇) 密教文化研究所、二〇一七年、九六頁)。
- 5 7 『御遺告』の第二十四箇条には、大海の底の龍宮の宝蔵に無数の珠があり、特に如意宝珠が皇帝のように優れ、「その実体は自然道理の釈迦の分身」であるとされる。如意宝珠は宝蔵より龍王の肝臓に通じて善風を出して万物を利益する。海底の(龍宮の)の宝蔵にある如意宝珠は常に能作性の如意宝珠に通じ、能作性の如意宝珠を祈れば衆生を利益する功德があるとされる(同前 八〇—八一頁)。
- 5 8 中世において、意のままの力を所有者が得ることができるとされた如意宝珠からは、駄都と呼ばれる密教の秘法も生み出され、如意宝珠の秘法は天皇の即位灌頂にも深く関わった(前掲註50 田中 一四四—一四五頁)。

つたとされる。しかし、長治元年（一一〇四）に起こった比叡山との紛争と後の裁定により、宝満山は叡山の末山とされ、翌年には石清水八幡側は撤退を余儀なくされ、その後石清水と宝満山は疎遠になっていったと考えられている。そのため、言説上においても宝満大菩薩の地位は低下していったと考えられている（前掲註22森 六五頁、「宝満山」（『日本歴史地名大系（四一巻 福岡県の地名）』、平凡社、二〇〇四年、柴多一雄氏執筆。（ジャパンナレッジより））。

²⁴ 『八幡宇佐宮御託宣集』…宇佐宮の神宮寺である弥勒寺の神祇が編述し、鎌倉時代末の正和二年（一一三三）に成立した。託宣・記録・縁起・注釈等の多様な記事を収載している。（前掲註1 村田 一五四頁）。

²⁵ 卷三以降の一四巻が神祇の編述で、「我巻一」と「名巻二」については追補されたという説が有力である（前掲註14 村田 二八頁）。

²⁶ 『八幡宇佐宮御託宣集』は各巻を「護国靈験威力神通大自在王菩薩」の十四文字に各巻を当てはめて記すと「護巻三」には記され、これに従うと二巻が余ってしまう。全部で十六巻が現存しているが、そのうちの「我巻一」と「名巻二」を指す。

²⁷ 重松明久 校注訓訳『八幡宇佐宮御託宣集』現代思潮社 一九八六年 九八頁。

²⁸ 同前 一〇二頁。

²⁹ 前掲註21 村山 一七、二二頁。

³⁰ 同前 二二頁。

³¹ 筆者の管見の限り、『口決』の写本はこの早稲田大学図書館に所蔵されているのみである。この写本は、金沢文庫の図録で甲本とされる部分のみで、『八幡大菩薩口決』という名の史料もこの一点であり、甲本の注釈にあたる乙本については、写されていなかったと見られる（早稲田大学図書館編『荻野三七彦旧蔵資料目録』 早稲

田大学図書館 一九九八年 三七頁、早稲田大学図書館古典籍総合データベース「八幡大菩薩念誦作法」
https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i04/i04_03153_c021/index.html（最終閲覧日 二〇二一年十二月六日）。

³² 『口決』が写されたのは大正一二年（一九二三）六月九日、『念誦作法』は同年六月一〇日と記載されている。荻野三七彦氏は明治三七年（一九〇四）生まれで、写本された当時の年齢が一九歳であったことから、恐らく写したのは三七彦氏本人ではなく、父の荻野仲三郎氏であったと考えるのが妥当であろう。荻野仲三郎氏は内務省社寺局に勤務していたことや、写本の後であるが国宝保存会の委員を務めており、文化財保護行政に身を置いていたことから社寺の史料に接する機会も多かったと考えられる（早稲田大学図書館編『荻野三七彦旧蔵資料目録』早稲田大学図書館 一九九八年 四一―四二、五一頁、早稲田大学図書館古典籍総合データベース「八幡大菩薩念誦作法」
https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i04/i04_03153_c021/index.html（最終閲覧日 二〇二一年十二月六日））。

³³ 船田淳一「頼助『八幡講秘式』と異国襲来」『神仏と儀礼の中世』法蔵館 二〇一一年 三四七―三六六頁。

³⁴ 前掲註21 村山 一四―二三頁。

³⁵ 同前 一七頁。

³⁶ 同前 一七―一八頁。

³⁷ 同前 一九頁。

³⁸ 同前 二一―二二頁。

³⁹ 前掲註33 船田 三五―三五二。

⁴⁰ 同前 三五〇頁。

⁴¹ 同前 三五三頁。

那仏の蓮華蔵世界が一つの神秘的な大宇宙を成した新たな国家的
神話であったとした。その中で八幡神は記紀神話の「皇孫命の近き
守神」である大物主に代わる国家の守護神であり、神々のいわば棟
梁のような存在であった。(西郷信綱「八幡神の発生」『神話と国
家(平凡社選書 五三)』平凡社 一九七七年 九七、一〇八―一〇
九頁)。

¹₃ 『東大寺要録』に載る弘仁一二年(八二二)の官符とする記事によ
れば、天応年間の初めに、「護国靈験威力神通大菩薩」の尊号を奉り、
延暦二年(七八三)には「護国靈験威力神通大自在菩薩」とせよと
いう託宣を示した。(前掲註1 村田 一三五―一三六頁、筒井英
俊校訂『東大寺要録』国書刊行会 一九七一年 一一八―一九頁)。

¹₄ 吉原浩人「神仏習合思想史上の大江匡房―『江都督納言願文集』本
朝神仙伝」などにみる本地の探求と顕彰」『説話文学と漢文学(和漢
比較文学叢書 十四)』汲古書院 一九九四年 一〇五、一一一頁。
大安寺僧行教が宇佐で参籠しているときに、衣の上に釈迦三尊が顕
現したという記述があり、一〇世紀半ばころまでに宇佐を中心とし
て地域において八幡神の本地を釈迦三尊とする考えが成立したと
されている(遠日出典『八幡神と神仏習合』講談社現代新書 二〇
〇七年 一八五―一八六頁)。また、『源頼信告文』によれば、釈迦
か観音が計りがたい様子が見て取れる(東京大学史料編纂所編『源
頼信告文』『大日本古文书(家わけ四ノ一 石清水文書)』東京大学
出版会 一九八一年 六七頁)。さらに、鎌倉時代後期に成立した
『愚童訓』では本地釈迦、阿弥陀両説をとる(萩原龍夫他校注『八
幡愚童訓』『寺社縁起(日本思想大系 二〇)』一九七五年 岩波書
店 二二五―二二七頁)。一方、『託宣集』においては、釈迦や阿弥
陀等の仏の垂迹として八幡神がある、という本地垂迹の關係ではな
く、むしろ、八幡神はそのまま仏でもあったという八幡神を仏教的
根源に位置づける本地幽玄説も存在する(村田真一『宇佐八幡神話

言説の研究―『八幡宇佐御託宣集』を読む』(佛教大学研究叢書 二
六)法蔵館 二〇一六年 三九四頁)。

¹₅ 中野幡能『八幡信仰』塙書房 一九八五年 一七三頁、国書刊行会
編『吾妻鏡(第二)』名著刊行会 一九六八年 二五頁。

¹₆ 宮地直一「源氏と八幡宮」『八幡信仰事典』戎光祥出版 二〇〇二年
二八〇頁。

¹₇ 前掲註15 国書刊行会 二五頁。また、宮地氏は「国命を執るも
のは必ず奉戴する神を有するを常としたりき。(中略)つとめて民心
を収攬せんとする時、勢い敬神崇仏を以てその第一要義とせざるべ
からざりなし」と政策上必要であったことも考慮するべきとしてい
る(前掲註16 宮地 二八〇―二八一頁)。

¹₈ 前掲註16 宮地 二八二頁。

¹₉ 神奈川県立金沢文庫編『金沢文庫の中世神道資料』神奈川県立金沢
文庫 一九九六年 四二頁。

²₀ 同前 七〇頁。

²₁ 村山修一「如意宝珠と神道」『金沢文庫研究』(二七二) 神奈川県立
金沢文庫、一九八三年、一四―二三頁。

²₂ 『竈門山宝満大菩薩記』…竈門宮の主神である宝満大菩薩について記
された伝授折紙で、宝満大菩薩は沙羯羅龍王の姫宮で神功皇后の三
韓征伐の時に随行し、応神天皇出産の際に竈門峯に降臨したことや、
同社の社殿が神龜元年(七二四)に建立されたことが説かれている。
金沢文庫に所蔵される称名寺住職阿の手沢本が宝満山最古の縁
起であるとされるが、森氏によれば史料の成立年代はそれよりも遡
るとされる(『金沢文庫の中世神道資料』四六頁、森弘子『宝満山の
環境歴史的研究』岩田書院 二〇〇九年 六五頁)。
²₃ 平安末には、大山寺(かつて宝満山に存在した神宮寺)の別当を石
清水別当が兼ねていたこともあり、宝満山と八幡信仰の親密性であ

- 1 『八幡愚童訓』は、石清水八幡宮の社僧によって編述されたと考えられており、成立は、鎌倉時代末期、一四世紀初頭とされている。二種の同名の本が存在し、一つは八幡神を中心とした異国降伏を主題とするもの。もう一つは靈異靈験を主題とするものである。研究上、前者は甲本、後者は乙本と称されている(村田真一「神々と仏教——八幡神を中心に——」『神話・伝承学への招待』思文閣 二〇一五年 一四〇—一四一頁)。
- 2 菱沼達也編「討議二 歴史としての神道—神道の可能性をめぐって」『現代思想』(四五—二) 青土社、二〇一七年、一七三頁。
- 3 同前 一七四—一七五頁。
- 4 同前 一八三頁。
- 5 具体的には、竜王は龍王、沙羯羅龍王、大帯姫は大多羅姫、法華は法花、三昧耶は三戸耶、三韓征伐(新羅征伐)は遠征譚という表記を用いている。
- 6 前掲註2 菱沼 一八三頁。また、日本が仏土であるという理解の典型的な例として、『沙石集』に登場する国生み神話が挙げられる。ここでは大日如来や仏教と敵対する第六魔天が登場するなど記紀神話とは異なる、古代神話の中世的な変換が見られる(船田淳一「神仏習合と中世神話」『神話・伝承額への招待』思文閣 二〇一五年 八九—九〇頁、渡邊綱也校注『沙石集(日本古典文学大系 八五)』岩波書店 一九六六年 五九頁)等。
- 7 原克昭『中世日本紀論考』法蔵館 二〇一二年 四〇九頁。
- 8 具体的には宇佐氏の比命神信仰、南朝鮮や新羅方面から渡来したとされる辛島氏の仏教・儒教・陰陽道などを含んだ外来の信仰、大神氏は大神比義をはじめとして辛島氏の呪術的な仏教の信仰を取り込み、

新羅と所縁の深い応神天皇の神格を取り入れたものであった(村山修一『神仏習合の聖地』法蔵館 二〇〇六年 四—一頁)。

- 9 放生会の起源については隼人に対する殺生とそれに伴う報いとして行われたという言説が多数見られる。その一例として、『宇佐八幡宮彌勒寺建立縁起』によれば、養老四年の大隅・隼人の征伐によって多く隼人を殺傷した報いとして、毎年放生会を行うようにと、禰宜辛島勝波豆米に託宣したとされ、天平宝字五年(七六一)に宇佐宮で放生会は始まったとされる(中野幡能校注「宇佐八幡宮彌勒寺建立縁起」『神道大系(神社編四十七 宇佐)』神道大系編纂会 一九八九年 六頁)。
- 10 同前 六頁。

- 11 『続日本紀』の天平勝宝元年(七四九)一二月の記事には、八幡神が天神地祇を率いて大仏造立を必ず成就させるといふ託宣が記されている(前掲註1 村田 一四〇—一四一頁、青木和夫他校注『続日本紀 三(新日本古典文学大系 十四)』岩波書店 一九九二年 九六—九七頁)。また、村田氏は盧舍那仏造立という仏教的な国家事業に関わるという限定がされるものの、八幡神は神々の頂点に立つ存在であり、『続日本紀』において、八幡神は、仏教に対応しようとする神々の統率者となったと評価している(前掲註1 村田 一四二頁)。
- 12 西郷氏は、八幡神が、「もはやたんなる昔ながらの日本の神ではなく、それが緊張関係をもつ異国から伝来し、仏法という普遍的宗教の洗礼を受けた新しい神」であったとしている。また、いわば盧舍那仏は「天照のメタモルフオーゼ」であると評しており、その盧舍

八幡神を氏族の権力護持のために巧みに吸収し、自らの根源を神の生誕に結び付けたのである。また、八幡神の理解に用いられていたのは密教思想であった。史料中には東密と台密の理解を合わせたと考えられる蘇悉地（妙成就）の理解が見られるなど、朝廷やその周辺で密教が重視され、盛んであったという時代背景も絡んでいたことも『口決』の成立に影響したのではないかと考えられる。

今回は、『八幡大菩薩口決』の中に含まれている「八幡大菩薩御形像事」、「男山神跡御建立事」などに触れることができなかったが、また別の機会にこの両者の内容についても検討していきたい。

【口頭試問でいただいたコメントと回答】

口頭試問において、田中先生と中本先生から次のようなご指摘をいただいた。

一点目に『口決』が金沢文庫に所蔵されていることから、京都と金沢氏の関係性が見いだせるのではないかとのご指摘をいただいた。金沢氏は鎌倉幕府の出先機関である六波羅探題として京都へ出ており、金沢氏は仁和寺や三井寺との関係が強いというご指摘をいただいた。特に仁和寺は西園寺家（藤原氏）との関係が深いようである。また、『口決』と成立年代が近く、西園寺公衝との関係がある『春日権現験記』などとの関係性についてもご助言をいただ

いた。本論においても、口決における藤原氏との関係性について重視しているが、結びつけられた起源については言及が出来ていなかった。金沢氏と西園寺家の関係から新たな展開が見出される可能性があるかもしれない。

二点目に、本論で『口決』の史料的性格について、真言（東密）系の思想が表れた史料として指摘した件についてご意見を賜った。鎌倉の極楽寺や金沢文庫と関わりが深い称名寺などは真言律宗である。本論では指摘しなかったが、一三世紀後半にかけて活躍した真言律宗の叡尊と元寇の異国祈祷の関係が深いことが知られている。今回は深くは考えていなかったため、叡尊など真言律宗からの影響を『口決』が受けていたかについては関係性を探る必要があるだろう。

三点目に、筑前国という舞台が設定された点についてのご意見をいただいた。平安時代、太宰大弐として赴任した藤原佐理が宇佐八幡宮の神人と乱闘事件を起こしているなど、藤原氏にとって筑前は都合の悪い土地であるともいえる。にも関わらず、『口決』においては筑前の諸社と藤原氏を結びつけている点についてはいささか違和感がある。藤原氏と筑前国との関係、さらにはそのような記載がある「口決」を所蔵した金沢氏との関係についても検討の余地があると感じた。

おわりに

本稿では、金沢文庫所蔵の『八幡大菩薩口決』に焦点を当てて、この史料において八幡神は如何なる尊格とされたのかを中心に論じた。中世神道が仏教的要素を用いて解釈されるということは『口決』の本文からも読み取ることが出来た。なお、史料2―⑦を図に示すと【第4図】のようになる¹³³。

まず一点目に珠と法花般若が龍宮からもたらされた言説に注目し、その意味を考察した。『般若心経』は空海の『般若心経秘鍵』によれば、あらゆる仏教の思想や行の果を凝縮した経典と理解できる。また『法華経』は、『御義口伝』によれば、海中とは俗世（苦海）であり、そこから衆生を救う教えとして理解された。さらに『口決』においては、八幡神が「提婆品」の沙竭羅龍王の系譜とされた。『口決』全体において仏教を体現し、衆生を救済する存在とされる八幡神を表すために二経は相応しい経典であったといえる。

二点目に『口決』において、愛染明王と八幡神はどのように一体と理解されたのかを論じた。甲本において、大多羅姫の振った柵によって現れた日天子が愛染とされ、この愛染は中等身すなわち両部

不二の蘇悉地（妙成就）と理解された。愛染明王は、『八幡講秘式』に見られるように、八幡神の力の増強を図るためではなく、煩惱即菩提や両部不二を体現する究極的な仏教の体現者として性格を表している。愛染と同体とされることで、仏教の神として八幡神が優れた存在であることを示したと考えられる。金箱や逆松の話もその象徴として、『口決』では仏教的な解釈がなされたのである。

三点目に藤氏との関係について言及した。宇美宮の槐と八幡神の生誕神話に藤原氏の象徴である藤を結び付け、さらに愛染の加持力を求めることで、藤原氏が大臣である大義名分が分かった。これらの言説は、二神約諾神話とは異なる形で権力の在処を求めたものであるといえる。さらに、安曇磯良という海人が藤原氏所縁の寺社や祖先神に結び付けられることについて指摘した。『志度縁起』を参考にすると、海人は王権へ珠をもたらす存在という共通点が見られ、その海人との関係性を藤原氏は結ぶことによって自らを特別な存在と見なしたのではないかと考えられる。

以上のように、『口決』は八幡神を仏教の体現者、根源者としての性格を両部不二によって描き、その八幡神の力にあやかり、自らを八幡神に結び付けて権力護持を図ろうとする藤原氏の意図が伺われた史料といえる。それは、源氏から武神となった八幡神とは異なる、『口決』の八幡神であったといえよう。藤原氏は、仏教の神たる

「凡志賀嶋ノ明神者、今ノ春日ノ大明神也」サレハ槐、藤、又今ノ八識、法門、皆興福寺ノ人法神明ノ加護、由也」(2-6)

史料2-6の冒頭では、志賀嶋の明神は今の春日の明神で、槐や藤、興福寺との結びつきが見られ、安曇磯良を藤原氏の祖先神や所縁の場に繋げる言説が登場する。この「志賀嶋の安曇磯良」は『愚童訓』においても見られる。

「安曇磯良ト申ハ、筑前国ニテハ鹿嶋大明神、常陸国ニテハ鹿嶋大明神、大和国ニテハ春日大明神ト申ケリ」(『愚童訓』より一部抜粋¹²⁸)

藤原氏縁の社や祭神と安曇磯良は関係を持っていたことが両者の言説からわかる。安曇磯良は筑前に住む海底の神とされる¹²⁹。安曇磯良は海人的性格を持つ安曇氏そのものと見られる。

さらに、海人との結びつきで注目していききたいのは阿部泰郎氏の研究である¹³⁰。阿部氏は、讃岐志度寺の縁起である『讃州志度道場縁起』(以下、『志度縁起』)¹³¹の海人の珠取りの話に注目している。この『志度縁起』には、龍宮や龍神、珠のことなど、気になる点が幾つかあるが、ここで注目すべきは、藤原北家の祖である房前が不比等と海人との間に生まれた子であるという言説である。すな

わち、後世の藤原氏の系譜は海人の末裔というわけだ。珠と海人の関係について、阿部氏は「神聖な宝物は龍神と人間世界の間を遊戯している。そして、海人は、この二つの世界を繋ぐ媒ちである」と述べている¹³²。また、この人間世界を皇族に置き換えれば、海人が皇族や藤原氏と龍宮との橋渡しになっているという点は指摘できるだろう。

第二章で述べたように、宝珠を保持することは権威の象徴にもなりうるのである。その珠を取り次ぐ海人の系譜に結びつけ、重ね合わせることは天皇の臣下である藤原氏自身を特別な存在とする、いわば権威の象徴と捉えることができる。特に『口決』においては、大多羅姫(神功皇后)と龍王の間を安曇磯良が取り次ぐという言説により明確に現れているといえよう。

小括

本章では、主に『口決』において最も特徴的である藤原氏に関する言説について取り上げた。藤原氏の象徴物である藤が、八幡神の誕生神話や愛染の種字、さらには海人と結びつき、自らの権力の拠り所を求めたと考えられる。また、箱崎の話をはじめ筑前国の諸言説に仏教的解釈がなされ、八幡神を称える言説が構成されていたことも明らかになった。

逆松の由来としている 127。

「又逆松者、松ハ、々柏千年表^{スル}仙道延命之由^{ナリ}是^レ日本衆生^{ヲシテ}法身常住ノ恵命^ヲ欲^{スル}令^レ顯得御願也逆^ハ下化衆生ノ義也凡海浪ノ底ノ箱今ハ箱崎ノ松ノ下^ニ有之金界^ノ字ノ大海^ノ字不生ノ大地也^ノ俱^ニ常住也故松以松柏千年^ヲ頂上^ニ凡彼ノ松ハ我等衆生ノ當来決定成佛ノ印治決定ノシルシ也八重幡者八葉八相ナレハ頭密ノ淵底也^リ幡者勝軍ノ義摧破^{スル}煩悩^ノ廣軍衆^ヲ義也依之^ニ箱崎ノ浪^ト松ト俱^ニ不思議深奥ノ法門^{ナリ}」(2—⑥)

史料2—⑥では、逆松の意味が詳しく説かれる。松は寿命の長い常緑樹であること(松柏千年)から、不老長寿(仙道延命)の謂れがあり、真理としての仏の教えが永遠不変に存在し、日本の衆生を利益して欲しいという願いの表れであるとする。更に、逆さであることは、下化衆生への教化を表す。つまり、松の上(頂上)に菩提があり、下(地)に衆生があると捉えることで、逆さ(下)を向いた松から仏法の教えを衆生に行き亘らせるという意味と捉えることができる。

海浪の底にあった八幡神の箱は今、箱崎の松の下にあり、金界^ノ字が表す大海と^ノが表す不生の大地で、^ノは永久不変であるとす

る。松柏千年の教えを上^ニに頂き、箱崎の松は我々衆生の来世に成仏することを決定づける証である。そして、箱に入っていた八重の幡は八葉八相であるから、頭密の奥深い教えであり、幡は煩惱や軍衆を取り除く教えである。箱崎の浪と松は共に不思議で、奥深い仏の教えである。すなわち、八幡神の金箱に関連する逆松が不老長寿や延命の利益を結びつき、箱崎の松を下界の衆生に仏法をもつて教化する八幡神になぞらえたと考えるのが妥当ではないだろうか。

第三節 海人と藤原氏の結びつき — 龍神と結びつく藤原氏 —

藤原氏に関する言説をもう一つ取り上げる。それは『口決』甲本の冒頭に登場する安曇磯良についての言説である。

「安曇磯良 等志賀嶋ノ大明神」(1—⑧)
「志賀嶋ノ安曇磯良等ト申^ス海人」(1—⑨)

まず史料1では、安曇磯良は志賀嶋の大明神であり、舵取りとして胎中の八幡神が発した口状の御書を携えて龍宮へ向かい、さらに龍宮において御書を読み上げた海人(史料1—②、⑧、⑨)であることが示されている。次に乙本における安曇磯良の位置付けについても確認する。

「次箱崎、一尺二寸、金箱者、随フ箱ニ光也故、曰、一尺二寸、光明ト自
左右ノ踵向フ上、也、是大菩薩内證、肝箱也一尺二寸、表示又同シ上ニ金
色者、金剛不壞ノ義也上、金水金字又同シ之ニ左右ノ光明、両部ノ充^{光敷}也」

(2—5)

史料2—5では、先述の「中等身」と同じ一尺二寸の金箱が、大菩薩の内證^{1,2,4}の肝の箱であるとしている。金箱は八幡神の悟りを示す重要なものという訳である。さらに、箱が金色^{1,2,5}であるのは、八幡神の教えが強固なものであること（金剛不壞）を意味する。そして、左右から放たれる光明は両部の光であるとされている。両部すなわち金胎両部の加護が、八幡神の教えである金箱から放たれるものとして見られる。

「函蓋々々、天地理智冥合、第九識^{ナリ}七佛世尊、内證ナレハ七佛世尊
之定恵ト云フ九識ノ箱ニ納^{ムル}八識八相法門也又八重幡、深義者、八正道
八葉八分、心都也」(2—5)

「箱、七佛世尊、定恵幡、八相八識、法門也」(1—7)

更に、金箱に関する解釈が続き、函蓋は天地理智冥合、すなわち

仏の悟り（真理）や智慧だけでなく世界全体すべてを包み込むのが第九識であるという理解につながる。また、史料1—7で箱は、七仏世尊の定恵（禪定と智慧^{1,2,6}）を表すとされ、史料2—5で、その理由は七仏世尊の内證であるからとされる。そして、改めて九識の箱は仏教世界の法や悟り（八識八相法門）を収めているということが提示される。そして、箱の中には八重の幡という八幡神のネーミングの由来とも言える幡の深義は、八正道八葉八分、すなわち八幡神が仏教世界の根源者で世界全体を収める存在であるということがここで示されている。

(二) 逆松について

史料1—7によれば、『口決』において逆松の由来についても説かれる。

「發^{シテ}願^テ折^テ松ノ枝ヲ逆ニ指殖ニ其ノ松^ツ根指^シ葉榮^テ現^ニ在^リ箱崎ノ松是
也^リ殖^玉上^{ヘリ}上件ノ箱ノ上ニ故ニ云箱崎ノ松^ト其松ノ形逆ニ指^ス枝^ヲ世人云逆
松^ト」(1—7)

八幡神は大多羅姫に、日本衆生の利益を誓い、その印に大多羅姫が先述の金箱の上に松の枝を逆さに植えて願を掛けたことが箱崎と

この史料において

「中央ニ松木一本アリ左右ニ枝ヲサス木之本ヨリ藤源付タリ（中略）一方ハ源氏一方ハ藤氏也調伏ト息災トノ心也（中略）藤ハ物ヲ巻カラストクアリ又云（中略）是源家カムサ之衰ヘキ表示ナリ」

（『不空羅素事』より一部抜粋¹²⁰）

と書かれており、藤原氏を象徴する藤が、呪力を兼ね備えたものとして捉えられた¹²¹。『口決』においては、呪殺を目的としていないが、権力誇示や延命長寿を目的とした象徴物として藤を捉える意図があったと考えられる¹²²。

また、ここでは槐門として藤氏が守護されているのは愛染明王のおかげであるという言説が見られる。また、第三章でも取り上げたが、愛染法は出産祈祷などでも修されており、『口決』では子孫繁栄が求められたとも考えられる。

すなわち、八幡神の誕生について愛染の種字を交えながら、藤氏自身の権威の拠り所とする説がここでは構築されている。先述の通り、八幡神を氏神とするのは源氏が一般的であるが、この『口決』においては、それとは異なる特徴的な言説が形成されていたといえるだろう。

第二節 箱崎における諸言説

ここでは、八幡神が仏教の神としてどれほど優れた存在であるのか、箱崎の由来と松にも関わる言説を絡めながら説く。まずは、八幡神の加護の象徴ともいえる金箱の言説から取り上げる。

（一）金箱について

「王子ノ踵ノ下ニ一尺二寸ノ金色ノ光立ツ左右ニ尋テ光見ニ底ニ有リ一尺二寸ノ金箱々ノ中ニ納タリ八重ノ幡見テ（中略）々々告聖母ニ云ク箱ハ七佛世尊ノ定恵幡ハ八相八識ノ法門也弘メ此法ヲ給ハム時先ツ日本國ノ衆生ヲ最前ニ利益シ給ヘ此ノ事必定ナラハ此ノ松ノ枝逆ニ生ヒ付ケト」（1―⑦）

史料1―⑦の言説によれば、王子（八幡神）の踵の下から一尺二寸の光を放ち、埋まっていたのが一尺二寸の金箱であり、その箱に収まっていたのは八重の幡であった。八幡神は大多羅姫に向かって「箱は七佛世尊の定恵で、幡は八相八識¹²³の法門であり、この法を弘めれば、必ず日本の衆生が第一に利益される。その印に逆さに植えた松の枝が生えるだろう」と発したとしている。まず、八幡神の金箱について考察しよう。

仏法を広めるための両輪に例えられた。愛染明王を通してではあるが、この二経とも結びつけられる八幡神が、まさに仏法の興隆を成就させる存在となったことを表しているのではないだろうか。

第四章 『口決』における藤原氏と筑前国における言説

第一節 宇美宮の槐と藤原氏

本章では藤原氏と八幡神の関わりが『口決』の中でどのように捉えられているのかに注目していく。

「…切テ王子ノ臍ノ緒ヲ發願ヲ為シテ日本国ノ主ト可ク遂ク成佛ヲ構テ此ノ山齊ノ緒成テ藤ト生ヒ榮ヘヨト發願シテ懸玉ヲニ槐ノ木ノ枝ニ應シテ願ニ為テ藤ト現ニ在リ是レ日本ニ規模也御誕生ノ産所宇美宮是也」(1-⑥)

史料1-⑥では藤と槐について、大多羅姫の産所とされる宇美宮¹¹³と関連付けた話に組み込まれている。

「次ニ宇美宮ノ齊ノ緒ヲ成藤ト者ハ臍者ハ日天子也緒ハ愛深^{染敷}ノ種字^ス也」藤者ハス字ノ々躰^ス字ノ形也謂ク蛇形ノ深秘也槐者ハ槐門擁

護之ノ表示故ニ執柄ノ藤氏ノ由来併ラ依此ノ加持力ニ也」(2-④)

史料2-④に宇美宮の齊の緒を成す藤とは、臍は日天子で、緒は愛染の種字^ス字であると考えられる。それに続けて、愛染の種字^ス【フーン】字は藤の字躰である^ス字¹¹⁴の形であるとしている。これは、愛染の種字である^スの元となった梵字であるから、^スと^スが同じだという解釈が生まれたのではないだろうか¹¹⁵。さらに、蛇型の深秘であるという解釈は、蛇(龍)が三毒(貪瞋痴)を表す煩惱即菩提を体現した存在であるため、愛染明王と繋がるのは自明であるといえる。そして槐は槐門擁護の表示とある。槐門¹¹⁶とは大臣の位を示し、槐は藤氏(藤原氏)が大臣であることの証であり、藤氏が執柄¹¹⁷であるのは加持力のおかげであると説かれている。この、藤原氏の権力の抛り所を八幡神の誕生と愛染明王に絡める言説は『口決』の中で最も特徴的な説であろう。中世において藤原氏が皇室との結びつきを権威の抛り所とする言説については、例えば天照と藤原氏の祖とされる天児屋根の王権守護の関係が築かれる二神約諾神話¹¹⁸が挙げられるが、そのような言説とも異なる、特異な説であるといえる。では、なぜ藤という象徴的な植物を『口決』の中に組み込んだのだろうか。関連する他の事例として、興福寺の不空絹索観音にまつわる『不空絹索事』¹¹⁹(史料10)を参照する。

の最上の慈悲を生み出すもので、雙円性海¹⁰⁷であるとしている。そして、般若の音は恵水であるため晝唱え、法花の聲は定水であるため夜に轉るとしている。この定水と恵水は、定恵を意味しているのではないだろうか。定恵とは禪定と知恵の二つを指し、この二つは鳥の両翼や車輪に例えられ、互いに助け合って仏道を成就させることを指す¹⁰⁸。そこから、靈水を定恵の二水に例え、それが灌¹⁰⁹となる（合わさる）ことは法華般若の兩部の不二を表しているといえるのではないか。

「毎日^ニ早朝^ニ一尺二寸^ノ金色^ノ妙^ノ字現事^{スル}…」（1―⑤）

「々々（二經）^ハ兩部^ニ一字^ハ不二^ノ妙成就也^リ」（2―③）

史料1―⑤には、妙の一字が現れるという言説がある。この妙の一字とは一体何か。対応する史料2―③には、二經は兩部一字で不二妙成就であるとしているため、この妙成就の「妙」を表しているのではないかと考えられる¹¹⁰。妙成就とは真言などを誦すことで得られる、すぐれた結果を指す¹¹¹。すなわち法花般若を誦えることで得られる功德を指し、晝夜に二經を誦すことで、得る功德の象徴が妙の字であるという解釈ではないか。そして、同時に妙の一字

を觀想しながら二經を読むことによって、完全なる功德があることを示しているのである。

「…一尺二寸^ハ又中等身^ノ表示也^リ、挙中^ヲ納初後^ヲ三種^ノ等身^ハ又三部[、]大日也^リ初等^ハ、金界後等^ハ、台界^{云々}」（2―③）

最後に初等は金界、後等は台界で、一尺二寸が中等身の表れとする記述がある。初中後という三つに分かれていることから、それぞれが金剛界、後が胎藏界、中は蘇悉地（妙成就）に振り分けて三部¹¹²を構成しているのではないかと考えられる。加えて、三種の等身は三部の大日であるとされることから、三部それぞれに密教の教主である大日如来が結びつけられたのであろう。「中等身」とされた愛染明王は、兩部を一つにまとめた不二の極位を示す蘇悉地そのものを表す存在と捉えられたのではないか。

小括

本章では、密教の兩部の不二が多用され、愛染は金胎不二の極位である妙成就とされた。すなわち、愛染と結び付いた八幡は密教の優れた尊格であると示されたといえる【第3図】。

また前章でも取り上げた『法華經』「提婆品」と『般若心經』は、

史料1—⑤で大多羅姫が天に向けて振った鈴が付いた七尺^{9,2}の
 榊の、七は七寶^{9,3}の義(教え)であるとしている。そして、鈴の音
 により一搦手半^{9,4}の日天の生身の躰^{9,5}が現れるとしている。史料
 2—③において、この時現れた一尺二寸の日天子は「中等身」の愛
 染明王であり、八幡大菩薩の本地としている。榊^{9,6}は佛舍利を供養
 する塔婆の代わりをなすとあるから、榊が神秘的で重要な意味を付
 与していると考えられる。また、榊に付けられた鈴に関しては、日
 天子を招く働きだけではなく、驚覚^{9,7}させる働き「驚覚召請の義」
 もあることから、密教の修法で用いる金剛鈴^{9,8}のイメージが付加
 されていると考えられる^{9,9}。

「此御身^ヲ建立二字ノ伽藍^ヲ建立以後号四王寺ト大祖大仙^ヲ為師ト始ム五
 壇ノ修法^ヲ」(1—⑤)

「四王寺ト四王^ハ、四佛ノ教令仍日〇^ハ、大日四王^ハ、四佛サレハ五佛堂也^リ」
 (2—③)

そして、史料1—⑤では大多羅姫が榊で招いた日天子(御身)を、
 伽藍を建てて安置し、四王寺¹⁰⁰と号されたとする。史料2—③で
 は、四王すなわち四天王が四佛の教令¹⁰¹となって現れ、「日〇」

(日天か)である大日如来¹⁰²と合わせて五佛堂とするという言説
 になったと考えられる。ここでは、四天王が四佛の教令となって現
 れ、大日如来とともに五佛堂に祀られるということが言いたいので
 はないだろうか。

「大仙^ハ、中壇ノ阿闍梨法花般若両部ノ法也七日ニ法成就^ス自壇^ノ下金色^ノ
 靈水涌^ツ晝^ハ、唱^ヘ、遠離一切転倒夢想^ト夜^ハ、我韻^ス我於海中雖常宣説^ト即^チ
 号妙法般若ノ瀧^ト也」(1—⑤)

次に、史料1—⑤では、大祖大仙を師として四王寺の五壇の修法¹⁰³
 の起源について説かれる。大仙¹⁰⁴は中壇の阿闍梨で、法花般
 若の法は七日に成就するとある。そして、その中壇の下からは霊水
 が湧き、晝は遠離一切転倒夢想¹⁰⁵と唱え、夜は我於海中雖常宣説
 と韻すと妙法般若の瀧となり、毎日早朝に一尺二寸の妙の字が出現
 するとある¹⁰⁶。

「中壇ノ下ノ金色ノ水^ハ、愛染大悲ノ至極一切衆生能生ノ二水又雙円性海
 也般若ノ音^ハ、恵水故ニ晝^ル唱^之ヲ法花ノ聲^ハ、定水故ニ夜^ル囀^之ヲ」(2—③)

史料2—③では霊水が金色の二水であり、一切衆生に対して愛染

「時金剛薩埵對一切如來前。忽然現作一切佛母身。住大白蓮。身作白月暉（中略）從一切支部。出生十儼誡沙俱胝佛。一一佛皆作禮。敬本所出生。於刹那間。一時化作一字頂輪王。執輪印。頂放光明。倨傲目視。現大神通。還來禮敬本所出生一切佛母真言。」

（『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經 卷下』より一部抜粋⁸²）

トレンソン氏はここから「一字頂輪王と称される一字金輪⁸³は、

金剛薩埵の化身である仏眼仏母の身体またはその真言より生ずる尊格とされる。この教えは仏眼の智慧が一切の仏の菩提を生み出し、

両方が不可分の関係であることを表している」と指摘する⁸⁴。ま

た、佛眼を母、一字金輪を父に見立て父母の和合により駄都⁸⁵が生

まれるという信仰もあつたと指摘する⁸⁶。これらを参考にすれば、

住吉を金輪、大多羅姫を佛眼とすることは、両者の不二を示すものであると考えられ、舍利⁸⁷宝珠の関係から龍宮よりもたらされた珠

は、まさに金輪佛眼不二の関係から生まれる仏舍利に相当すると考

えられるだろう。では、『口決』では金輪に八幡神の父である仲哀天

皇を据えないのは何故だろうか。『日本書紀』『神功皇后紀』に見え

る住吉三神は新羅征伐において神功皇后の護身と軍船の先導という

重要な役割を果たしている⁸⁷。「神功皇后紀」の前章で崩御した夫

仲哀天皇と大多羅姫（神功皇后）を結びつけるよりも、遠征譚に関

わる住吉と大多羅姫を結ぶことで、直接的に遠征譚と密教の両部不
二の思想を八幡信仰に結び付けるための手段であつたと考える⁸⁸。

「八幡大菩薩本有恒居、浄土常在鷲^嶺山密厳花蔵也七尺、榊者、七者

七寶、義榊者塔婆、代也、大菩薩、所乘即大日所居、塔婆也鈴、驚覺召

請、義一尺二寸、日天子者、即中等身、愛染明王大菩薩、御本地也」（2

③）

次に史料2―③に注目する。八幡大菩薩が本来常にいる浄土とい

うのは鷲山（靈鷲山）⁸⁹の嶺の密厳花蔵であるという⁹⁰。つまり、

靈鷲山の山頂は大日如来や毘盧遮那仏の浄土の世界であり、そこに

いる八幡大菩薩が大日如来や毘盧遮那仏と等しい存在として解釈さ

れていると考えられる⁹¹。

「大多羅姫、此、タケニ登、七尺、榊ノ枝ニ付、鈴ヲ向、天ニ振、付、鈴、

音ニ守護、天童影向、給、趣、岨請、一揲手半、日天影向、生身、躰也」

（1―⑤）

「一尺二寸、日天子者、即中等身、愛染明王大菩薩、御本地也」（2―

③）

珠について、乙本（史料2）の冒頭には

「早珠満珠般若法花^ハ、是^レ種子三戸耶^ノ、両万タラ也謂^フ、早珠満珠^ハ、金界
ノ大日満珠法花^ハ、是^レ台界遍照^ノ内證也^リ般若^ニ、亦名如意珠^ト、説^キ法花^ニ
無上寶珠^ト申^{タリ}」（史料2冒頭）

と記され、真言密教の両界曼荼羅に当てた解釈がなされている⁷⁷。
まず、注目するのは史料2―①である。

「八幡^ノ御本地^ニ有^レ浅略深秘^ノ、二浅略^ハ、西方^ノミタ深秘^ハ、南方^ノマヤ也^リ
故^ニ知^ヌ海中所進^ノ珠与^ト、經八幡大菩薩^ノ種字三戸耶^ノ深秘也^リ（2―①）

八幡の御本地には意味や説明が浅く簡略なもの（浅略）と、表面的な理解では計り知れないもの（深秘）の二つがあるという。浅略は西方の弥陀、深秘はマヤであると説いている。この梵字は【ラガ】と読む。この梵字の意味を解説するために、『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇經』（通称、瑜祇經）の「愛染王品第五」根本真言を参照する（史料7）。マヤとは貪染者という意味で、貪欲、愛染明王の原語を示すものである⁷⁸。ここでは、愛染明王が阿弥陀如来よりも本地として意味の深いものであるという理解がなされている訳であり、中世にお

いて、八幡神の本地は釈迦や阿弥陀説が説かれることが多かったが、それよりも愛染明王との繋がりを重視しようとする信仰がここから読み取れる。

そして、本地愛染が深秘ゆえに、龍宮より与えられた早満の珠とは経であり、八幡大菩薩の種字である三戸耶⁷⁹の深秘であると説かれる。では、早満の二珠はどうして愛染明王と関係が結ばれるのだろうか。続きを見ていく。

「海^ハ、法性^ノ大海龍^ハ、本有^レ金剛^ノ智住吉^ハ、金輪聖母^ハ、佛眼也^可秘
之々々々」（2―②）

次に史料2―②において、第二章で解釈した苦海とする海や煩惱にまみれた龍とは逆に優れたものとして解釈されているが、これは海と龍には表裏の面があることを表しているのではないか⁸⁰。

さらに、甲本において異国へ渡る時の大將軍として登場した住吉は金輪であると説かれ、聖母すなわち神功皇后は佛眼⁸¹であるとされる。金輪と佛眼という両者の関係は何を表しているのか。この金輪と佛眼の関係についてステイブン・トレンソン氏の指摘がある（史料8）。

左御掌ニ持提婆品般若心経ノ二巻ヲ取副テ早満ノ玉ヲ向テ敵國ニ申ヘ玉フ

(1—④)

この両部の二経を珠に副えるという言説（史料1—④）は『愚童訓』においては確認できず、『口決』の特異な言説であるといえよう。

この副えられた法花般若の二経とはどのように『口決』では捉えられていたのか。次章でさらに深めていく。

小括

ここまで、『口決』における龍宮について考察した。宝珠は中世において珍重された仏宝であり、龍宮はそれがあつた場所として認識されていた。また、『口決』においては二つの珠に加えて、法花般若の二経を得るといふ言説が見られた。この法花般若については、第三章で引き続き考察していく。

第三章 愛染明王と八幡

本章では主に八幡神と愛染明王に関する言説について取り上げて

いく。大多羅姫が振つた櫛によつて現れたのが、日天子（即ち愛染明王）とされ、仏教の不二という思想が絡みながら八幡神の解釈へと結びついていく。

第一節 愛染明王と愛染法

愛染明王を凶像で表す一番の特徴は赤い身体⁷¹で、この色はラーガ（愛欲・情欲）の象徴色である⁷²。また、光背を背負つた姿が描かれるが、これは明王が住んでいるとされる熾盛輪（すなわち燃え盛る太陽）の光背を背負つた姿で、衆生の持つ愛欲染着の心が、直ちに大日如来の浄菩提心である金剛薩埵に変じた姿、すなわち煩惱即菩提を体现している⁷³。院政期には呪術的な密教修法がさかんに行われ、特にこの愛染明王を本尊とした修法である愛染法が隆盛していた⁷⁴。愛染明王の修法である愛染法は、他の密教修法と同じく、息災・増益・敬愛・降伏を目的としているが、特に敬愛法が盛んに行われていた⁷⁵。また、院政期には如意宝珠を用いた如法愛染法⁷⁶も行われ、愛染明王は中世を通して盛んに信仰されていたのである。

第二節 愛染明王と八幡の解釈

ここからは、『口決』の乙本の内容を見ていく。前章で見た早満の

配者の法のことを指す⁶³。すなわち、仏法と王法とは「左右の角」すなわち両輪のようなもので、二つでセットであるといえる。また、仏法を渡して海中から出すことを決めた龍王に対して、耆宿⁶⁴のある臣下の提言で両部二経の中から、「提婆品」と『般若心経』の撰二巻のみを渡したということであろう。

安曇磯良が御書を龍宮に出してから文物が献上されるまでの一連の流れを見たが、次に二経を海水から出してはいけない理由とは一体どうしたことなのか。海の意味を考えるべく、『法華経』『提婆品』の解釈をしている『御義口伝』⁶⁵を参照する(史料6)。

「御義口伝云。(中略)海トハ生死海也。」(『御義口伝』より一部抜粋⁶⁶)

ここでは、海自体が「生死の海」すなわち苦海⁶⁷と捉えられている。『口決』では、三毒の蛇(龍)がいる龍宮、すなわち海中を俗世間に例え、俗世間から衆生を救済するために二経が必要であり、龍王は海中(海水)から出すことを決めたのではないだろうか。

次に、『口決』において、なぜ龍宮からもたらされた撰二経は、「提婆品」と『般若心経』だったのか。「提婆品」は大多羅姫の父である沙竭羅龍王と結びつく龍女成仏の話であることを考えれば登場する

のは必然といえる。では『般若心経』についてはどうなのか。松長有慶氏は、空海が記した『般若心経』の注釈書の一つである『般若心経秘鍵』において、空海は『般若心経』が真言以外にも小乗、大乘の諸宗を含め、あらゆる仏教の思想と行の果が凝縮した経典として見ていたという見解を示し⁶⁸、『般若心経』がもともと除災の効果にすぐれた呪として人々に理解され、信仰された側面があるという指摘をしている⁶⁹。仏教において重要視された経典であったと同時に、経典に力を求めるといふ神話の内容的観点から見ても「提婆品」と『般若心経』が神話の中に組み込まれるのは妥当ではないかと考えられる。

次に二つの珠と二経を手にした大多羅姫は五種の修行をしたという言説が史料1―③にある。五種の修行とは、法華経に説く五種法師の修行を指し、受持・読経・誦経・解説・書写の五つを指す⁷⁰。修行の後、住吉大明神が「高麗は日本の犬なり」と石の札に刻んだのを見て、高麗は闘心を発し、数千万隻の兵舟が日本の舟を取り囲んだ。大多羅姫は屋形より出て、左手に提婆品と般若心経を出し、早珠を副えると、水が干上がり陸地となり敵兵が歩いてきた。早珠をしまつて満珠を出し、またそれを両部の経に副えると恠光を放つて潮が満ち、巨海が敵に襲いかかり敵兵は消え去ったという言説が表されている。

龍宮の宝蔵の宝珠の中で、如意宝珠が最も優れ、この如意宝珠は万物を利益するものと考えられていたことが伺われる^{5,7}。さらに、如意宝珠は中世では仏舍利とも同体視されていた^{5,8}。『御遺告』から真言密教において宝珠が重要視されたことが伺われる。また、田中貴子氏によれば、「龍宮の秘蔵物」の伝承は人々の中で共有され、龍宮は宝物が沢山ある場所として認識されていた^{5,9}。また、言説上だけではなく、現実世界においても如意宝珠と同一視される舍利は重要なものとして扱われていた^{6,0}。「仏の代理人としての、〈王〉のみが帯びることが許された舍利は、まさしく仏自身から賦与されるシンボリックな〈王権〉のあかしであったと見られる」とされ^{6,1}、象徴物として宝珠は重要視されていたのである。

第二節 『口決』における龍宮

ここからは『口決』甲本の物語の解釈を行っていく。

「志賀嶋ノ安曇磯等ヲ為梶取ト為 (中略) 胎中ノ童子ノ口状ニ海中ノ早珠満珠ノ二顆ノ玉般若法華ノ両部ノ経ヲ記シテ御書ニ進ス龍宮城へ御使ハ件ノ磯等也即詣ス龍宮城ニ」(1—②)

はじめに志賀嶋の安曇磯良等が使いとして龍宮城に送られ、胎中

の童子の口状をしたためた御書が龍宮に渡される(史料1—②)。ここで注目すべきは、その御書に珠の他に法花般若の両部の経典を授けたいという言説が登場する点である。『愚童訓』などにおいては、『法華経』や『般若経』のような経典を授けるといような言説は見られない。

経蔵としての龍宮については先述の山本氏の指摘から理解できたが、ではなぜ龍王から与えられた経典が法花般若であったのか、次に考察する。

「諸龍僉議シテ云ニ顆ノ珠ハ世間ノ珍寶左右何為 但両部ノ経ハ出世ノ規模仍不可出海水ヲ佛法王法ハ左右ノ角佛法出ナハ外土ニ王法豈存海中ニ乎即堅ク怪ム大王受テ道理ヲ不及力其中ニ有耆宿ノ臣申云法華ノ中ニハ提婆品ヲ為最ト般若ノ中ニハ心経ヲ為宗仍両部ノ中ニ撰ニ卷ノ経ヲ申進セムト依此ノ義ニ二顆珠并ニ卷ノ経ヲ進ス日本」(1—③)

史料1—③は、取次がれた御書を龍王たちは見て合議を始めたという内容である。その中で、二顆の玉は「世間」では珍しい寶であるが、俗世間のものであるのに対して、両部の二経は出世の規模^{6,2}すなわち、仏が衆生を救うためにこの世に現れるための要であることが示される。そもそも仏法は出世間の法であり、王法は世間の支

(一) 龍宮の認識

そもそも龍宮とは何かということから見て行く必要があるだろう。神功皇后の遠征譚では、早満の二つの宝珠⁴⁶が登場し、それを用いて敵兵を溺死させるという話が展開され、二種の宝珠は神話の中で重要な意味を持つ。この宝珠を手に入れた場所が龍宮なのである。

山本ひろ子氏は中世の人々の龍宮の解釈として、鎌倉時代末の仏教書である『溪嵐拾葉集』(史料4)を用いている⁴⁷。

「一。何故ッ法滅ノ時経卷如納ニ龍宮ニ耶。一、龍宮ト者盡痴ノ源ハ無明也。

故ニ佛法性滅ノ歸ニ無明ノ本源ニ也。」(『溪嵐拾葉集』より一部抜粋⁴⁸)

ここからは仏法が滅びる時に経卷や教法は龍宮に納まり、このこととは無明・煩惱の本源に帰すこと⁴⁹であると述べている。すなわち、龍宮は経蔵としての役割に加え、煩惱が収まる場所としても認識されていたことがわかる。

(二) 沙竭羅龍王の性格

ここでは、『口決』の冒頭に登場する龍神⁵⁰、沙竭羅龍王について見ていく。沙竭羅龍王は、八大龍王や、観音二十八部衆の一つに数えられており、降雨の龍神として請雨法の本尊でもある⁵¹。ま

た、『法華経』巻五の「提婆達多品」(以下、「提婆品」)⁵²で登場する八歳で悟りを開いたという龍女成仏の龍女(史料5)は、この沙竭羅龍王の娘であるとされている⁵³。『口決』において、沙竭羅龍王には聖母大菩薩大多羅姫を始め四人の子供が存在する(史料1—①)。

「沙竭羅龍王ニ有四人ノ女子 (中略) 二ノ女子ハ香椎ノ聖母大菩薩大多羅姫…」(1—①)⁵⁴

すなわち、この『口決』においては沙竭羅龍王と大多羅姫は親子関係が結ばれ、大多羅姫から生まれる八幡神は沙竭羅龍王から見て孫という関係が結ばれていることになる【第2図】。

(三) 宝珠と龍宮について

次に宝珠と龍宮の関係について見て行く。『愚童訓』など神功皇后(大多羅姫)の遠征譚においては、龍宮から珠がもたらされる言説があり、この『口決』においても同様に龍宮より早満の二珠がもたらされたという記述⁵⁵がある。では、この珠というものは一体なぜ龍宮からもたらされたとするのか。龍宮と珠が関係する言説として伝空海筆とされる『御遺告』⁵⁶が参考になる。『御遺告』によれば、

氏は鎌倉幕府と頼助自身の血縁である北条氏一門が異国調伏祈祷といった国家的問題に対して愛染の加護を求めたという視点からの研究であったのに対して、本稿では、八幡神とその神話言説に結び付いた愛染明王が、藤原氏一門の繁栄や一族の地位を保証し、さらに権威の象徴として表されたという点に注目し、『口決』について考察する。

さらに、船田氏は本稿のように八幡神の理解に金胎不二といった密教の教義を用いず、武家の崇敬が厚い八幡神に密教で重視された愛染明王を同体視させて、力を増強させるということに力点を置いている。仏教の体現者としてどのように八幡神が理解され、そのために愛染明王はどのような役割を『口決』で果たしたのか、見ていく必要があるだろう。

この『口決』は、元々仏教と密接な関係を持つ八幡神が、中世になり密教の教義によって解釈されたという点で重要である。後述の愛染明王の例からも分かるように、中世社会では公武問わず密教僧による祈祷が盛んであった。応神天皇と同体視され、武家からも崇敬された八幡神とその神話が密教によって解釈されたことは、密教の影響力が増したことを示すものであり、『口決』はいわば時代を映す鏡とも言えるのではないか。

小括

以上、一章では、中世神道の概要と『口決』の史料性格についてまとめると共に、研究目的と先行研究について述べた。中世の神道は仏教的要素を多分に含んだ言説の中で解釈されてきたものであったということが分かった。なかでも八幡神は、古代から仏教と密接な関わりを持つ神であった。本稿で中心に取り上げる『口決』は、公権力に対する密教の影響力が増したことを神話という形をとって表しているものといえよう。

第二章 龍宮と八幡

本章では『口決』の物語の分析に入っていく。『口決』甲本では、主に大多羅姫（神功皇后）の遠征譚から八幡神の誕生について記され、『愚童訓』甲本なども通じる内容である。一方の乙本は、甲本の注釈をなしている。『口決』内容を検討する前に、神話と絡んだ龍神と龍宮に注目する。

第一節 龍宮と八幡神にまつわる言説

い。また、村山氏は八幡信仰そのものよりも如意宝珠に主眼を置くため、『口決』の宝珠の特徴が両部神道の『麗気記』等の影響を受けた可能性の指摘にとどまり、特に本稿がこの史料において重要視する藤原氏と八幡神の言説については一切言及がない。密教の解釈から捉えられた八幡信仰の言説や早満の珠をもたらす龍宮など史料中の具体的な言説を通して、『口決』が八幡信仰についてのどのような意義を持つ史料であるのか考える必要があるのではないか。

また、『口決』にも見られる愛染明王と八幡神の関係については船田淳一氏の研究が挙げられる。船田氏は『八幡講秘式』という神祇講式に着目しており、要点をまとめると以下の通りである。

① 『八幡講秘式』は、四代執権北条経時の子で、時頼の甥にあたる頼助が弘安九年（一二八六）に作成したものである³⁹。

② 『八幡講秘式』では、武家の本尊としての八幡神と愛染明王に本地と垂迹の関係が結ばれ、次に仏舍利Ⅱ宝珠を介して弘法大師と結ばれ、さらに弘法大師の前身は天照大神とされ、四尊一体が説かれる⁴⁰。

③ 鶴岡八幡宮には「長日座不冷本地供」という頼助が創始した八幡

の本地仏供養の儀礼があり、『八幡講秘式』はその祈祷空間において常住物として伝来したものであるとしている⁴¹。

船田氏は愛染には調伏の効験があり、この愛染を本地とすることによって八幡神の靈験の増強を狙い、さらに弘法大師や天照も講式に取り込むことで、異国襲来に対する幕府の調伏祈祷要請に応じたものとしている⁴²。『八幡講秘式』の本地愛染説等の同体説が形成された所以について、一つ目に相模金沢の称名寺に真言系の神仏同体説を説いた神祇書が多数伝来し、それらが鎌倉にもたらされたこと⁴³。二つ目に鎌倉に伝来した室生の舍利信仰が北条氏と幕府の安泰を祈るために用いられ、特に頼助以降、舍利と一体化した天照信仰が幕府の宗教儀礼の場に頻繁に現れるようになったことを指摘している⁴⁴。そして、舍利と神祇説を融合した儀礼を鶴岡八幡宮でいち早く実修したのが、頼助の『八幡講秘式』であるという評価をしている⁴⁵。

一方で、船田氏は、神話的要素に依ることなく、『八幡講秘式』という神祇講式に注目し、鶴岡における八幡神の変容を考察している。対する『口決』は、大多羅姫（神功皇后）の神話言説に密教をはじめとする仏教的解釈として中世神話理解がなされた史料であり、『愚童訓』等とも異なる八幡神の姿が形成されている。また、船田

二点目にこの『口決』では、中世において重要視された尊格である愛染明王と八幡神を同体視する言説が登場するが、史料上の言説はどのような論理展開が行われ、『口決』においては如何にして同体と理解しようとしたのかを見ていく。また、そこから、後述の船田淳一氏(二〇一一)の『八幡講秘式』において定義付けられる八幡神と『口決』における八幡神の相違点について見ていく。³³

三点目に『口決』において八幡神はどのような尊格として捉えられているのかという根本的な問題を明らかにすることである。特に、史料中に何度も登場する藤氏の言説の意味について捉えることがこの考察の核心になるだろう。一般的には八幡神は源氏が氏神として崇敬していたと認知されているが、『口決』においては、八幡神の誕生と藤氏の由来を関連付ける言説が登場する。源氏と結び付ける理解からすると、特殊な事例であり、これまであまり指摘されてこなかった視点といえる。

第五節 先行研究

今回見ていく『口決』を取り上げた先行研究として、先述の村山修一の「如意宝珠と神道」が挙げられる³⁴。村山氏はこの論考で、主に『念誦作法』と『口決』を取り上げ、それらに共通する重要な教義として、如意宝珠を八幡神の神体としてあがめる点を指摘し³⁵、

真言密教と宝珠信仰の関わりに主眼が置かれている。村山氏の論点は、以下の三点にまとめることができる。

① 『託宣集』と『愚童訓』の言説上にも如意宝珠が登場し、『託宣集』では神体的靈物として宇佐宮に祭られた早満の珠と如意宝珠の観念が共通し、『愚童訓』では言説上の宝珠が室生の宝珠と繋がりが見られるという指摘³⁶。

② 神護寺や仁和寺といった真言系寺院における八幡関係の宝物の由来と伝説、空海が渡唐の際に宇佐へ参詣したという史料から読み取れる真言密教と八幡神の因縁についての指摘³⁷。

③ 『口決』や『念誦作法』に表される宝珠に関する言説が三輪流神道や両部神道の『麗気記』の言説に通ずる点が見られるという事例を起点に、密教神道と如意宝珠の関わりについての指摘³⁸。

以上の三点である。村山氏は『愚童訓』や『託宣集』に見られる八幡神と如意宝珠の因縁や真言密教で重視された室生の宝珠と龍の話については掘り下げられている一方で、『口決』がどのような八幡神を創造しているのか、この史料の意義については言及されていない

系譜について阿蘇・住吉・香椎・大隅・宮崎など九州における八幡関係の諸社の縁起を交えながら説明している²⁶。

「力利天竺。震旦。日本。竜宮之生已千變万化无量无边之道。」（『託宣集』名卷二より一部抜粋²⁷）

「如阿蘇縁起者。（中略）此八幡者竜王為外戚祖父矣。」（『託宣集』名卷二より一部抜粋²⁸）

このように、八幡神を龍王（龍宮）の系譜に繋げる記述が見られ、『口決』の言説が『託宣集』の影響を受けた可能性が示唆される【第2図】。

以上、『口決』の記述と『愚童訓』や『託宣集』の記述例を比較し、内容が似ている点が見られた。『口決』が影響を受けていたとすれば、両者の成立年代や村山氏が推定した徳治二年（一三〇八）よりも下った十四世紀中頃から後半の成立と考えるのが自然ではないかと考えられる。

また、作成者について、村山氏は『口決』と筆跡内容が一致するとしている『念誦作法』の奥書には浄雅という人物と蜜華庵という記述があることに注目している²⁹。『念誦作法』に見られる八幡神

〓如意宝珠〓室生龍神という三種一体の思想は三輪上人慶円の流によって形成され発展したという指摘はあるが、具体的にどのような人物であるかは不明としている³⁰。ただし、『口決』に東寺流や空海に関する記述がある点からすれば、真言系の僧が作成に関与したことは間違いないと考えられる。

また、金沢文庫の『口決』には写本があり、現在早稲田大学図書館に所蔵されているものが確認できる³¹。旧蔵は荻野三七彦という学者で、写本には『口決』に加えて村山氏が示した『念誦作法』の写しも収録されている³²。

第四節 研究目的

研究の目的は、次の三点を明らかにすることである。

一点目に、『口決』における八幡神と龍宮の意味について考察することである。中世における八幡信仰に関する史料として代表的な『愚童訓』等において、応神天皇（八幡神）の母とされる神功皇后が早満の珠を手に入れた場所として龍宮が理解されていることが多い。一方で、『口決』においては、珠のほかに法華経と般若経の二経を合わせて手に入れるという記述がある。経典を手に入れる話の付加には、どのような意味があるのか、それを考えることは『口決』における八幡神の解釈それ自体に迫ることにも繋がる。

創建によって顕著になっていく。前九年の役の後、康平六年（一〇六三）には、相模国由比郷に石清水八幡宮を勧請し、社壇が設けられた¹⁵。『吾妻鏡』にも、八幡神をもって氏神とする思想が表れるように、頼朝は八幡神への崇敬が深く¹⁶、頼朝は治承四年（一一八〇）に鎌倉の由比郷から現在の鶴岡八幡宮の場所に遷座させた¹⁷。頼朝をはじめとする源氏の八幡信仰によって、源家の氏神に過ぎなかった鶴岡が、源氏の氏神として崇敬され、天下の神社となり、武神として崇敬されるようになった¹⁸。このように、鎌倉時代に入ると鶴岡八幡宮を中心に、源氏や武家の八幡信仰も盛んになっていったのである。

第三節 『八幡大菩薩口決』の史料性格

ここでは『口決』の書誌についてまとめていきたい。まず、この『口決』が収録されている「金沢文庫の中世神道資料展」の図録によれば、金沢文庫には『八幡大菩薩口決』という書名を持つ史料は三帖存在しており、解説によれば内容は二つに分類出来、この図録においては甲本、乙本の仮称で区別している¹⁹。この三帖というのは、甲本が二つと乙本が一つの計三帖という意味である²⁰。本編では『口決』という史料に記された内容は二種類だけであると考え論を進める。

次に成立年代については『口決』に記載がないが、村山修一氏（一九八三）の「如意宝珠と神道」²¹によれば、氏がこの論考でとりあげた『八幡大菩薩念誦作法』（以下、『念誦作法』）の筆跡内容から、鎌倉時代後期の徳治三年（一二三〇）頃ではないかと推測している。氏は史料の筆跡や宝珠に関する言説から考察しているが、本稿では『口決』の尊格関係の記述から改めて成立年代を考察する。

まず、一点目に注目するのは、大多羅姫と、同じく沙竭羅龍王の娘とされる宝満大菩薩との関係である。金沢文庫に所蔵されている『竈門山宝満大菩薩記』²²において、かつて大多羅姫の姉とされていた宝満大菩薩は、『愚童訓』では大多羅姫（神功皇后）の妹とされ、相対的に地位が低下しているという指摘がある²³。『口決』も『愚童訓』と同じく、大多羅姫の妹（龍王の三女）という位置付けになっており、『愚童訓』等の影響があったと考えるならば、同時代もしくは『愚童訓』以降に成立したと考えるのが妥当であろう【第一図】。

二点目に、『口決』において、八幡神は龍王の娘である大多羅姫の息子として生まれたとされている。『八幡宇佐宮御託宣集』（以下、『託宣集』）²⁴において、追補されたと考えられている「我巻一」と「名巻二」²⁵のうち「名巻二」には、八幡神（応神天皇）が龍宮の生まれ（龍王の系譜）であるという記述が見られ、八幡神の

す概念として、「中世日本紀」あるいは「中世神話」という視座が存在する。前記の伊藤聡氏が述べているように、中世の神学は簡潔に言えば仏教的要素が多分に含まれた言説であり、その多くは記紀神話の仏教の要素を交えて解釈したものである。「中世日本紀」は、仏教的な世界観の中で日本を位置付け、解釈するテキストであり、「仏教の根源は日本」であり「日本こそが仏教の中心」であるといった理解へと導いていくものである⁶。このように神を仏教的な解釈で理解するという手法によって膨大な説が形成されていったのである。今回取り上げる『口決』においても、神功皇后の遠征譚と八幡神の誕生という言説に仏教的解釈が加えられることによって、多様な言説が形成されている。

「中世日本紀」は大胆な神格の置き換えや密教的な解釈が行われ、手が加えられたものであるから、近世の神道家やいわゆる「古代神話」が成立した近代歴史学から批判の対象とされてきた⁷。

しかし、「中世日本紀」をはじめ中世神道のテキストを荒唐無稽として、批判するのではなく、これらのテキストを作成した宗教者の意図や当時の思想を反映する点で重要な史料と考え、正当な評価を与えるべきである。本稿もそのような視点に立って『口決』の解釈を進めていく。

第二節 中世までの八幡信仰の概要

(一) 八幡神とは何か

ここでは八幡神について簡単に説明する。八幡神は宇佐氏・辛島氏・大神氏の三氏族の信仰が互いに接触や融和することによって神格が形成されたと考えられている⁸。その後、幾度かの遷座、放生会⁹の成立などを経て、神龜二年（七二五）に現在の宇佐神宮のある小椋山の地に遷座した¹⁰。もともと、八幡神は仏教との関わりが強く、それを如実に表す有名な事例が東大寺盧舎那仏造立時の託宣である¹¹。この盧舎那仏造立に伴う八幡神の動きは、聖武天皇による記紀神話の神とは異なる新しい国家神話の創出として理解された¹²。さらに八幡神は、大菩薩号を授かり、仏教との関係性は益々深まったといえよう¹³。また、八幡神には大江匡房の記述を初出として阿弥陀本地説が説かれ、それ以前からも釈迦説や観音説が説かれていた¹⁴。

(二) 源氏と八幡

第三章では、『口決』における藤原氏の言説に注目するが、一般的に八幡神は源氏と結びついて語られることが多い。代表的な言説として、八幡太郎と称された源義家の話が有名である（史料3）。義家の話のように源氏と結び付けられていく八幡信仰は、鶴岡八幡宮の

中世における八幡信仰 — 『八幡大菩薩口決』を中心に —

松崎 恵哲

はじめに

宇佐神宮や石清水八幡宮をはじめ日本全国津々浦々点在する八幡社。特に、中世においては元寇を一つの画期とし、国家守護神として八幡神は盛んに信仰された。『八幡愚童訓』（以下、『愚童訓』）¹をはじめ、八幡神に関する言説が記された中世神道は沢山あるが、本稿はその一つ『八幡大菩薩口決』について論じる。それに先立ち、中世の神道をどのようなものとして捉えるべきなのかについて伊藤聡氏の明快な問題整理がある。簡単にまとめると次の通りである。一点目に「神道」というものは歴史的に形成されてきたものであり、古代、中世、近世、近代と時代ごとに異なった様相を呈していたことが近年の研究で明らかになっていること²。二点目に、中世神道の本質は神仏習合、本地垂迹的なものであって、仏教的要素を除外し神仏分離に至った近世・近代の神道にとって、乗り越えられるべき過去の信仰であり、常に神道研究や神祇思想研究の本流からはず

れたものだとしていること³。三点目に、中世は基本的に正統であるかはっきりしない時代で、多様な説が拡散し、数多の異伝が作り出されたこと⁴。

以上のように中世における「神道」は、近代においては排除されていく対象であった仏教的な要素を以って、神の理解が行われていた時代であり、このような解釈方法から様々な言説が生み出されていったのである。今回注目する、八幡神は特に仏教との関係が非常に深く、もはや仏教抜きには語ることができない尊格であり、私はこの八幡神に関連する言説に注目することで、仏教による神の解釈をより深く捉えられるのではないかと考える。特に今回は金沢文庫所蔵の『八幡大菩薩口決』（以下、『口決』）という史料に焦点を当て、中世の八幡信仰について見ていく。

⁵ なお、引用部分など一部を除き『口決』の表記に基づき表記する

第一章 中世神道と『八幡大菩薩口決』

第一節 中世神道とは何か

主に記紀神話をベースに、中世の解釈の中で生まれた言説群を示

立命館京都学 優秀卒業論文集 2021

2022年7月1日 発行

編集・発行

立命館大学 文学部 人文学科 地域研究学域 京都学専攻
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

印刷

中西印刷株式会社
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル西大路町 146 番地